
千の瞳の王

空高おまめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千の瞳の王

【Nコード】

N4846C

【作者名】

空高おまめ

【あらすじ】

工業化と資本化で魔法を忘れた国、永遠国。この国でいきなり起った国王軍の暴走、しかしそれは陰謀だった！？

陰謀に巻き込まれ逃亡した元王子・瑠璃と陰謀で多くを失った農家の娘・空呂。

荒れたこの国で自らの運命を切り開こうとする二人。

立場の違う二人の再会は何を生むのか？

それぞれの意志が陰謀のすべてを明らかにすべく集い始める。

空席の王座、陰謀を巡るファンタジーです。恋愛とさまざまな葛藤を絡ませながらの長編になる予定

第一話 空呂

「空呂そろー！」

高くてよく通る少女の声が紅花畑に響き渡る。まだ初等学校を出る
か出ないか程の年の頃だ。

畑にいるはずの妹を呼ぶその少女は色素の薄い金糸の髪を強まっ
てきた風にたなびかせながら見慣れた畑を見渡した。

この地方の地場産業である紅花べにばなの苗が等間隔に作られた畝に行儀よ
く並ぶ畑は緑が春の陽射しにキラキラと映えて美しい。

「空呂そろー？ どこにいるの？」

一向に姿を見せない妹の名前を今一度呼びながら少女は困った顔で
畑に分け入る。良く茂った紅花は草丈もそれなりに伸び始めていて、
人がしゃがめば見えにくくなるぐらいには高い。

「なあーに？」

二回目の呼び声にようやく遠くから声がかえてつきた。同時に畑の
中から線の細い灰髪の女の子がすつくと立ち上がる。

「空が曇ってきたから雨が降るって。父さんが家に帰るように言っ
てた！」

姉が妹にに叫び返すようにして用件を伝えた。ざざああ、と風が畑
を渡る。

妹は判ったと大きくうなずくと誰かを探すようにあたりを見回した。
しかし探し人は見つからないようだ。

仕方なし、とでもいうようにかすかにため息をつくと彼女は脇に置
いてあった肥料入りの籠をその小さな腕に抱えるとつま先で精一杯
背伸びをしながら叫ぶ。

「判ったー。港兄こうにい呼んでからすぐ行くー」

少女は姉にそう答えると手を振ってからくりと畑の奥に向き直りそのまま駆け出した。

探しているのは旧知の仲の幼馴染で居場所の大体の見当はすでについている。彼がいる場所は十中八九山ぎわのため池だ。

紅花の畝の間を細い体でそつと通り抜けてそのまま畑の向こうのあぜ道に出た。少女はなおも山の手に進んでいく。

姉妹はまったく正反対の容姿をしていた。

姉の名は伊呂^{いろ}。なめらかで真っ直ぐな金の髪と涼やかなアイスブルーの瞳をしていた。背はほとんど妹と同じだったけれどかすかに一つ違いの妹の方が高いのを彼女は意地でも認めたがらない。

頭が良くてお姉さん気質なのは活発すぎる妹の面倒を小さいころから見てきたおかげかもしれない。

妹の方の名前は空呂^{そろ}といった。灰色の巻き毛で、姉と比べられるとやはり一見地味に見られてしまう事が多かったけれどその瞳は誰もが息をのむほど美しい紫^{あお}がかった藍をしていた。

活発で明るい性格は姉妹二人共に同じだったけれど、敢えて言うならば、空呂の方が野心家で研究熱心な一面があった。言い方を変えれば驚くほど好奇心の強いともいえるかもしれない。

二人ともともと賢い子だったし、よく勉強もした。おかげで学校では子供たちに頼られる存在でもあったし、その親やほかの村人からも好かれていた。

姉妹は両親とともに時雨谷^{しぐやに}一族の領地の端お山間部の小さな村に住んでいる。

学校と小さな病院と後は地場産業の紅花の畑ぐらいしかない小さな村だ。だが、村人たちは互いを家族のように思いあっていて居心地

はとても良い。

豊かな自然とおおらかで明るい人々に囲まれて空呂は十歳、伊呂は十一の春を迎えていた。

空呂は紅花畑の畔道を通り、ため池の淵で今日も魚釣りに興じる港いづを迎えにいった。

淵の側に空呂そらが後ろにいることも気付かず釣糸をいじる港いづの背中が見える。

痩せた体に少しアンバランスな長い手足は最近になってめきめきと成長したものだ。茶色くて柔らかそうな猫っ毛が風にふわふわ揺れている。

空呂は手に持った籠をその辺にぽいつと放り出すと「港兄いづにい！！」と叫んで、その背中に飛び込んでいった。

港はいきなり重い塊に突撃され、そのまま勢いづいてあわやため池に落ちそうになる。

奇声をあげながら何とか踏みとどまると大きな声を出して自分にしがみついた少女を怒鳴りつける。

「空呂ッ！ なにすんだよー！ 危うく池に落っこちるとこじゃないか！」

唐突に突進してきた空呂がよほど痛かったようで、顔をしかめながら港いづは空呂を引きはがそうと躍起になってもがいた。

港いづは空呂たちの隣に住む御近所の家の子で歳は十三歳。

歳が近い事もあり、必然的に小さい頃から彼は二人と兄弟のように触れ合ってきた。あまりに近すぎて姉妹が兄とまで呼ぶ始末だ。

つい先日まで小さかった身長もここ二年で姉妹を抜かして三人のなかで一番背が高くなった。温厚で優しく、いつも姉妹の喧嘩の仲

裁は彼の役割だ。

「御免なさい。痛かった？」

空呂は港の顔を見て少し悪いことをした気になって恐る恐る首をかしげながら尋ねる。

少年は幼馴染の上目使いかすかにたじろぎながら言葉を返す。

「別に大丈夫だけど。空呂は何しに来たんだ？ まだ任された仕事
中だろう？」

そして空呂の投げ出した肥料の入ったままの籠を顎で指す。

「あ、あのね。父さんが雨が降るかもだから帰って来いって」

港の指摘でようやく少女は自分の役割を思い出した。

慌てた様子で伝言を伝えながら空呂は遙か遠くでかすかに雷鳴が轟くのを聞いた。

子供たちが家に帰った後、父の予測通り空に一面真っ黒い雨雲が沸き立ち、日が暮れると大雨になった。窓硝子を雨は激しく叩き、滝のように伝う。

そんな外の有り様を部屋の片隅で港が膝を抱え込んだまま不安げに窓の外を見ていた。

「港兄、大丈夫だよ。小母^{おは}さんも、小父^{おじ}さんもちよつと遅れてるだけだもの」

伊呂が港を安心させるように囁いた。

だが、港はその後の夕食のすら気も漫^{そそ}ろといった風だった。姉妹の母が作ったごちそうも目に入らないらしい。

港の両親は村の代表として隣り村に出掛けていた。だが、夕方迄には帰って来る筈なのに港の両親はまだ帰って来ない。おそらくこの雨で足止めを食っているか、出発ができないでいるのだろう。たぶん港も判ってはいるのだが、外の様子を見るにつけ不安で仕方がないようだ。

「もしかしたら二人とも今夜中に戻れないかもしれないなあ。雨が強いから向こうにもう一泊していくのかもしれない」

港に言い聞かせるように空呂の父はいうとそつと港の肩をたたく。外の様子はさらに荒れ模様が変わっていく。

そうこうしているうちに時刻は夜半近くにもなっていた。

「もうあなたたちは寝た方がいいわ。雷もひどいから寝れないかもしれないけど、お布団の中に入ってなさい。港の寝室も用意しましたから今日はもううちに泊まりなさい」

母親が子供たちに言った。

港の体を抱きしめながら姉妹の母は「大丈夫よ」とささやく。

早く早くと空呂たちを急かしながら母は少し悲しそうにため息をつく。

「でも、こんなに雨が降るなんて。せつかく瑠璃様に来ていただいたのに、残念ね」

激しい雷雨は一向に収まる気配を見せなかった。

瑠璃様とはこの永遠国の現最高権力者である緑女王の一人息子のこ
とだ。

最高権力者はこの国では王の称号を与えられた唯一無二の指導者で百人の部族の長からそれぞれの個人的素質で選抜される。体力、知力、精神力、政治的センスなど、あらゆる面を試されようやく手に入るのが王の地位。辞任と特別委員会の一つである王座審議会が罷免しない限りこの地位は修身の地位である。

そこに賄賂や不正が介入する余地はない。公正、公平な試練でも淘汰されぬ本物の才人だけがその高みを知ることとなる。

辞任と特別委員会の一つである王座審議会が罷免しない限り、この地位は終身の地位とされ、その座に座る者はかして消えない栄誉を

手に入れるのだ。

また、王になることができる可能性を持つ者自体もこの世にたった百人しか存在しない。

百部族の各長である。

永遠国とわこくの百の部族とその領地を治める長の一族はその領地内の十八歳以上の民による選挙によって決められる。選ばれた一族は部族の最高指揮権を握り、時の知識人や有力者の主催する部族議会とともに政権を担うこととなる。

また、長を輩出する一族は選挙権を持つ人々のうち三分の一以上の不信任でその役目を罷免され、そうでないときはこれを世襲のものとする。

王座は、こうして選ばれた長たちのみがその座を争うのだ。

民主制と世襲、そして実力主義が絶妙にあいまったこの政治形態は、言うなれば、特異な形をした間接民主制であると言えよう。

他国に類を見ないこの制度の名は【王座民主制】という。

今、永遠国の政治を取り仕切るのは風見ヶ岡かぜみがおか一族の長、緑女王りょくだ。

歳は若いが国民からの信用は厚く、あらゆる分野に精通するその知識でもう十年近く王座をの務めを果たしている。就任当時こそ歳若い王に不安を抱く国民もいたが、今となっては名実共に素晴らしい王である。

早いうちに夫を亡くしたこともあり、その美貌や片親で息子を育てる母親としてのイメージも手伝ってか彼女の人気は強い。

そんな人気の王の一人息子である瑠璃るりが隣り村に来るというので村はその話題で持ちきりだった。

女王の息子とはいえ王座は世襲ではない。ただし八年後に彼が成人を迎えれば、おそらくすぐに風見ヶ岡の次期長として名乗りを承け

ることになるのは間違いない。

今回の訪問も後学のための外遊とのことだ。

空呂^{そろ}や伊呂^{いろ}もこの外遊お話を聞いて多分に漏れず浮足立った。

幼い姉妹にとつて首都や政治や王の話はなんだか難しくて遠いよその国の話みたいだった。が瑠璃という人物については二人も興味があった。

なんせ、二人と同じような年齢なのにすでに政治や法や経済の勉強にいそしんでいる貴^{あて}なる美少年なのだ。二人の豊かな想像力を彼が刺激しないはずがない。

どんな人だろう、どんな風に暮らしているんだろうと想像を膨らませるのが最近の二人の好きな遊びだった。

大人たちは大人たちで滅多に会えないだろう高貴なこの少年にぜひとも会いたかった。

結局、最終的には港の両親がほかの村人達を代表して隣村を挨拶の為に訪問することになったのだが、そこに落ち着くまでに多くの大人たちが喧々諤々の論争を展開したのは言うまでもない。

瑠璃に直接会えないことは大人も子供も皆判っていたが、それでも自分たちの大好きな故郷を見て欲しいという思いは村人一同で同じだった。

どこまでも続く春の紅花畑の上を山から吹き降ろす冷たい風が渡り、キラキラと優しい陽光が降り注ぐ。そんな光景が少年の心に残れば良い、そんなことをみんなで言い合っていた。

だが、残念なことに当日の今日の天気は午後からあいにくの雨。それもそこの雨でなく雷雨に風にと大荒れの嵐。手伝い兼代表者として隣村に向かった港の両親は予定通りに戻れない程の荒れ模様。

空呂の父は寢室のわきの雨樋^{あまどい}を濁流のように流れ落ちる雨の音を聞きながら嫌な予感に胸が騒ぐのを感じた。滅多に降らないような季節外れの大雨が何か得体のしれない運命を連れてきそうな気がし

て無意識に体がかすかに震える。

「嫌な予感がするんだ」

意図せず口から飛び出した言葉に隣の妻が少し驚いたように振り向く。

「予感？」

「うん。嫌な予感」

恐い顔で眉根を寄せる夫に妻はそつと歩み寄って囁いた。

「雨が降るとね、その次の朝は煌めくように美しいわ。紅花は雨がなくちゃ育たないのよ」

夫は妻の方を見やりかすかに嘆息する。少し力を抜いて小さく「そうだな」と呟いた。

夫婦が寝静まった家の中には外の嵐の音がくぐもったように聞こえていた。

ダンダン！ダンダン！

外にある厩の方の裏口が凄い勢いで叩かれた。

丑三つ時のことだった。

すでに寝室で眠りをむさつぼっていた父親は慌てて寝室を飛び出し扉に駆け寄る。

おかしい。

普段、家の主人でさえ滅多に使わない裏口からの来客など、今迄あった例が無いのに……。

大きな音に夫婦だけでなくすでに熟睡していた子供たちまでが廊下

に飛び出してきた。

「なんなの父さん」

空呂と伊呂がせつつくように尋ねるも両親は答えない。

夫婦は強い違和感を覚えながら裏口に近付いた。掃除を忘れて久しい裏口の汚れた曇りガラスの向こうにはかすかな灯りを持った人物がかすかに見て取れる。

「あなた。窓から見てみます。まだ開けないでください」

母親は近くのガラス窓に近づくとそこから外の様子をうかがう。

そして、次の瞬間驚いたように大声で叫んだ。

「あなた！ 大変！ 早く開けて！」

父親がガチャガチャと鍵を回す、錆びた鍵がカチンと小気味いい音を立て外れた。

キイ、と扉が開く。

そこに立つて居たのは港の両親だった。

子供たちは思わず息をのむ。

小父さんおじも小母さんおばも二人共ずぶ濡れた。おそらく体の芯まで冷え切っているのだろう、二人とも小刻みに震えている。

「どうした！？ どうしてこんなに遅くなったのに今夜中に戻ったんだ？」

空呂の父は二人を部屋に引きずり込みながら激しい語気で問うた。

港の父が息を切らせながら叫んで答えるその様子は本当に必死だった。

「瑠璃様が行方不明だっ！！」

「待って！ 父さん、どういう事？」港が驚いたように声をあげる。
「分かん。ただ、瑠璃様が滞在されていた部屋に置き手紙があったことから、自分で行方をくらませたみたいなんだ。まだ十歳でらっしゃるし、遊びのつもりなのかもしれんがこの雨じゃ下手なことしたら死んじゃう」

一瞬意味が分からず空呂は呆けた。誰かに説明をしてもらいたくてあたりを見回すが、姉も港も両親も衝撃のあまり完全に固まっていた。

最初に我に返った空呂の母が袖夫のを引きながら「あなた、探さない」と言った。

それに港の母親が、そうして下さいと答える。

妻の声に思考回路を回復させた父親がすぐに声を上げた。

「すぐに村の鐘を鳴らして皆を起こす！」

瞬時に奥の部屋に飛び込んだ父親はコートを受け取ると港の父と二人して防災用の半鐘台へと向かうべく家を飛び出した。

「私たちもいく！」

姉妹が二人してコートをとって部屋から飛び出れば目の前には母親が待ち伏せていた。

「駄目よ、危ないんだから！」

「大丈夫よ。私たち森の道はぜんぶ知ってるわ！」

「それに私たちだからこそ知ってる道もあるんだから！」

空呂も伊呂も港もついていくと散々母親たちに言ったが、結局子供たちは二人の母親を説得することができなかった。

しばらくすると村の半鐘が激しい音で打ち鳴らされる音が村中に響き始める。

「私たちも行きましょう！」

港の母親が姉妹の母親を急かす。

「ええ！ 行きましょう！ あなたたちは必ずここにいなさい。大人の人が迎えに来るまで絶対にこの家の扉から出ちゃ駄目よ！」
空呂の母は最後に釘を刺すことを忘れなかった。

そして二人が裏口を出る。

バタンと大きな音を立てて木の扉が閉まり、家には子供たちだけが残された。

先程までと変わることなく外の風雨の音が家の中にもかすかに響く。

「俺たちだって大人以上に役に立てるのにな」

最初に口を開いたのは港だった。悔しそうに口をへの字に曲げて窓の外を睨み付ける。

「この家から出るなんて、私たちだけ仲間はずれなんていやよ」

「俺たちだって瑠璃様に会いたいし助けたいのにさ！」

伊呂もぶつくさ文句を言う。

元からこういうわくわくする話は三人の大好物だ。深夜、雨の森で人探しなんてドキドキするではないか！

伊呂も港もそんな絶好の機会をみすみす見逃さなければならぬことが残念で仕方ない。

だがそんな中、空呂だけが静かにじいつと窓を見つめている。そしてそれに伊呂が気付いた。

「空呂は探しに行きたくないの？ 怖いのか？」

姉の問いに答えることなく空呂は居間の窓枠にそつと近寄った。

「空呂？」

港が再度声かけるとゆつくりと空呂は言葉を紡ぐ。

「あのさ。母さん、扉からは出るなって言っただけど窓から出るなどは言わなかったよねえ？」

そしてゆつくり後ろで呆氣にとられている二人に向き直る。

その美しい蒼い瞳はいたずらっぽい笑みを湛えたままキラキラと輝いた。

第一話 空呂（後書き）

四話までは過去の話になります。

五話目から本格始動になるとおもわれますが、宜しければ御付き合
いください。

第二話 声

深更。

見慣れたはずの道や周りの木々の様子は平時とは全く違う様相を呈していた。

大樹の幹ですらごとんと音を立てて揺れ、葉は枝か風で引きちぎれそうになりながらもなんとかくっついていて。バリバリと雷鳴が鳴り響き、森の小道は泥で水没していた。

雨のせいで、驚く程視界が悪い。余りにも湿気が高いせいで、息苦しささえ覚える。

――今、空呂たちが歩いているのはもはや使用用途の無くなった古い林道である。この村の地形は三面を山に囲まれた扇状地であり、川の下流の向きを除いた三方に、細い林道が縦横無尽に走っている。山菜を採りに行く為の道、木苺の採れる崖への道、用途は様々だ。

そんな道がこの周囲には百本近い数あるのだ。だから、人捜しも容易ではない。おかげで、村の人口だけでの搜索活動は困難な為、子供であろうが御構いなしに総力として探索に投入された。

彼等の歩いている道は、今から五十年以上前に代用の林道が整備され、もはや使用されてはいない。

ほんの五年前までは隣り村に繋がっていたが、それさえ豪雨によって崩壊してしまった。

いくら此の季節狼の活動範囲が狭くなり村人との接触が少ないとは

言え、歳はも行かぬ子供を夜中に山に放り込むなんて…、正気の沙汰とは思えない。

でも、人の命が掛かっているかも知れないのだ。

例え、瑠璃が自分で抜け出した様な馬鹿な奴でも、それで彼が無事ならば捜す意味がある。

空呂は今一度大きく空気を胸に送り込み、自分を元気づけるとライラック色に光る瞳を小道の先へと向けた。

「瑠璃様」

「瑠璃殿 いらっしゃいますか。」

暗い森に少女たちの声が吸い込まれていく。雨はますます勢いを増してきた。カンテラの微かな光が鬱蒼と茂った草木の間に滲んでゆく。

照らされるのは足元のみといった感じで一寸先は闇だ。無数に落ちる雨粒がカンテラの光を反射し、目の前に金色の針が散らばっている。

彼等の行く手に土砂崩れの跡が見えてくる、五年前に起きた例の土砂崩れだ。抉れた山の斜面がむき出しになっている。その先に、道らしい道はない。

「残念、空振りみたいね」と伊呂が港に小さく囁いた。
誰も居ない……。

確かに人影は無く、雨に濡れた妖艶な夜の森が彼等を包んでいるのみだ。

空呂は鬱陶しい雨粒を前髪から払いながら天を仰いだ。

ふと、何か人の声が聞こえた様な気がして空呂はハッと視線を山の斜面へ向けた。

聞こえた…間違いない！！

咄嗟にフードを後ろに払い除け、山の斜面に駆け寄る。

もう一度耳を澄し待つ……

滝の様な雨音の間に人の声が微かに交じった。

その瞬間、彼女の頭の中に“或る場所”が思い出された。

「空呂？」

伊呂が妹に声を掛ける。空呂は身動きもせずに瞳を閉じて集中している様だ。

「空呂？」

再び声を掛けると彼女が振り向いた。

そして、

「聞こえた…？」と問い掛けてくる。

勿論二人は何も分からない。

港も伊呂も何も言わずに居ると空呂は堪り兼ねた様に二人に

「今、声が聞こえたっ！！」

と叫び、元来た路を走り始めた。

「「空呂ッ！」」後ろから二人の声が追いかけて来た。それに「先に帰っててッ！」と叫び返す。

……もしかしてもしかすると…、

瑠璃様は“あそこ”にいるかも知れない！

だとしたら、瑠璃様を見つけられるのは私だけだ。そう思うと空田はますます速く走っていった。

第三話 瑠璃色は雨足と共に

冷たい雨粒が空呂の頬を打つ。心臓が高鳴る…。

少女は驚く程速く走っていた。

景色がその色彩を失い彼女の両端へ細切れになって飛んで行くようだ。

怖さも寒さも忘れ、ただ…ひた走っていく。

- - 空呂の秘密の場所、それは見晴らしの良い、山の断崖絶壁である。

丁度、先程の声はその辺りから降る様に聞こえた…。

若し、そこに瑠璃様がいらっしやるならば、空呂以外の村の人々は瑠璃様を見つけれないだろう…。

勝手な推測の上に打ちたてられたこれ又勝手な責任感は、少女を勇気付け、彼女の夜の闇に包まれた森へ対する恐怖を薄れさせていた。

- -

「えーっと。…此処だッ！」空呂はハアハアと吐息を乱しながら山の斜面を見上げる。

実に普通な斜面である。

他の人なら区別が付かないだろう。

そもそも、此の道は空呂以外の人間は踏み入らない場所だ。空呂だって、“秘密の場所”がある事を知らなければこんなところに立入る事もなかったらう。

少女はその斜面を見上げながら睨み付けた。

…なだらか、とは言え子供が登るにはきつ過ぎる。

斜面はこの豪雨でドロドロにぬめり微かな光にテラテラと不気味に光っている。

空呂は覚悟を決めて斜面に向かいあつた。濡れそぼったコートが重く感じる。

…登れるか？呼吸を整えて…

「1・2・3」

で飛び出した。助走を付けて傾斜に差し掛かる。

ヤバイ！

足元が予想以上に緩い！

でも、行くっきゃない。

足元を見ながら思いつ切り走る。ズルツと足がぬかるんだ泥土に沈み込み、ヨロつく。

その時、目の前に枝が右側に大きく折れた樹がみえた。

…あ、後少しだ…

そこから、身体を引き起こし、懸命に走る。彼女は何とか樹迄登る事に成功した。

乱れた息を整えて空呂はソノ樹の根元にしゃがみ込む。

右側にぼやけて見えづらいが平たい場所がひらけているのが確認出来る。

空呂の頭の上には差し招くように、折れた樹の枝が手摺代わりに伸びている。

彼女は、今一度深呼吸をして、斜めった斜面を横断する為に呼吸を整えた。

「よし。行くぞッ！」頭の横辺りの高さにある枝の手摺を握り、少女は飛び出した。

- 途端にベキョツと嫌な音がした。

手摺代わりになっていた樹の枝が朽ちて崩壊したのだ。不意に握っていたモノが斜面下へ滑り落ちた。

ソレを握っていた空呂迄も引きずり落とされる。

慌てて手を離して体勢を立て直す。雨が顔を激しく叩く。

後どれくらい距離があるのかと面を上げた時、空呂は視線の先に人影をみた。

「アッ！」

声が喉から漏れると同時に足元への注意が散漫になる。マズいと思った時には既に時遅し…、身体が泥土に沈んでいた。

上気した頬に泥が付く…。冷たい、寒い、恐い、落ちる…！

「た、助けてッ！誰かッ！」

精一杯声を張り上げた。

- ガシッ、手首とコートのフードを誰かに掴まれる。

「大丈夫ですかッ」

と、上から男の子の声が降って来て慌て空呂は声の主視線を向け

た。

可愛いらしい男の子が水色の綺麗なコートを雨に濡らし、少し乱れた漆黒の黒髪から水飛沫を飛して空呂を一生懸命に引き揚げようとしている。

…「有り難う…御座います。」

カチンコチンになりながら礼を述べる。

今し方、空呂は少年に引き揚げて貰った処だ。相手の目星はついている。

…瑠璃様、永遠国第二百二十三代王であらせられる、緑女王陛下の第一子である。

少女は緊張と寒さに体を打ち震わせながらゆっくりと口を開いた、

「あの…初めましてわ、私はっ！そ、空呂と言います。えっと…、瑠璃様ですね。」

「え、あ、はい。そうです。」

少年 - 瑠璃はそう答えた。

そして沈黙が訪れた。

二人共なにを言えば良いか判らない。空呂は困り切って瑠璃の顔を見た。

彼は空呂と同じ年の筈だが、彼は大分大人びて見えた。

母親譲りの美しい真直ぐな黒髪に、細かな水滴が煌めいている。整

った顔立ちは双方の親から受け継いだようだ。顔立ちにも、態度にも、何とも言えぬ気品がある。

そして、それらを強調するのは…今は亡き父親から瑠璃が最も顕著に受け継いだ綺麗な瞳だった。

ソレは空呂のよりも幾分か濃い色で碧の気が強く、月光を受け涼やかに光るそれは身震いする程に綺麗に見えた。

瑠璃色…

彼女はふと思い出したように顔を上げる、何時しか雨は上がり雲が空から退き始めている。

白く美しい月の光が二人を優しく包んでいた。

第四話 秘密の契り

空呂が、余りにも突然降り止んだ雨に少し驚きながら瑠璃に目線を戻すと、彼は自分の事をジッと見ていた。

空呂はたじろぎながらも「雨：止んでしまいましたね。」と声を出す。

「うん。そうだね。」彼は平然と答えた、平然と言っても突き放す様な感じではない。その声が彼女にはとても優しく聞こえた。

嗚呼：緊張なんてする必要無いじゃない。きっと：この人は私と対等に話をしてくれる。そう、まるで友達みたいに…。

「あのね！私、瑠璃君を捜しに来たの！！」空呂はニッコリと、彼に笑いかけた。

笑いかけられてびっくりしたのは瑠璃のほうだった。

この娘いきなり何を言い出すんだ？この娘は何故こんなに気安く自分に話かけてくるんだ？一体？瑠璃の中で色々複雑な感情が乱れ飛ぶ。

風見ヶ岡一族を率いる者の家系に生まれ、短いながらも十年の月日を生きて来た…。

そしてその間ずっと、“瑠璃様”と、呼ばれ続けていた。別に自分が特別な人間で無いのは自分でも判っていた。なのに同い年の友達でさえ、彼を“瑠璃様”と呼ぶ。彼にとってその言葉は大層居心地の悪い物であつのだった。

だが、同時にソノ敬称は彼が人々に風見ヶ岡の次期長として認められている、という証拠でもある…。そしてその呼ばれ方を嬉しく思

う事も多々在った。

・二つの気持ちがどちらともつかぬまま、何時もモヤモヤした気持ちでその名を聞いてきた。

が、見知らぬ少女からいきなり砕けた言葉遣いをされた時には流石に驚いた。馬鹿にされているのか、若しくは親しみを込められているのか？しかし、彼女にそれ程親しみを込められる様な覚えも無い。

急に怪訝な顔をした瑠璃に空呂は慌てて謝る、しかし、まだ瑠璃は釈然としない顔で目の前の少女を見ていた。するとその内、目の前の少女は何やら弁解を始めた。

「だ、だから…、そのツ！間違っちゃって！御免なさい。」

謝られても困る、怒ってる訳じゃない。むしろ…初めてで、戸惑ってるんだ。

「いや、気にして無いよ。びっくりしただけ、余りそんな風にいつてくれる人、居ないからね。」

瑠璃がそう言うのと空呂はホツとした様な素振りを見せてから「実は…瑠璃君と、友達になれるんじゃないかな。って思ったんです。」と、はにかんだ。

“友達になる”瑠璃はソレを心地良く受け入れられた。いや、むしろ彼の方が強くそれを望んでいたのかも知れない。

目の前ではにかむ少女を、“可愛い…”と、思ったのは何故だろうか…。そんな事を考えると、途端に小恥ずかしくなる。自分の感情に戸惑いながら彼は天を仰ぎ、「そうだね。きっと良い友達になれるよ。」と、小さい声で呟いた。

それから二人は、他愛ない話をした。そう、より新しい友達の事を知る為の様に。…それは、空呂にとっては宮廷と言う新しい未知の場所を知る良い機会になったし、また瑠璃は、農村の生活に付い

て、興味深い話を聞くことが出来た。そうする事で、出合ったばかりの彼等の中で御互いへの好奇心が高まって行くのも無理はなかった。

「ねえ、空呂。僕達ずっと、友達でいられないかな？」

瑠璃のいきなりな発言に少し驚きながらも空呂はニッコリ笑って、

「勿論よ！ 瑠璃君が帰っても、私手紙送るもの！」
と、いった。

その返事に瑠璃の顔にも満面の笑みが咲く。

「有り難う！僕：嬉しいな…」瑠璃は照れながらそう言い。自分の首に掛かった金の鎖を手繰り、その先についた緑の綺麗な石を引っ張り出した。

それは？と首を傾げる少女のまえに瑠璃は美しい輝石を捧げ持つ。

「何か判る？」

「判らないわ。なあに？」

不思議そうにその石を見つめる彼女に「此は王座の宝玉って言うんだ」といって石を手渡す。

「此の国の三至宝の一つかな」 瑠璃のその言葉に「ええっ！」と空呂は身を硬くした。慌ててそれを瑠璃の手に押し付ける。

- 三至宝とは、遙か昔、永遠国創立の時期に三大隣国から祝いの品として、贈呈されたと言う、三つ一揃えの宝石である。

一つは血の如く紅く燃えるルビーを用いたブローチ。

一つは若葉を連想させるようなエメラルドの首飾り。

一つは大粒のダイヤモンド、それは儀式様の王冠にあしらわれている。

今となつては廃れてしまったこの国の魔法文化を象徴する品で、どれも歴代の王が携え、守ってきた物だ。

「どうしてそんな物を私に見せるの」怪訝そうに首を傾げる空呂、

「うーん…と、三至宝にはね。言い伝えがあつてさ、それぞれ、宝石が象徴する物があるんだ。此はエメラルド、約束や契約…つまり契約の象徴なんだ、宝石には魔法の力がある、と言われててね、つまり此の宝石に何かを約束すればけして、それは破れないって言い伝えがあるんだよ。」

やってみない？ 誓いつてやつ。少し悪戯っぽく笑った瑠璃に空呂はニコツと笑いかけ、空呂も「いいね、それ…」といった。

びしょ濡れの二人は濡れた岩の上に座り、互いに向かい合つて座つて、二人の間に首飾りを置く。ごっこ遊びのはずが二人して緊張してしまふ。空呂が小さく瑠璃に頷いた。向こうも頷き返す。

あらかじめ決めていた台詞を二人で唱える。

「私達は、先代の王から託された、古の宝石に二人が永遠に良き仲で在る事を誓います。」

彼等は同時に宝石に手をやった。柔らかな月の光を浴びて、深緑の輝石は二人の手の下でキラキラと反射した。

空呂が宝石から瑠璃へと視線を上げると、急に瑠璃が「空呂の瞳の色合いつて綺麗だ。」と、呟いた。空呂は赤くなりながら首を竦め

て「私なんかより、瑠璃の瞳の方が素敵な色だと思うわよ。」という。「僕は空呂だと思うな！」瑠璃も負けずに言い返す。

互いにはにかみながら二人はそれぞれ自分の瞳にそっと、手をやった。

雨の山に踏み入って瑠璃を探したこの夜の事は空呂にとって今でも変わることのない良い思い出だ。

下山後に二人して大人たちにこっぴどく叱られたことも、そのあとで皆で食べたクルミパンの味も、何もかもが特別な思い出なのだ。

あれから七年、十七歳になった空呂は今でも、たまにあの時の事を思い出している。

偶然に出会った彼らの友情は約束どおり、文通という形でほとんどの人々に知られることもなく密やかに続いている。

もう一生会うことも無いかもしれない、互いにそれはわかっている。それでも、空呂は手紙の最後に毎回書き添える、「また会えるといいですね。お元気で」と。

それはささやかな希望であり、書き添えた本人ですらそれが現実のものになるとはおもっていなかった。

だが、

二人が出会ってから7年後の秋、二人があずかり知らぬところで運命の針は回り始めていたのだった。

第五話 正論の痛み

「眠い…」頭にもたげた生理的欲求を無理に押さえ込み、空呂は目を閉じてこめかみを揉んだ。ここで寝るわけには行かない。

永遠国、時雨谷の領地が構える群都“星陽”…。ここにそびえる名門学園、“時雨谷星陽学園”。ここに空呂は毎日通っている。

今は空呂の嫌いな物理の授業中だ。教卓で小太りな男性教授が教鞭をとっている。ややこしい公式を書き留めながら、浅く溜め息を付く。早く終わらないだろうかと時計を睨むがまだ半分終わった処だ。空呂はますます大きな溜め息をついた。

「あはは。空呂は物理大嫌いだもんねー。」隣りで少女がストリートショートの茶髪を風になびかせながら空呂をからかう。

彼女の名は光^{ひかり}、空呂の親友の一人だ。先程、物理が終わった途端逃げ出すように講義室を飛び出した為だ。

――十六歳になった空呂は“星陽”へ学校に通う為に一人村を出て来た。姉の伊呂と違い野心家の気があり、研究熱心だった事が功を奏したのか、彼女は博識で賢い娘に育ち、みごと特待生になったのだ。そんなこんなで空呂が星陽に来てから早、一年が過ぎて居た。…

「良いのよ。物理なんかどうでも…。最低単位さえ取ればね。」不貞腐れた空呂はフンツ、と毒づく。

彼女等は優しい秋の斜陽が差し込む明るい渡り廊下を歩いて、次の授業を受けるべく、西棟に向かった。

彼女達が講義室に来ると一人の男子生徒がもう一人の男子生徒に『コネット』と言う盤状ゲームを申し込んでいる処だった。ルールは単純な物で、チェスに似たルールが採用されて居る。違いはポイントストック制がある事で、好きな時に自分が獲得したポイントに応じて宣言した相手の駒を取る事が出来る事だ。

- 今、対決を申し込まれた、海かいと言うその生徒は、優秀な生徒の多い此の学校で二年生のトップを張っている凄い奴だ。例の『コネット』での勝負でも、連戦連勝中だ。お陰で空呂のクラス内外ではすっかり『打倒・海』が叫ばれている。

「ありや。負けるわよ」

光がクツクツ笑いながら横目でボードゲームを観戦している。

「関係ないわ、誰が何を言おうとあたしはやらないもの！」そんな光に空呂は出来るだけ味気なく言い捨てる。

此の学校で才女と呼ばれる事は嬉しいが、それをだしに無理矢理、勝負をさせられるのは気が進まない。

大体、それとこれとは全く違う基準の物では無かろうか？成績が知的ゲームの実力と必ずしも正比例するとは思われない。

空呂がそんな事をぶつくさ呟いていると

バン！と派手な音がして講義室の扉が開いた。

「授業にするわよ。ほら、ゲーム片付ける！！」

綺麗な女性が教室を闊歩する。

「教科書のp256開けて！」大声で呼ばわりながら、生徒達に笑い掛ける。

美しいその女性は歴史担当の女教師、由宇奈先生ゆづなである。

彼女の声に不満を垂れながらも生徒たちは彼女の言う事を聞く。

空呂はこれこそ由宇奈先生の人徳の成せる業だとふんでいる。由宇

奈は空呂の尊敬する人物の一人だ。
そして、そう思っているのは空呂だけではないに違いない。

彼女の授業は面白い、まさしく歴史のスペシャリストだ。得意科が歴史な空呂にとって此はとても嬉しい事だった。

そして、今日は皆、特に耳を澄せて先生の話聞いて居る。…理由は授業内容だ。

栄光の第十四世紀、その時代の立役者、麗しの十六夜姫が今日の授業の範囲である。永遠国の歴史に置ける醍醐味、と言っても過言では無い。勿論の事ながら、当の由宇奈先生も一段と気合いが入って居た。

授業も半ばに差し掛かった頃だった。

「じゃあ、十六夜姫が、王位に就かれた時彼女が国民の前で明言した有名な台詞を知ってる者は？」

いきなりに由宇奈が授業を生徒に投げた。…普段は無い行動だ。少し驚きつつ、空呂は手をピシッと天に向かい突き上げる。

そのヘンの情熱に関しては誰にも引けを取らない。

流石に、質問が質問で深入りした内容なので、手をわざわざ挙げてまで答える猛者は余り居なかった。

手を挙げたのは空呂を含めてたった三人。
海、モノ静かな女生徒、そして空呂…。

彼等の顔を見比べて先生が空呂を指名する。嬉しくて、ニッコリしながら

「十六夜様は千里眼を使つて十四世紀を素晴らしい国にする事を約束なさいました。」と述べる。先生のは空呂の解答に満足した様に頷いた。

「良く出来たわね！」と御済み付きだ。

隣りから光が

「よかつたわね。」と囁く。

しかし、

その時、海が自分をジツと見つめている事に空呂は全く気付いて居なかつた。

翌日の事だつた。

間も無くやつて来る学祭に向けた話し合いが長引き、空呂はすっかり暗くなつた校舎から抜け出すべく、月光に照らされて白亜に輝いている渡り廊下を歩いていた。

彼女が中庭池のほとりでその後ろ姿を見つけたのはもしかしたら必然的だつたのかもしれない。

ソレは海の背中だつた。彼の姿は少し淋しそうだつた。

「海君だよね。」取っている授業は幾つか被つて居るが、海とは余り面識が無い。海は空呂の声にくるりと振り向いた。

「君は…才女空呂か、今晚和。」

「今晚和。こんな処で何を？」ゆつくりと近付きながら海に聞いた。

「…いや、別に。」平然と海は答え返す。 - 別に - それが何か引つ掛かつた。

君こそ何を？と聞かれて事情を説明すると、ご苦労様と労われる。半月が滲む天空の下、彼等は向かいあつた。

海は鼻筋がスツと通り、少しツンとした雰囲気を漂わせていた。こげ茶色の繊細な髪が光で透き通つて明るい茶色に見える。

空呂が何を言ふべきか迷つて居る内に海は思わぬ場所から話を切り出してきた。

「昨日、由宇奈先生に答えてただろう？ あれ…間違つてるぞ。は？」

何の話だ？

「あの方が即位式で国民に告げたのは、ソレだけじゃない。」
海は目線を上へ泳がせながら呟く。

「彼女の十四世紀を豊かにするつて言う宣言は、正の宣言だ。でも、負の宣言を君は知らない。歴史的にもその宣言の事実抹消されてるしね…余りにも衝撃的だった為に。」

「負の宣言？悪い話だったの？」

「まあね。…君は博識だけど、物ごとを見る目が偏ってるね。世の中は美談ばかりじゃないんだから、人間は正ばかり追求しては生きて行けない。」

彼の口から出てくる言葉が余りにも正論で、悔しいが反論出来ない。

片方を知ってるだけで自惚れ無い方が良い。

そう言つと、海は空呂の脇を擦り抜けて校舎の影に消えていった。

後に残つた空呂は悔しさで唇を噛みながらそれを見送っていた。

第六話 女王（前書き）

話が大分前後してしまつてすみません。
完結はさせるつもりなので、応援宜しくお願いします。

第六話 女王

翌日

…空呂は徹夜のせいと海とのやり取りで心身共に疲労困憊だった。

余程深刻な顔をしていたらしく、光に、何時に無く本気で心配された。

「大丈夫。」と、明るく答えるも、嘘だと見抜かれてしまう。

結局、詰め寄られて昨日の海とのやり取りを吐いてしまった。

「何ソレ！アイツ何様？」

勿論叫んだのは光だ。何だかんだ、言っても彼女は空呂の大切な親友であり彼女の為に憤ってくれる優しい人間なのだ。

「きつと嫌がらせよ。空呂が頭良いから、抜かされるんじゃないかとヒヤヒヤしてんのよ！アンタ勉強馬鹿はほんとに限るわよ。」

海に向かい一方的に戯言を吐き散らかす友人を宥めすかして黙らせる。

「でも、十六夜様の台詞にはどの文献にも省略が掛かってて、完全な文が載って無いのよ。彼の言ってる事もあながち嘘じゃないかもしれないわ。」

「ちよいと、アンタ指摘されて文献わざわざ搜したの？」 光は完全に呆れている。

「…此所にも勉強馬鹿がいたわ。って言うか、大体、」 そんな時間にそんな処居る事からしてオカシイでしょ。

指摘されて気が付く、心当たりは全く無い。確かにオカシイ、学校に居る筈の無い時間にそこにいた彼。昨日の光景がよみがえる…

美しく水面に映る月、風が優しく髪を揺らす。そして…

そう、彼はおごって居たかもしれない…。でも、あの背中は…
彼は…、寂しそうだった。

- 昔の人は言いました。
「失敗は後になって気付く物、失敗は後になって嘆く物」

永遠国の政治の中心にて、首都、“香都”…遠い昔より名だたる王が政治を取り仕切り、その輝かしき歴史に足跡を遺してきた…。都は最中心部に国の要である王宮を擁し、道は縦横無尽に走り、人々はいいつも表を行き交う。

民はそんな日々 zu 置ける、国家の安泰を王の御陰としながらも当然の事と疑わなかった。

しかし、彼等の想像を絶する出来事は既に城の内部で密かに暗躍を始めて居たのである。

丁度、一週間前の事…

その日もいつもと同じ様に陽が西の山に落ちてゆく処だった。その部屋的主人は此又いつもどおりに机に向かつて居た。サラリと目の前に降って来た美しい黒髪を耳に掛けながら彼女は身体を起こす。

心地良い沈黙の中に身体を浸し、ゆっくりと窓の外を見やった。

中庭で使用人の子供達が高い声で笑い合い、走りまわって居た。彼等は斜陽の中で紅に染まっている。同じ光が此の部屋を照らしている。彼女は顔に幸せそうな微笑みを浮かべそれを見ていた。

…やがて太陽は沈み、いつの間にか、紅い残光はほんのりと感じられるだけになった。

彼女は再び書類に目線を落とし、謁見の書類を選び分けて御目当て

の紙を引つ張り出す。

此の人の名は緑…、そう、永遠国の現女王である。…万年筆を使いサインを加える音だけが、広く清潔な王の居室に響く。

女王は金糸で縁取られたワンピースををゆったりと着込み机に向かつて居た。十七の、息子が居るとは思えないほど、優美な女性である。

しかし、美しいだけでは無い。王の持つ威厳が彼女をより聡明、寛大に魅せて居た。

-
「陛下。」

戸口からの急な呼掛けに女王はハッと後ろを見やった。数十センチの隙間から誰かがコチラを見ている。一瞬、覗かれたのかと思ったが、思い出せば、風の通り道として自分が開けて置いたのだった。

「どなたかしら？」

席を立ちながら女王は扉に近付いた。キイと乾いた音がして扉が開く。

そこに居たのは、背の高い男だった。

「これは…^{まなひ}学様ではありませんか。どうかなさりましたか？」

王は優しく微笑んで相手を部屋に通した。

「おかわり無い様で安心致しました。」

学と呼ばれた男も愛想良く返事を返す。

-

「今日は、どうなさりましたの？いらっしやるなんて存じませんでした。」

「ええ。少し…陛下に用件が御座いまして。」

「用件？」

部屋の端の小さなストーブの上に水を入れたポットを掛けながら緑は首を傾げて、

「どうぞ、御掛けになつてくださいませ。」
と、相手にソファを薦める。

「御兄様と最後に御会いた時の事を思い出しました…。御二人共
良く似ていらしゃいましたものね。」

「ええ、確かに私達は驚く程似た兄弟でした。」

「もう、十年になりますか…。あの日、あの方が亡くなられたと聞
いて、私は激しく取り乱してしまいましたね。」

向かい合いながら二人は昔話に興じながらカップを傾けた。

カキーン

賑やかな会話が途端に途切れる。

何か軽い金属が乾いた大理石に落ちる音。冷たく響く金属音の残響・
・・・ソレが数十センチ開け放した扉の向こうの廊下から響いてい
る。

突然の金属音に、対談していた二人はハッと廊下を見やる。恐ら
く、剣が床に落ちる音…。

学は青ざめ、女王は厳しい顔付きだ。何者かが戸口に居る気配に緑
は警戒を強める。

「そこに居る者よ！盗み聞きか？無礼者め…。」
緑の発言に誰も答えない。

しかし、間違なく、確かに誰かの気配がある。

…唇を引き結びながら女王は机に歩み寄りペーパーナイフを手に
持った、相手によっては攻撃もやむを得ない。

これでも王の選考会を勝ち抜いた実力者だ、剣の腕には自信がある。
抜き身のペーパーナイフを構えて扉に向かう…、

その次の瞬間、学が

「シャッ」と言う剣を抜く音と共に目の前に飛び出してきた。

咄嗟の事で、刃を交える事なく剣の切っ先は素早く、女王の頸動脈の2センチ上を捉える。

緑は見た、学の瞳が狂気に踊っているのを。

第七話 切り開く力（前書き）

皆さんが見て下さるお陰か、少しずつアクセス数が増えている様で
…感無量です。

自分の書いたモノを見て頂けるのは本当に幸せな事ですな。

第七話 切り開く力

余りに衝撃的な出来事に女王の身体がさつと固まる。

学の構えた剣が彼女の肩の上に差し招かれ、首筋を捉えている。

学は表情を変えずに緑を睨んでいた。

「どういうおつもりです？」

威厳を称えた王の問いに彼は答えずただ相手の瞳を見つめて立ち尽くすばかりである。

…学は一部族の長の一人だ。権力は他の九十九部族の長と等しく、その御代に置ける唯一無二の存在とされる王に盾突く事は許される筈が無かった。

では、此の行動に如何なる意図が在ると言つのか？

「御退きなさい！」と王は更に語勢を強くして叫ぶ。

…それは、無理な相談です、陛下。」

怒りと恐れの入り交じった様な表情で学が答えた。

彼の瞳には並々ならぬ決意が見て取れる。野望…いや、もつとモヤモヤしたモノが瞳孔のその又、奥に沈み込んで見えた。

緑が質問の矛先を変える。

「貴方様が何故このような事を？」…何か、理由が在る。それを聞き出せば或いは？

苦々しい顔をしつつ口を開く、

「…貴女が」学はそこで言い淀み、女王から目を背けた。

「我が一族の滅亡を企んでいるからです。」

最後の一言に女王がブチぎれた。一種の屈辱に顔を真っ赤にして緑は声を荒げる。

「我々、風見ヶ岡が！？」弱みを握られて居るとは思えぬ程の大声

で学を罵る。

「戯言を！国家に…、国民に、忠誠を誓う我等が何故その様な事をすると思ひで？証拠は何処です！」

全ての記憶をさらって見ても、やはり覚えが無い。ソレと間違われる発言もして居ない。首筋に微かな刃の感触を感じながら絶望の沼に浸る。

同時に感じた怒りに、拳を白くなる程強く握り締めた。

「陛下は占いを信じますか？」

いきなりな学の発言に緑は怪訝そうに顔をしかめる。

「私の身近に昔、或る女が居ましてね。その女は今亡き兄の恋人でした。まあ、悪く言えば妾だったとも言えるかも知れませんが…。」

…その女は強い魔力を持つて居た。彼女の占いは良的中し、学の兄である尚はそれを参考に政治を取り仕切つて居たと言う。

「そして、彼女はある日、予言した。…およそ十年後、風見ヶ岡一族と時雨谷一族が結託し、我らの長の地位を貶めるであろうと。…」
学の言葉に緑は絶句する。

「では、占いにかこつけて此の様な事を？占いなぞ、何の宛になるのですか！」緑が叫ぶ。

「貴女はご存じの筈です。我が国では、今こそ科学技術に注目が集まつて居るものの、昔は魔術を広く研究していたのですよ、占いが全くのデタラメだとは言えますまい？」

学の堂々たるモノ言いに緑がたじろぐ、相手の言う事もあながち嘘で無い。

しかし、百歩譲ってソレが真実だとしても、緑は勿論、彼女の血筋の者にその様な事を企むで在るう者は居ない…。自分の息子である

瑠璃…

歳の離れた妹、藍…彼等は全く持つてそんな人間で無い。

考え込み黙る女王を見て、学が声を出す。

「努^{つとむ}入れ！」

キィ…大きな軋みと共に青年が部屋に入ってくる。

青年、いや…未だ少年と言うべきか？

青いフードの付いたコートを羽織り、サラサラ光る金系の様な前髪をライトグレーの瞳の上にフワリとかぶせ、まぶかにフードを被っている。右手には長く美しい長剣が、抜き身のまま握られて居た。左手は誰かの手を引っ掴んでいる。ソレは華奢で美しい女性の手で…

「藍！」

思わず緑は金切り声を上げる。

そこに立つて震えているのはまさしく彼女の妹だった。

「脅すつもりか…。息子に迄手を汚させるとは…、親が聞いて呆れる。」彼女は学に言い放ち、努を睨んだ。

しかし、相手も怯まない。

人質を取られた為に状況は悪化した…此のままでは王座も危つい…女王は腹を括った。

目の前に立つ学とその息子である努…。そして、恐怖に震える妹、藍。

嗚呼…、私には妹を犠牲になんて出来ない。いわれの無い嫌疑を掛けられて、王座を明け渡すしか無いのだろうか？若しくは、長の地位迄剥奪されるかも知れない。ソレも仕方が無い事なのか？

余りの出来事に身体がクラクラする。。あらゆる想いが脳裏を巡り、瞼のしたの眼に映り来る。

全てを覚悟しながら、愛する人々に謝罪する。

隙を突かれ、愛しい妹を盾に取られた今、最早…私に勝目は無い。
優しい叔母、妹、今は亡き夫心から愛する息子…瑠璃。
そして、彼女が全てを賭して守ってきた此の国の民達…
やり遺した事が沢山在るのに、ソレはもう叶わない。

- - - それらの想い全てが彼女の奥底で弾けた。

…こうして、王座は静かに陥落したかに見えた。

王の屈伏が城内にさえ漏れる事無く、緑と藍は世間的体面を保たれながらも軟禁状態に置かれた。

緑の行動は多少制限され、いつも隣りに護衛に扮した刺客が張り付いた。藍に至っては仮病で部屋に押し込められるはめになった。

彼等には如何なる時にも見張りが付き、ソレが緩和されるのはトイレと入浴時のみだった。

しかし、彼女が何の手も打たなかったかと言うとそうでは無い。

きつと此のままで自分達は殺されずとも、一生監視を受けるはめに成るだろう。自分はまだしも、妹をそんな目に会わす訳には行かない。

悪事を暴く一番の方法…、ソレは瑠璃に事実を伝える事だ、彼にならそれを巧く世間に暴露する力量がある。

軟禁状態四日目、ここの処ずっと一人で摂って居た夕食を瑠璃と摂る許可がでた。刺客に命じられるままに瑠璃を避けてきたが、それを逆に疑われると踏んだのだろう。

此の機を逃せばつぎは無いかも知れない。相手に陥れられる前にも何としても報せねばならない。

「陛下：御夕食の準備が整いました。」女中が私室に報せにやつて来た。

淡い紫色の羽織りを肩から掛けて部屋から出ると後ろから刺客が付いて来る足音が続いた。

既に瑠璃は部屋に居り、テーブルに着いて居た。

扉の開く音と共に顔を上げ、緑の姿を認めると彼はそつと席を立ち、母親に一礼した。

思わず泣きそうになるのを必死で堪えて着席する。

「有り難う：。」此所では不釣り合いな言葉が口を突いてでる。

「母さん？何か在ったの？」息子は心配そうに母を見詰めて居た。

碧い瞳に自分が映る。：まるで、海の中で自分が溺れているみたい：。父親譲りの瞳の色。

緊張が解けてホツと息をついた。

「いいえ、何もないわ。心配しないで。」この歳では未だ息子に心配は掛けられない。

今、夫が生きていたら助けにくれたらどうか？一瞬まともに考えてしまった。

でも、そんな事を言っではいられない。

もう、彼は死んでしまったのだから。今は居ないのだから：。

「もう、父さんは居ないの：。だから、私達が此の一族を守って行くのよ。私達が未来を切り開くのよ！！」

そうすれば、父さんも見守ってくれるはずだから。」

夫が死んだ時、まだ七歳だった瑠璃に言った言葉が脳裏によみがえる。

私達の手で…
どんな暗闇をも、
切り開いてゆく、
如何なる時も、
きつと共に。

二人は向かい合い、夕食の席についた。

第七話 切り開く力（後書き）

若し宜しければ感想、評価をお願いします！！

第八話 月光の下（前書き）

間違えて、一度消してしまったので改めてアップしときます。

第八話 月光の下

息子と他愛ない話をしながら、手を動かして食べ物や口へ運ぶ。後ろには護衛に扮した刺客が付いている。

その為か、緊張でローストビーフの味が判らない。

やはり、自分の態度が不自然らしく、たまに瑠璃は顔をしかめた。

「母さん、最近政治の方はどうなの？」

サラダを口に運びながら瑠璃がいきなり話の舵を切った。

「えっ。ん…まあまあかしら。」

いつもなら此所で二人で政治議論に花を咲かせる処だが、今日は早々に切り上げる。

曖昧な返事が不振を煽ったのか、瑠璃はまた腑に落ちない顔で緑を見詰めた。

食欲は緊張に押し潰されてしまった様に萎えてしまっていたが、残って居たスープを気力で喉に流し込む。

日常に置ける彼等の会話を良く知る者ならば、此の異常な空気をすぐ察知したに違いない。

しかし、ソレこそが緑の真の狙いだった。

その異常さは瑠璃に確かに伝わって居た。

…素っ気無い態度なのに尖った部分は見られない。…政治の話を用意的に遠ざけた気も見られた。

…何か隠さねばならぬ物事が在る、しかし自分にはそれを知って貰いたい、所がソレを公で口にしてはならないのだ…。

きつと、それは大切に政治に関わる事…。

誰かに聞かれたらマズい話…。

…カサッ

食後のコーヒーにミルクを投入した時だった。

テーブルの下の左手の指先に不思議な感触の物体が触れた。

丸めた紙切れの様なモノが瑠璃の膝の上に投げ込まれたのだ。

位置からして物理的に、母が投げたのには間違いなかった。

今此所で開くべきなのか？

母を見ると、こっちに向かって首を小さく横に振った。

（開けないで。）

瑠璃は母に笑いかける…

（判った。）

そして、…紙切れをズボンのポケットに滑り込ませた。

食後母と別れて自室に戻ってから、紙切れを開いて見ると、ソレは
トイレットペーパーを小さく丸めたものだった。

真中に赤く滲んだ文字が並べ立てられている。

「T542 - 21 - 12」

理解出来ないソノ数字の序列は、瑠璃を大いに困惑させた。

「どついう意味だよ…。母さん、何が言いたいんだよ？」

薄暗い、部屋の入口に立ち尽くして瑠璃は頭を抱える。

いつの間にか疑問に見合う解答を捜そうと、躍起になっていた。

何故か身体が震えた。月光が溢れるベッドに、上着を脱いで横た
わる。

高さのある大きな窓から部屋に射す月明りが眩しい。

淡い光の中、シートは不思議と太陽の優しい芳香を放っていた、そしてそれが余りに矛盾している様な気がして、不思議な気持ちになる。

ふと、小さな紙片を取り出して光に透す…。

不可思議な数字と文字の序列、…それをジッと凝視する。

ハッとして飛び起きた。クシャクシャのトイレットペーパーに浮かび上がった赤い十文字…、ソレは所々にインクの滲みとは思えない染を作っていた。

そして、瑠璃は気付いたのだ、母がインクでなく、血でメッセージを書いていているという事に…。

母はトイレットペーパーに『自らの血』でメッセージを書かなければならない状況なのだ。

…恐らく脅されている。そこに思考が至るまで、そう時間はかからなかった。

自分でも身体の血が失せるのが感じられた。あらゆる思考が怒濤の勢いで脳内を巡った。

時計に目をやると時刻はまだ10時だった。まだ間に合う！ダークブラウンの上着を羽織り、瑠璃は廊下に飛び出した。

…
「寧衣！」

扉の向こうから声を掛けられて少女は皿洗いを止めて振り向いた。

「瑠璃様？」

此所でいつもなら

「様付けは止めてくれ。」と苦笑しつつ返すが、今日はそんな余裕がなかった。

「祖母様は、何処に？」

「わたしや此所に居ります。」

後ろから小さな老女が進み出た。

「祖母様、話があります。」

瑠璃は老女に近付くと声を落として囁いた。

「私も瑠璃坊ちゃんに話があるんで御座います。」

小さな真つ黒い黒曜石の様な瞳には力強さが映って居た。

祖母様。：彼女は昔、緑の乳母を勤め、七年前までは瑠璃の養育係もしていた女性だ。そして今では再び緑の最も近くで彼女の世話係りをしていた。

誰よりも風見ヶ岡を知り、心から風見ヶ岡に仕える一人だ。今は孫の寧衣も王宮にて働いている。

「役済みだと？！母がそう言ったのですか！」

瑠璃は憤慨して立ち上がった。

今、彼等は瑠璃の部屋で話し合いをしていた。

「瑠璃様、落ち着いて下さい！」寧衣が瑠璃を宥める。

「母が貴女自身に直接、解雇勧告を？」

「左様で御座います。自惚れかもしれませんが、私は大変驚愕致しました。私は緑お嬢様に満足して頂ける働きをしているつもりで御座いましたから……。」

祖母様は女王をお嬢様と呼ぶ、……昔の名残だろう。

「申し訳ありません。全ては、此のせいです。」

そう言うとう瑠璃は紙切れを引っ張り出した。

瑠璃は彼等に全てを話した。

「そうで御座いましたか。　…では、お嬢様の新しい御付きの人は監視役という訳ですな。」

「その様です。」

瑠璃は唇を噛み締めながら苦々しく呟いた。

「なんて事…！卑怯だわっ！」寧衣も体を震わせながら憤慨している。

「私は最近の母の様子を知りたくて祖母様に声をかけたのですが…、では何も判らないのですね。」

「ええ…。私は孫の仕事場に飛ばされましたからな。お役に立てず申し訳ない。」

祖母様も悔しさを滲ませて呟いた。

夜は更け、時計が深夜一時を刻んだ。瑠璃は今、独りでベッドに身を横たえ、天井を仰いでいた。

先程帰り際に祖母様と寧衣に城内の調査を依頼し、母の様子を観察するように頼んだ。

…

「でも、深入りはよして下さい。相手は風見ヶ岡の政敵ですから、

…俺が二人を巻込む訳には行きません。」

瑠璃は二人の身を案じたのに、逆に寧衣に

「私達が付いてます。御安心を。」と言われてしまう。

そして、祖母様は瑠璃を小さい頃にくれた様に抱き寄せた。

それは、昔と変わらぬ優しい温かさだった…。

彼も祖母様の肩を抱いた。

けれどもそれは、予想以上に華奢で小さいものだった。こんなに彼女が小さかったらうか？

グツと込み上げる何かを押し殺し、瑠璃は

「有り難う御座います。」と呟いた。

嗚咽が交じるのが自分でも、判った…。

彼はゆっくりと寝返りを打った。

自分の抱えた責任と、

自分を信じてくれる人の温かい存在の両方を目一杯感じた。

彼は窓から、天空に浮かぶ西に傾き始めたちぎれそうな三日月を見詰める。

どうしてこんなに細い月が世界をこつも明るく照せるのだろうか？
美しい月を見詰めながら瑠璃はゆっくりと瞼を閉じた。

その夜、月は彼の瞼の下でも輝き続け、彼の心が混沌こんとんに沈まぬよう、
ただただ導き続けた。

第八話 月光の下（後書き）

勉強との両立の為、

二週間程更新が滞るかも知れませんがご了承ください。

第九話 暴挙発生（前書き）

未だテスト期間ですが上がったので投稿します！

……読み終わったら評価の方宜しくお願いします！！

第九話 暴拳発生

「此所に署名を…お願い出来ますかな？」

瑠璃との食事の後、部屋に戻ると、そこには努が待つて居た。彼は一枚の紙を持って、それをヒラヒラさせ、薄笑いを浮かべて居る。

先程、全てを賭して息子に血とトイレットペーパーで作成したメモを託した…

瑠璃に、相手よりも迅速な対応を求めたかったが、それは無理だった様だ

…その文書は恐らく風見ヶ岡一族を貶める為のモノに違いない。ソレに署名をするという事は、敗北を認めて永久に永遠国の政治から身を引く、と言う事ある。

そう、永久に……。

昔、

……緑の父親はまだ年端も行かぬ小さな少女だった彼女に

「長の地位に付ける事は最高の誉れである。」

と、教えた。

……そして、緑もまた瑠璃にそう語った。

瑠璃は瞳を輝かせ、

「僕、いつか、皆に認めて貰える立派な長になります！」
と言った。

けれども、

予想しなかった、
その息子の道を、
私が絶つ事になるうとは…

緑はギョツと唇を引き結んで努を睨んだ
自分達が身を引く事で害が飛び火しないならば…、
他にどんな選択肢が在ると言つのだろうか？

書類は白紙だが高級羊皮紙だった、恐らくサインを加えた後から内容でつち上げるのだらう…。

政治に置ける不正
他部族との裏取引
情事を交えたスキャンダル…

いくらでも背徳は仕立て上げられる。
王座は雄大で、輝かしく、豪奢で…、果てしなく儂くて脆い。

……世論一つで傾ぐ台の上の王冠……、だからこそ求めてしまつ、
又それも、王座の危うい罫。
誰もが目指す頂点には何があるのか？
私は頂点を見据えられたらうか？
答えは無い。

女王はペンを手に持ち、羊皮紙に向かう
真新しい羊皮紙に碧いインクが染み込む…

…王座の陥落だった…

- - - 場所と時間は二日後、運命の十一月三日、時雨谷の群都『
星陽』へと移る - - -

今日もまた空呂は学園で授業を受けて居る

木枯らしが吹き、校舎の周りの樹々が冬を迎えるべく、葉を風に吹き散らかして居た

いつもど通りの平穏な日々である

まさか、此の地で今日歴史的な大事件が起ころうとは…、誰も予想して居なかった

『星陽』は時雨谷独立の時より、時雨谷の群都、永遠国の二十大都市の一つとして千有余年の間君臨してきた大都市である

『星陽』の名は大昔、時雨谷から初めて王座に君臨した女性に由来する

星陽様は彼女の時代が過ぎ去った今でも、人々の血に流れる記憶に
より

「英雄」と呼ばれる。

『星陽』の中央部に位置する駅の前には、星陽様の像がそびえ立って居る。

今の世の子らを膝下に見ながら、正面に正義の剣を構え、真実の盾を片手に持ちながら、此の国の未来を見据える…。

折しもその時、空呂はその像の側を歩いていた。

それは、偶然に友人と一緒にいった図書館の帰り際だった。

時刻は午後六時三十分

――暴挙発生！！

ドン！

突然に、恐ろしい程の爆音が耳を劈いた、季節にそぐわぬ熱風が空呂の周りを駆け抜けた。

「なッ！」

皆、体を翻し、音のした方向を見る。

空呂は目を疑った。

巨大な黒い装甲車が駅のホームに乗り入れて幾つもの砲首がコチラに向けられている。

ホームが見えるのは火器が駅舎を吹っ飛ばしてしまったからに違いない。

人々は理解できずに突っ立っている。

キュルキュルと嫌な金属音がする、そしてソレがふと止まった。

空呂も恐怖に駆られて動けない。

カンカンカン！

非常事態に鳴された教会の鐘楼が彼女の思考を現実に取り戻した。

「装填終ったら第二打が来る、逃げてッ！」

思わずそう叫んで隣に居た光に向き直る。

次の瞬間、再び砲身が火を吹いた。

広場に居た人間が動き出す前に放たれた二打目は星陽様の像と数十メートル離れた市庁舎に打ち込まれた。

…ドドドドド

地を揺るがすその振動と空気に舞う砂塵にその場の人々は地に伏せる事で対応する。

振動が収まり空呂が目を開けるとほんの数メートル先の地面に星陽像の破片が深々と突き刺さって居た。

銅像の正義の剣を握った右手が肘の辺りからもげてひしゃげて居るふと振り返ると像は台座に付いた脚を除いて殆どが崩壊していた。

……千年以上の間、民を正義の剣と真実の盾で守って来た聖女像の成れの果て……

正義と真実の敗北の瞬間だった。

「空呂ッ！」

名前を呼ばれてハツとする。弾に弾かれた様に少女達は走り出した。

空呂は後ろを気にしながら走った。

どうやら、兵が武装して装甲車から進軍しているらしい。

此の数世紀、平和的な国であり続けた為に各部族は特別な傭兵部隊を持つてはならない決まりが出来た。

即ち、何処かの長の差し金である可能性は皆無に等しい。

では、一体全体誰がこの様な事を仕掛けて来たと言うのか？

そして、目的は何なのか？

「あれを見る！！」

誰かが大声で叫んで駅前広場上空を指差した。

いつもならば、時雨谷の群旗がはためている筈のポール……

十一月の寒空の下、空呂にとっては見慣れた二枚の大旗が鮮やかに翻っていた。

一枚は碧地の中央に白いカモミールが映え、周りに金糸で刺繍された星が百個並ぶ荘厳な旗……

もう一枚は黄色地に鮮やかな水色の綺麗な鳥が木の枝を啜え、天に向かい羽ばたく様子が染め抜かれた旗……

空呂は一瞬でそれがなんの旗かが判った。

それは永遠の国旗と、
風見ヶ岡一族の紋章^{エンブレム}だったのだ。

第九話 暴挙発生（後書き）

頑張っ て書いていこうと思います。

応援宜しくお願いします m ((m

第十話 逃走

堂々とはためく二枚の旗は彼等、時雨谷の民に全ての事実を語った。

空呂もまたその旗で何が起きているのかを把握した。

今、時雨谷を制圧しようとしているのは国王の統括する軍だ！

長に軍や傭兵を保有する権限は無いが、王は違う。

災害や万が一の有事に備えて国王だけは精鋭部隊を所持する事を許されているのだ。

そして、

部隊を動かせるのは……

国王だけである。

「国王の侵攻だぁッ！！」

誰かが悲鳴に似た叫び声を上げる。

人々は困惑の表情を浮かべ、旗を一樣に仰いだ。

「貴様らッ！！止まらんかッ！」

後ろから兵士が駆けて来て、銃を捧げ持ちながら、かなり立てた。人々は

「キヤアッ」と声を上げててんでバラバラに逃げ始める。

まるでそれは映画のワンシーンの様だった。

空呂たちも咄嗟に暗い路地に飛び込んだ。

軍隊の侵攻方向が把握出来ないために人々は何処に行けば良いか判

らず、きりきり舞いになっている。

しかし、空呂たちは迷わずに星陽学園へ向かった。彼等は学校の寮を居住区としているからだ。

少女達は一様に息を乱しながら、キツイ坂を駆け上がって行く。学園は小高い岡の上に聳え《そびえ》たっている。

強い風に体を打たせながら走って行く。

襲撃の情報は素早く伝わって居るらしく、行く先々は既に混乱の渦中に在った。

空呂の鞆の中でペンケースがカタカタと音を立てて飛び跳ねている。

「アッ！」

右前方の路地から何かが飛び出して空呂とぶつかる。

見ると、腰の曲がったお婆さんだ。

「た、助けてッ！」

お婆さんは空呂にすがりつき、後を振り返った。灯も燈らぬ薄暗い通路の向こうから、ものすごい勢いで軍靴の音が迫って来た。

来る！

心臓が体の中で激しく暴れ回っているのが判った。

次の瞬間、何の前触れも無いままに兵士が飛び出して来る。

「アッ、見つけたぞッ！！ 星陽学園の生徒だッ！」

先頭の兵が叫ぶ……。

相手は三人、手には弱装弾の装填された新型の小銃……。

「捕まえて、尋問だッッ！」

後方の兵から指示が飛ぶ。

尋問？！

……相手が動いて来た。

小娘相手に武器は要らないという事か？ 御丁寧に小銃をアジャスタに収め、素手で躍りかかって来る。

やって殺ろうじゃないか。

小娘の本気、見せてやる！！

お婆さんを背後に庇い、前に出る。 鞆を投げ付け相手が怯んだ内に懷に飛び込む、みぞおちに肘鉄砲を打ち入れた。

そして、その兵士ごと後方の兵士にしなだれ掛かる。

と、同時に相手のアジャスタから小銃を抜き取った。

揉みくちやになりながら立ち上がり、小銃を構えて牽制する。

「下がって！ 寄るなッ！ 寄ったら撃ちかましてやるから！！」

大声で呼ばわった。

恐くて、身体が震えた。 今、自分の身を守れるのは自分しか居ない。

後へと退避しながら震えているお婆さんを誘導する。

光や他の友人達は雑踏に紛れて、空呂とはぐれてしまった様だ。

彼等は再び共に逃げ始めた。

「有り難うございました。わたしや、教会に息子が逃げよりましてで、教会に行きますで。」

十字路に差し掛かるとお婆さんは空呂にそう言って、右側の道を指差した。

空呂は黙って頷くと、

「私は学園へ行きます。」

と答えて道を直進した。

もうすっかり陽は落ちて、街は暗闇に飲み込まれて居た。

星陽には空呂の田舎とは違い、電気が供給されて居る。しかし、今は電線が切れたのか一切の電気の供給はストップしている様だった。暗い路地を少女は風を切って駆けた。石畳は彼女の靴の音を小さく反響させる。

皆、無事だろうか？

軍は何の為に？

あらゆる思考が怒濤の様に空呂の脳内を駆け巡る。

此の襲撃の魂胆は何なんだ？

「まさか、正々堂々と星陽を乗っ取りに来るなんてね。」

社会科教義準備室のカーテンの隣に立ち、社会科教師由宇奈は唇を噛み締めた。

……カタン

小さく部屋の扉の開く音がした。

「^{みのり}実なの？ 街はどうだった？」

由宇奈は、部屋に入って来た少女に声を掛けた。

少女は長い黒髪をポニーテールにして、腰の上辺りまで垂らして居た、学園の制服のジャケットを羽織り、足元は動き易いブーツで固めて居る。

生徒の装いだ。

「大混乱ですね。 市民を殺すつもりは無いみたいですが、牽制の意味での発砲は敢行されて居る様です。」

「侵攻方向は？」

「北と南にそれぞれ、師団が展開されて居る模様。 尚、御館と学園が目標と思われます」

「……私が狙いか」

由宇奈はカーテンの裾をギュッと握り締めた。

「^{せいり}惺良様！ 御逃げ下さい」

実はそう言つと、由宇奈にすがりついた。

「貴女が……、敵の手に落ちたら、時雨谷は終わりですッ！
！ お願ひ致します……」

実は真直ぐに自らの主君を見据えた。 由宇奈は実を一瞥すると、悔

しそうに目を伏せた。長くて繊細な睫毛が微かに震えた。
胸元のペンダントに手を触れる。ペンダントが手の下で熱を帯びた。
ゆっくりと口を開く。

「私を……守れ。そして、着いて来い　ソナタを信じる！」

ハイッ！！　実は腹に力を込め、返事を返した。

【信じる……】

ずっと、その言葉が聞きたかった。

空呂が学園に着いた時、学園はガランと静まり返り、人の気配は微塵も感じられなかった。

人影を捜し、渡り廊下を走って行く、ふと見ると、先日海と一悶着起こした場所に居た。

寒風が空呂のコートの裾を翻してゆく。身体が火照って居るので、それ程寒さは感じない。

月は東の空に微かに見え、仄かな月光を投掛けて居る。

バタバタと静まり返ったキャンパスの何処かで軍靴の走り回る音がした。

恐ろしさに身体が竦む。ポケットに押し込んだ小銃の感触をコートごしに脚で確認する。相手との接触は避けたい。

ならば、向かうべきは……　体育館裏ッ！

空呂は居慣れた校内の構造を脳内で素早くマッピングしながら走り出した。

パンツ！！

乾いた銃声が響いた。

「惺ッ ……！由宇奈先生ッ！！」

勇敢な女教師の身体が傾いた。

実は咄嗟に出しかけた『惺良』の名前を飲み込み、彼女の偽名に訂正する。

……自分の立場は判って居ても、惺良は教師として、生徒達を逃がすという義務を投げ打とうとはしなかった。

惺良が凶弾に倒れたのは正に彼女が自分の生徒を逃がそうとしているその時だった。

撃った兵士は独りで、生徒を逃がす女教師と鉢合わせし咄嗟に引き金を引いてしまった様だ。

「貴様ッ！！」

実は手に持った元モップの柄で兵士を薙払い、そなまま棒を一回転捻り返して脇腹に一突き入れてやった。

アッと言う間に相手を地面に沈める。
題して『閃光一撃突き』

「先生！」

女生徒が震えながら自分の指を噛んで落ち着こうとしている。
男生徒も似たり寄ったりだ。
実は兵士の気絶を確認すると惺良の傍らへ駆け寄る。

「御怪我は？」

「……脚……だよ」

「内臓なかは大丈夫なんですね？」

実はホッと溜め息を漏らした。
土に転々と赭い血が染み込んで行く。

「止血するわ、ハンカチ貸して」

周りの生徒に指示を飛ばしながら自分もハンカチを取り出す。

「弾は貫通してます」

言いながら傷口に押し当てたハンカチには既に赭い血の花が咲いて居た。

「彼等に指示を……」

掠れた声で惺良は実に囁いた。止血をしながら実は再び指示を飛ばす。

「気絶した兵をトイレにでもぶち込んで来て下さい。暫く起きないと思いますけど、仲間に見つけられたら面倒ですから」

早速、男子生徒が指示に従う。

「男子が戻ったら体育館脇の昇降口に行きなさい！校長先生がいらつしやる筈だから、指示を仰ぐ事、私達は後から追い付くわ」

女子は激しく首を縦に振り頷く。渡り廊下の向こうから男子が戻って来るのが見えた。

彼等を逃がす。 ソレが星良様の第一優先事項。

体育館へと去ってゆく生徒の背中を見ながら実は惺良に尋ねる

「此で良かったんですね」と、

……惺良は静かに頷き、言葉を返す

「長は民の安全を守る者だからね……」
と

第十一話 邂逅

実は止血を終えた惺良を背中に担ぎ上げた。

「出血は多く無い筈です」

小柄な身体に丸々一人分の体重がかかる、小さくともしやかな彼女の身体はいとも簡単にソレを支える。

「すまないわね。迷惑掛けて」

「何を今更」

彼女は惺良の無意味な謝罪をサラリとかわし、

「信じて下さってるんでしょう？」

と言い返し微笑んだ。

実は渡り廊下を逸れて、中庭の植え込みの影を選んで歩いて行く。

惺良は実の背中で浅く息をしながら胸元のペンダントに手をやった。

金色に輝くフレームの中に、透明な硝子玉がハマって居る。

惺良の指先で硝子玉がほんのりと熱を帯びた。

実は自分と同じぐらいある惺良を担いでいるというのに、呼吸のいつも乱さずただ淡々と目的地である体育館裏へと歩みを進めた。陽はすっかり落ちて、月光が全てを青白く照して居た。

脳内にマッピングした校舎の見取り図を便りに、敵の目を盗んで空呂は体育館を目指して居た。
体育館の裏には雑木林が広がって居る筈だ……、光や他の友人がいとすればそこしかない。
皆の無事が気になる。

ガサリ

行く手から物音がしたのはその時だった。
ソレは草を掻き分ける様な音で、本当に微かな物音だった。
余り人に知られて居ない薄暗い裏道を歩いていたので敵兵との遭遇率は低いと踏んでいたのだが、斟酌が甘かった様だ。
此の状況では迂闊な行動は出来ない。空呂は思わず身を縮め、同時にコートのポケットから小銃を引っ張り出した。
持ち慣れぬ銃は少女の手にはズシリと重く、実に不釣り合いだった。
銃身を前に構えて空呂は校舎裏の藪の中を進む。
いざと言う時は物怖じせずに発砲するつもりだ。それがどんな結果を引き起こしたとしても、正当防衛なのだから仕方が無いと心の中で割り切る。

周りの低木を揺らさぬ様に細心の注意を払う。
相手の足音は聞こえない、恐らく、相手にこっちの足音も聞こえてはいまい。

ただ、そこに誰かが居る。それは、動かし様の無い事実だった。

……パキンッ!!

空呂の足元で音がしたのはその時だった。

張り詰めた緊張が逆に空回った、周りを気にしすぎて足元への注意が散漫になった……その結果がこれだ。

彼女は靴で木の枝を踏み折ってしまったのだ。

ヤバイ!

思った時には頭の上を声が飛んでいた。

「何者だッ!」

いきなりの怒声に身体が飛び跳ねた。咄嗟に引き金を引く……

パン!!

空しい程軽い音が天に響いた。

ヤバイよ逃げなきゃ

頭では判っているのに身体が動かない……

ガサリと低木を掻き分ける音がする、と同時に背後でストンと微かな音がした。

本当に微かな音……

……
「動くな」

耳朶に若い女の声が囁かれた。速かった、余りにも速かった。アッという間に相手に後を取られた。

相手の顔は角度的な無理と暗さがあいまって判らない。

「発砲したのはお前か？」

いつの間にか、空呂の頸動脈の上に刃渡り15cm程のジャックナイフがあてがわれている。

「お前は……学園の生徒か？何故、銃を持っている？」

女の声色は恐ろしく威圧的だった。身体ががたと音を立てて震えた。何か喋ろうとするが舌が回らない。

「おやめ。実、その娘は私の生徒だ」

突然、正面の草むらが揺れて見慣れた顔が現われた。女社会科教師、由宇奈である。

「由宇奈先生！」

「惺良様！」

二人の声が重なった。実と呼ばれた女はマジマジと空呂を見詰めた。空呂も相手を見る。

白色のきめの細かい肌と長い黒髪をしていて、唇は紅くツンとした風格を漂わせている。スラリと伸びた手足はまるでバネの様にしな

やかだった。

余りにも白い肌は時雨谷の民とは違う系統の血を引いているのだろうが、明らかに美女である。

美女……いや、美少女と呼ぶべきか？

彼女は未だ学生で、精々十七、八歳位に見えた。

「惺良様、御歩きになつてはいけません。」

そう言ってから渋々といった感じで実は空呂を離し、惺良に駆け寄り、彼女の脚の具合を確かめる。

しかし、空呂は何が起こっているのかまるで分からなかった。

「惺良様って何の事ですか？」

疑問は普通に口を突いてでた。

すると、

途端に二人の表情が強張った。実は困り切った顔を主君に向けて指示を仰ぐ様な仕草を見せ、当の由宇奈も唇を引き結び何か思案を巡らせている様だった。

「偽名よ」

……一分程後になって、ようやく惺良は口を開いた。

「由宇奈は架空の人物名よ。私の本当の名は惺良　此の時雨谷一族を率いる者の血族の一員なのよ」

「偽名？長様の血族？先生が？」

更に疑問をはき出したが、

実は空呂の疑問に答える事無く

「惺良様、私の背中に……、話は行きながらで十分です。」と、言うと思いで自分の背中を惺良に差し出した。

「私は、時雨谷一族の第二後継者なの。今の長様は私の叔父上で、歳の離れたところが第一後継者……。亡くなった私の母が血族の人だった訳。叔父と母では、母の方が歳上だけど、母は病気がちで長は継げなかったの」

実の背中に身を預けながら惺良は呟いた。言いながら自然と亡き母が思い出された。

「でも、何故、教師のフリをなさっていたんですか？」

空呂はそんな彼女に疑問を更に投掛ける。

「私は命を狙われてた、だから、教師という肩書きでカモフラージュしようとしたの。実は私の背中を任せる護衛よ」

惺良はそう言ってから続け様に

「御免なさい」と呟いた。

「だから、こんな事になったのは私の命を狙うヤツラの仕業かもしれない」

実が上下運動を加えて惺良を背中に背負い直した。

「誰も何も言わない。此の騒動の元凶が何なのか……誰もそれを知りたがって居た。」

「あとう……」

「私、国王軍の旗が広場にかかるのを……見ました。」

空呂は言い辛そうに言葉を発した。　今までは逃げる事に精一杯で考えずに居たが、国家最高機関である王座が武力を持って民を弾圧しようとしているのは明らかで、それには王の子である瑠璃も少なからず絡んで居るに違いないのだ。

あの日、彼等が別れてから7年もの月日が流れて居たが、空呂達姉妹と瑠璃はたまに手紙を送りあう程度には親睦を深めて居た。どんな人になっているのかなんて空呂は知らない。

手紙の中の彼しか知らない。

でも……

彼や、彼の母が此の騒動を引き起こしたなんて……

信じられない。

……信じたくない。

空呂の発言に惺良は予想以上の反応を示した。

「国王の旗印？！ それは事実ですか？ 有り得ません！！ 私は緑女王様と多少の親交がありますが彼女はそんな方ではありません！！」

空呂の言葉に猛烈な勢いで反発し、瞳は真剣に、空呂を睨み付けていた。

「別にッ！ 私だって陛下を……瑠璃を信じたいです！！ でも……！！」

「黙ってッ！！」
反論しようとした矢先、今まで黙って居た実が叫んだ。皆、静まり返る……。

バタバタバタ……

土の上をブーツで走って来る音が後から微かに聞こえた。 敵だ

……
音からして十数名……、すぐに辿り着かれるかはさておき、状況は明らかにヤバイ。

実は素早くジャックナイフを抜き手でにした。空呂も銃を構える。惺良も自力で地面に立った。

「逃げなさい」

それを口にしたのは惺良だった。

「私がいたら逃げ切れない。実ッ、空呂を連れて行きなさい！ 戸籍も何もかも偽造したから捕まっても長の血族だとばれないはず！ 大丈夫！」

実と空呂は驚いて振り向き、ジッと惺良を見詰めた。

惺良は首の後へと手を回して首に掛かっていたペンダントを取った。

「これは貴女に預けるわ。

これを持っていたら正体がばれちゃうでしょう？」

そう言っただけで彼女は実の手のひらにソレを押し付ける。惺良の細い指の下で別れを惜しむ様に硝子玉が光り輝いた。

実は何も言わない。

空呂も言わない。

「信じてるわ、貴女達を……」

惺良はすっかりした口調でそう言っただけで深い色の瞳で二人を見詰めた。

信じてるわ

その言葉が力になる。

貴女が望むならば、たとえ地獄であろうと着いて行く。

貴女が信じて下さるならば、どんな危険へも身を投ずる事が出来る。

貴女は私の最高の主君です。

だから、私は貴女に恥じない働きをする……

貴女が望む働きを

「判りました、御任せ下さい。預かり物は命に代えても守ります」

実はしっかりした声で答えて惺良から預かったペンダントを掌でギョツと握り締めた。

第十二話　ワゴンとマンホール

ラジオの前に立ち尽くしたまま瑠璃は報道に耳を傾けた。

為されているのは時雨谷への部隊侵攻の報道である。

何が起きているのかは容易に判断出来た。

元々、覚悟はして居たが、起こった事件は予想を遥かに凌ぐ大事件になってしまった様だ。

丸々一部族を犠牲にして風見ヶ岡に難癖をつけて来るとは思いもよらなかった。

せめて、スキヤンダルや脱税、談合やその他の法律違反のでっち上げならば覆せたかもしれない。

しかし、ここまでされては幾ら事実を語った所で民衆が平常心をもってコチラの言い逃れを聞いてはくれないだろう。

ソレが背後で暗躍し、女王を脅して居る者共の狙いだったのだ。

そして、ソレは成功するだろう。その時、風見ヶ岡を引っ張ってきた自分の家系は滅びるのだ。

瑠璃は深く溜め息を漏らした。そのまま瞳を閉じた。
ラジオは鳴り続けている。

「時雨谷一族か……」呟きながら、一人の少女の笑みが脳裏によみがえった。

しかし、ソノ存在を頭から必死で振り払う。

瑠璃はバルコニーに歩み寄ると止め具を外して硝子張りのドアを押し開いた。十一月の冷たい風が彼の額を滑り、漆黒の前髪を揺らす。細い月の発する微弱な光が朧気に城を照らし出しす。月光に鈍く浮かび上がった庭を見詰め、その更に奥に向かい合って建っている別棟の三階一番左手の部屋の様子を伺った。中はカーテンが引かれていたため、判らないが人がいる気配は在った。

「母さん」

思わず唇の間から言葉が漏れた。

彼はジッと灯の燈った母王の居室をみながら、ギュッと拳を握り締める。

そして、呟いた。

「母さん、見えて下さい」

彼はさっと踵を返す。

そして、部屋を横切り本棚の脇にあるクローゼットを押し開き、茶色のロングコートを引っ張り出す。目ため様に奥にしまった長剣も取り出す。書斎のソファのクッションを退すと下からも同じ様に隠して在った長剣が出て来た。

それが終わると机の中を探り、札束を引き出す……軍資金だ。此所まではあらかじめ用意してあった。

剣を収める特殊な吊りベルトを腰に装着しながら瑠璃は頭の中でプランを確認する。
ようやくベルトを装着し終えて剣を挿す、剣が鞘走らない様に止め具を掛ける。

準備万端

瑠璃は自分の部屋をぐるりと見渡し、浅く溜め息を漏らした。そして暖炉の上の写真に目をやる。

中に写るのは三人の人影、
若い女性が六歳か七歳位の男の子を膝の上に抱き上げ、満面の笑みを浮かべている。

女性の隣りの男性は女性の肩に手を回し、瑠璃に似た碧い瞳で愛しげに男の子と女性を見詰めて居た。

写真は未だ父親が元気だった頃の家族写真……………

両親の愛につつまれた十数年前の自分はそこに居た。 これから自分に襲い来る悲劇など知らずに……………
太陽の様に笑って居る。

もう、戻って来ない過去、それがそこには在った。

二度と取り戻せない
そんな事もある

でも、

私達は、

歩みを止めずに

前へ、

真直ぐ、

進んで行く事が出来る

そして、

そうする事は

新しい何かを生む

母さん

貴女はそう信じて

進んで行った

貴女が

そうした様に、

俺も……

進む

素早く写真立てから写真を抜き取る。

瑠璃は決意を固めた。

脱出する。

それが、今の彼に出来る事。

母が命を掛けて伝えた暗号を携えて城から逃れる。そして、いつか……戻って来る……！

風見ヶ岡を背負う長の血筋の者として、

事の事実を知る者として、

永遠国の頂点に立つ緑女王の息子として……

必ず……

ダンダンダン

扉を叩く音と、見知った声に瑠璃の思考は途中で停止せざる得なくなった。

「瑠璃様！ 寧衣でございます！ いらっしゃるなら御開け下さい！」

迷う事無く、瑠璃は扉を開く。するとすぐさま女中の格好をした寧衣が入って来る。

「瑠璃様、御逃げになるのですね」

後ろ手に扉を閉めながら、息を切らした彼女はすぐさまそう言っ瑠璃の方を見詰める。

黒い綿のワンピーススカートの上に白いエプロンを重ね着た彼女……

…、

幼い頃から見知った寧衣が強い女性に見えた。

瑠璃が寧衣の言葉に頷くと彼女はホッとした様に一息つき

そして言う、

「私が避難経路は確保しました、祖母様が根回しはして下さっています……付いて来て下さい！」

「計画は判って戴きましたか？」

「嗚呼。判った」

たった五分で打ち合わせは終った。……いや、終わらせたと云うべきか？

もう余り時間は取れない。一刻も早い脱出が望まれる。

「行きましよう、瑠璃様」

寧衣が言った。

「そうだな。」

瑠璃もそう答え彼等は瑠璃の居室を後にした。

黒いワンピーススカートにこざっぱりとした白いエプロンを着けた女中が瑠璃の居室から出てきた。

彼女は汚れ物の入って居るワゴンを押して部屋から出し、そこで部屋に向かって一礼する、そして

「失礼しました。」

と部屋の主に挨拶を申し上げて恭しく静かに扉を閉ざした。

警備で部屋の外に居た兵士が女中に目配せした。

隣に居たもう一人が女中に

「計画、変更なし」と囁く。

「了解」

寧衣は無声音で呟き返した。

ゆつくりと大理石の上をワゴンが通って行く。寧衣は平静を装いながら歩みを進める。

途中で何人かの知り合いと擦れ違ったが、誰も彼もが大ニュースの情報やそれについての意見の交換に忙しくて気にも止めない様だった。

「陛下が指示為さったそうよ」

「やだっ！ 緑陛下が？」

「陛下が実力行使に出るなんて……。温和な方なのに」

「王立軍隊が動いてるみたいよ」

「嘘！ 王立軍隊って特殊部隊でしょ？」

「そうそう！！ 災害の時に派遣されるヤツ」

「でも、何でなの？ 一般市民まで巻き込んで」

「さあ？ でも……なんか私が思うにだけど……ちょっとやり過ぎじゃない？」

瑠璃はシートや枕カバーに包まれたまま、それらの会話を聞いて居た。その内容に思わず唇を噛み締める。

大理石を滑るワゴンの車輪の音と振動が身体に伝わってくる。

軽く左側に遠心力が掛かった、角を曲がるもうすぐ着く

……そして、しばしの後、ワゴンは止まった。

「着きました、急いで！」

寧衣の声に促されて瑠璃は頭を覆うシートを取り払う。
そして、ワゴンから素早く抜け出した。

「鍵は持ちましたか？」

寧衣が聞く。

瑠璃は頷くと

「又あとで」と言って、壁の高さ１メートル程の所にあった穴に飛び込んだ。

その穴は垂直に階下へ延びている……

汚れ物用のダストシュートだった。

一方、その頃時雨谷の空呂と実は人気の無い校内を走っていた。

惺良と別れるや否や、実は凄いスピードで走り出した。

「御任せください。預かり物は、命に代えても守ります」そう言った後、

惺良からペンダントを預かると、実はすぐさま空呂の手を引いて駆け出した。

抵抗する事を諦めた惺良は地面に座り込み、ただただ二人を見送った。

途中、後方から銃声が聞こえたが、彼等は振り返らず、前だけを見

詰めたまま走って逃げて来た。

空呂は何がなんだか判らないままに実に付いて行くしかなかった。何処に行くつもりなのかさえ判らなかった。

どうして惺良がそんなにも王を庇い立てするのか？

惺良は何処の誰に何故命を狙われているのか？

実が託された血証石とは何なのか？

あらゆる疑問が頭の中を渦巻いていたが、今の自分では何も出来ない事は火を見るより明らかだった。

「此所よ！」

突然走るのを止めた実が指差したのは体育館の昇降口に程近いマンホールの蓋だった。

「マ、マンホール？」

空呂な思わず驚いた声を上げた。空呂を制しながら実がその蓋と周りのコンクリートとの間を見ると囁いた。

見ると、その小さな隙間に繁殖していたとおもわれる苔がコンクリートの上に散らばっている。

「誰かがほじくり出した？」

空呂が首を傾げるのを否定し、

「誰かが蓋を開けたのよ」

と実がかえした。

「開けた？ 誰が？」

「多分、校長でしょうね……。私達も開けるわよ、手伝って！」
二人がかりで蓋についた把手を手掛かりにずらして開けてゆく。ゴリゴリとコンクリが擦れる音がする。

「私達は此を守らなくちゃいけないんだからッ！　こんな所でぼつとしてられないのよ」

自らの首に掛かる血証石をみながら実がそう言って最後まで蓋を退け切った。

「早く入って！！」

空呂は実の言葉に反射するように反応し、地面に開いた穴へと身を踊らせた。

「実さんも早く！」

空呂が梯子を降りながら上に向かって叫ぶ。

答えるより先に実は滑り込んだ。そのまま蓋を引っ張って閉めて行く、重いが何とかかなりそうだ。

ガコン

音がして蓋が杵にハマって落ちた。

光が遮られ、途端に真っ暗になる。先に下まで降りていた空呂は少しその暗さにたじろいだ。

トン

隣りで微かな音がして空気が流れる、実が地面に着地した様だ。

カチリと小気味良い音がしたかと思うと、トンネルの中が急に明るく照された。

……実のライター

ほの暗く揺れる火が透き通る様に美しい実の肌を照らし、繊細な顔の輪郭を浮かび上がらせていた。

「これから何処へ？」

空呂の声は静かな地下水道で恐ろしい程反響する。

「私達の皆に」

実はそう呟いて真っ暗なトンネルの先を見詰めた。

第十三話 不信の夜

寧衣は瑠璃をダストシュートに送り込んだ後、ワゴンを押したまま廊下を歩いて控え室に戻った。

瑠璃の無事は気になるが此所でモーションを起こす訳にはいかない。夜勤に当たっていた彼女は女中控え室の薄張りなソファに腰掛けて、静かに事が動くのを待った。

P M 0 9 : 0 0

事は急転した。正確な情報が次々に都へ舞い込んできたのだ、被害や状況が都、及び他の地方の民の知る処になったのである。火器の使用、及びその内容は特に国民の不振を煽った。

「何故、国王軍は最新の兵器迄持ち出す必要があったのでしょうか？
内乱でも起こす気なのでしょうか？！」

「……えー。只今入りました情報によりますと、軍は三両編成の装甲車で、任務秘匿権を持つてして星陽中央駅に侵入したとのことです。」

「市民によると、装甲車はホームに侵入するなり、最新型の望遠砲をホーム内に発射。
続く砲撃で駅前の星陽像を粉砕し、同時に市庁舎へ発砲を敢行したそうです。」

未だ未確認情報ではありますが、崩れた市庁舎の外壁が人に落ちて死亡者が出た模様です！」

今や大多数の国民が寝る事さえ惜しんでラジオのチャンネルを回して居るのだらう。寧ろ衣たちの女中部屋も、その人口密度がいつものそれとは雲泥の差だった。

皆、暇があればラジオにかじりつき、事の成り行きを見守った。緊迫した空気が漂っている。

「大丈夫かなあ。女王陛下はどういうつもりなんだろう？」

女中達も日頃仕えている御方への不信を抱き始めていた。

その時、

バタバタバタ

騒がしく廊下をヒールのあるブーツが 駆けて来る音がして、いきなり扉が打ち開かれてその場は騒然となった。

飛び込んできた人物はもう壮年の年頃となった女官長である。今ではすっかり白くなった髪を振り乱しながら彼女は大声で叫んだ

「大変よ……瑠璃様が何処にもいらっしやらないわ!!」

その場は即刻大混乱に陥った。

息子が城から脱出したのだと知った時、母である緑女王は安心してソファに崩れ落ちた。

よかった。あのメモが伝わらなくても、逃げてくれるだけで今はいい……。

どうせ、

自分が不本意に署名させられたあの公式文書がこんな形で利用されてしまった以上、

……自分の行く末は決まってしまったのだから。

緑は悔しさに涙ぐんだ。悔しい、あの公式文書にサインした事が余計に状況を悪化させてしまった。

事が大きいだけに、自分だけで無く、瑠璃や藍にも罪が擦り付けられるかもしれない。

いや……、

かもしれない。ではなく、そうなるに違いない。きっとそれが先方の思惑だろう。

自分の判断ミスが、時雨谷に多大な被害をもたらし、結果としては息子や妹の首を締めることになってしまった。

悔しい。ただただ……、悔しさだけが胸を埋め尽くして居た。

何処から情報が漏れたのか判らないが、瑠璃の脱走の一件は一時間後には全国民が知る処になってしまった。

寧衣はギュツと唇を引き結び、瑠璃の無事を祈った。

手筈どおりならば彼はダストシュートを降りた後、地下一階の洗濯場から抜け出して城の裏庭と菜園をぬけ、腐葉土や肥料の搬入口として使われる裏門から街に出ているはずである。

そこからひとまず寧衣の家に身を隠す計画だが、多く見積っても逃走は一時間以上前に終わっているはずだ。

「見つからない　大丈夫だ。瑠璃様なら大丈夫だ」

……寧衣は一人ブツブツと同じ事を呟き続けた。

「こんな事が在ってよいのでしょうか!」

ラジオの中から聞こえる識者の声は興奮でうわずっていた。

「軍隊は未だ星陽に在中して居ります！ なのに、陛下の御長男はこの緊急事態に無断で姿を消してしまわれました。

……今一度申し上げますが、彼は将来的に風見ヶ岡を背負って立つ人間ですよ！

今すぐに、陛下は国民への説明責任をはたさねばなりません
！！」

「このままではなりません！ 此所は永遠国です。先代が築き上げた王座民主制が敷かれる、れっきとした民主国家ですよ！？
こんな事が許される筈がありません！」

どの局でもラジオは延々と国王を非難し、王座民主制の尊重を訴えた。

時計は既にPM11:00をまわっている。

女王は深くソファに身を沈め、沈黙した。

瑠璃の脱走が案外早く世間にまでばれたのは学と努の仕業に違いな
い。お陰で彼女は世間から余計に攻め立てられる嵌めになった。

説明責任

国民を想うこと

国民を知ること

国民に示すこと

それは、彼女が念頭に置いて政治をとって来た三つの戒め。そして、彼女にとっての王である事の全てだった。

そして、そうする事が自分を守る事も知って居た。

力や剣ではなく、謙虚な心こそが自分を助けると……判っていた。

だから、彼女は権力を振り回す政治をしないと一人、誓った。

そして……、それを象徴するように、戴冠式の日から二度と剣を握りはしなかった。

その日、彼女は自分の中に一つの戒めを下ろしたのだ。

それは、

王としての彼女の生き方だった。

涙が一筋、女王の頬を伝った。

運命を呪い、それを受け入れた涙。

透き通った水滴は頬から顎に垂れ、彼女のドレスに染み込んだ。

彼女は立ち上がった。

背筋の延びた強く凜とした立ち姿。
纏った威厳は見る者の魂を打ち震わせ、
人はその強さに溜め息を漏らす。

その姿は、誰もが頭を垂れる此の国の主のものに違いなかった。

「これから、国民に会っわ」

女王は側にいた刺客に毅然と言い放った。

彼女が何かを示さずとも、香都にいる国民の一部分は既にデモを始めて居た。

それを各放送局が追い立てる様に報道する事でそれは次第に大規模な物になりつつあった。

「沢山の市民が王の説明を求めるデモを敢行して居ります。

嗚呼……、凄いです。脇道から次々に人出て来てデモに参加しています。

口々に叫んでいます。先頭の人旗を持って居ます。シートに青いインクで文字が書いてあります。『王座民主制を守れ!!』と読めます!!」

女中部屋には夜中にもかかわらず、住み込みの女中のほぼ全てがひしめき合って居た。

「ねえ！ 市民の人達が押し入って来たらどうする？」

「どうするも何も……判んないわよ、そんなの。」

「何でこんなになっちゃったんだろ」

「皆、それが判んないから、陛下に説明を求めてデモを起こしてるんじゃない！！」

「じゃあ……、私達もデモに参加するべきなのかなあ？」

「アンタ馬鹿？」

「ばっ、馬鹿じゃないわよう！」

話題は城に向かっているというデモ隊の事で持ち切り状態だ。

しかし、寧衣は独り、不安そうに窓際のソファに座り外の様子を伺った。女王の危機に際し、何も出来ない事が辛かった。

拳を強く握り締める。延びた爪が皮膚に食い込む程強く握り締めていた。

その痛みだけが彼女の涙を瞼の下に押し止どめて居た。

ジジジジジジ

女中部屋にいきなりベルが鳴り響いた。業務ベルだ、誰か御偉い方の居室から御用があるとの連絡が入ったのだらう。

大体は晩酌の用意の要請だが今夜は大事件の最中とあつて誰も言つて来ないと思つて居た。それに、時間も時間でもう、零時を回っている。

寧衣は自分が夜勤だつた事を思い出し、席をたつた。

他の夜勤の女中達が文字盤の前に駆け寄る、そこには何処の部屋が彼女達を呼んだのかランプの点灯で表示される。

ランプが一つ、文字盤の上で光つて居る。

ランプの下の場合の名前、駆け寄つた寧衣の心臓はそれを見て飛び上がった。

『王の居室』

ランプは確かにそこに燈つて居た。

第十四話 女王の誇り

「白いドレスがいいわ。」

女王はそう寧衣に言うのと着て居たスカートの止め具を外して、スカートを床に落した。ペチコートだけが彼女の細い脚を覆って居る。

「御髪は如何致しますか？」

「髪は後ろで軽く巻き上げて欲しいの、質素で良いから」

担当の女中がブラシを手にとった。髪を梳いて、次第に豊かな黒髪が結い上げられていく。

部屋には不思議な緊張が張り詰めていた。

「国民の前に出るつもりなの、悪いけれど着付けて欲しいわ。」
それが彼女の言いつけた用事だった。

最初、寧衣が部屋に入って来た時女王は一瞬だけ泣き出しそんな顔をした。だがその表情をさっと取り繕うと顔をそっぽ向けて淡々と目的を述べた。

「こちらは如何でしょう？ なるべく白い物を選びまして御座います。」寧衣はそう言う王の前にドレスを広げて見せた。

選んだとはいえ、最初から白いドレスはクローゼットに一着しか無かった。飾り気のない、質素な仕立てで胸元に軽くりボンがあしらってあるだけである。質素儉約に努めた彼女らしく、衣装の量は余りにも少なかった。

「それで結構です。着付けお願いしますね。」
緑はみごとな

立ち居振る舞いで鏡の前から立ち上がると部屋のロウボードの上の
写真立てをいじった。そして暫くしてから、用意されたより大きな
姿見の前に移動する。

大して豪華なドレスでも無いので着付けは早く終わるだろう、そう
思いながら寧衣は女王の斜め前に立ちサイドのレースを結んでいっ
た。

寧衣はゆっくりと丁寧にレースを扱う……、微かに自分の指が震え
ているのが判る。とても悔しかった、緑様をお助出来ないのがとて
も悔しく、辛かった。

彼女が泣きそうになるのを堪えながら女王の顔を見上げると、女王
は瞼を閉じて両手を胸元に強く押し付けて何か想いに耽っていた。

そして、その姿は本当に美しかった。

その臨時謁見は実に特例的な形式で行われた。勿論、それは女王の
要望だった為に為された事である。

いつも使われる謁見の広場では無く、城の前庭に民衆を通し、王は
正門の真上にあるバルコニーから民と謁見する方法が取られた。

遂に、永遠国の歴史に大きな影響を与える謁見会が始まる。

「私は藍を人質にとられている、だからそちらに不利な発言はしない、でも最後まで国王として国民の前で話はさせて頂戴。」緑は隣りに控えた刺客に呟いた。すると、刺客の女は軽く笑って

「好きにしろ。但し、妙な事言ったら殺すぞ」と言い返してきた。刺客を睨みつけてから緑はひとしきり自分の部屋を見渡すとゆっくり深呼吸をして、踵を返した。後ろ手に扉が閉まる音がする。彼女がバルコニーに歩き始めると後から刺客が歩く足音が続いた。

「今、国王陛下がバルコニーに姿を見せました！！市民達は、説明を求めて陛下の名前を連呼しています」

各局のラジオはそろって謁見の様子を中継し、それははるばる電波に乗って全世界に中継されようとしていた。

緑はバルコニーに用意された踏み台の上上がる。血気に満ちた丑三つ時、その冷たいヒヤリとした風がぞわりと緑の首筋を舐めた。緑は震えそうになる自分の身体を小さな声で叱咤する。

「大丈夫、独りじゃない」

王はドレスの胸元を強く押さえた。

さつき抜き取った写真。

夫が生きていた頃の家族写真。それがコルセットの中に入っている。緑は思っ、愛する人々の為ならどんな苦難であれ、乗り越えられると。

緑は即位の時、正に此のバルコニーから見た光景と代わらぬ程の人だかりを静かに見下げて居た。

しかし、ここにはその時の歡喜の空気や歡声は無い、あるのは刺さる様な鋭い目線と疑惑が漂わせる不穏な空気だ。

過去を振り返りはしない、今やるべき事を精一杯する。

「私が苦難に屈さぬよう、見守っていて」女王は胸の前で静かに手を組んで、愛する人々の無事を祈った。

ゆっくりと息を吸込み、女王は踏み台の上に準備された拡声器に向かって言葉を発した。

『お静かに。御聞き下さい！ 私は逃げません、最後まで言うべきと判断した事は申します！』拡声器を通しての女王の言葉に城の前庭はシンと静まり返る。民の姿は広大な前庭だけでは収まらず、果てなく城外まで溢れ返っていた。

『まず、ご挨拶申し上げます。私が永遠国の王にて風見ヶ岡当主、緑で御座います』

彼女は堂々とした王としての風格を漂わせながら恭しく腰を折り、国民に敬意を払う丁寧な礼をして見せた。

緑の礼と共に国民から微かなどよめきが起こる。誰しも皆、この後に及んで女王が礼を重んずると思わなかったのだらう。

『まず申し上げるべきなのは、事の真相でしょう。しかし、今

私の口からそれらを全て語る事は許されません。但し、私が此の国を思っているのは本当の事だと申し上げましょう。そして、息子の場にそぐわぬ不謹慎な行動をどうか御赦し下さい』まずそこまで言い切って息を付く。

彼女が喋り終わると民衆から不満と抗議の声があつという間に湧き上がった。

もつとちゃんと説明しろ！！

責任取れるのか？！

何で時雨谷なんだ？！

民衆の怒りは正に怒髪天を突くほどの勢いで迸り出て居る。

『聞いて下さい！ 私の声を聞いて下さい！ お願い致します、私の声をどうか』マイクに叫ぶ様に喉から絞り出した声を叩き付けながら緑は前のめりになって喚いた。
その声に気圧されてか民は鎮まっていく。

『私は今までに数々の政策を実行に移して来ました。

政治改革とまでは言えずとも、正義の王として此の国の偉大な歴史のページに名を連ねるべく誠意を持って努力をしてまいりました、

今回の出来事も同じです。

私は最悪の結果を避けるべく最良の采配をしました、
いいえ

……、した積もりになって居たのです。

そう！ 私が浅はかだった為に起こった事件である、とも或る意味では申せましょう。』

民衆は固唾を飲んで陛下の言う事に耳を傾けていた。月光が溢れ、緑の姿をくつきりと美しく際立たせて居る。

緑はそのまま台詞を続ける。

『若し、これが私の意思による物だとそう主張する方が居れば、私はそれを真つ向から否定致します。』

此の混乱の起因が偶然の産物では無かったとしても、少なくとも私の意思ではないのです！』

緑は冷たい風に身体をさらしながら毅然とした態度を保ったままに言葉を發した。ここで馬鹿な失態は出来ない。

今や、自分が放つ一言一言に全世界の耳目が集まっているのは勿論だが、もうこれ以上公の場で話す機会が与えられないのは目に見えているのだ、息子に何かを伝えるならば最後のチャンスだった。

どういう事が説明しろ！

意図的じゃないって事はミスって事か？！

じゃあ、自分は責任が無いって言うのか？！

それでも貴様ツ！ 一国の王か？！！

市民は緑に罵詈雑言をはきかける。それでも真相を語る事はできない、人質を 藍を見捨てはられない。どうしても女王の話は核心に触れる事無く同じ所を堂々巡りの繰り返しになってしまう。

緑は下唇を噛み締めて視線を横にずらした。そこには刺客が立っており、緑をニヤニヤ笑いでみていた。彼女の腰ベルトには短刀と長剣が挟まっている。緑に変な行動や発言が在れば即刻斬り捨てる積もりなのだろう。

或いはチャンスかとも思われたが、こう見張られていては迂闊に瑠璃にメッセージを伝える事もできない。八方塞がりである。

此のまま世の流れに身を任せれば、近い内に時雨谷を政治から失脚させるべく大規模テロを企んだ政治犯兼テロリストとして、永遠国の歴史にその汚名を馳せる事になるのは違う。

それだけは……、堪えられない。

「……此所までか」

深い深い溜め息の後、緑はフツと夜空を仰いだ。天は高く、その端の所在が判らない程に何処までも広がった。深青色のインキを流した様な中に煌めく星々はさながら宝石をおもわせた。煌めきは連なり宇宙を流れていく。

それは、

美しかった。

そして、

美しいだけでなく、とてつも無く力強かった。

「良し」、

覚悟は決めた。

『もう、これ以上は止めにしましょう。私は永遠国の女王です。

本来、王は民を想い国の行く末を見据える者です。民意がそれを望むなら如何なる努力や苦痛も厭いはしません。

そして、如何なる者にも本当の意味で私を制する事は許されない！

だからこそ私は、女王の責任を負って、示しましょう！！』

高らかに宣言すると、緑は台の上から刺客の女の上に飛び降りた。ぶわっとドレスの裾がバルコニーに広がって夜の闇に白く舞った。

「ぎゃっ」

刺客が緑に踏みつぶされて情けない声を上げる。飛び掛かりながら殴り付ける。

不意を衝いたとはいえ相手はプロだ此所で押し負ける訳にはいかない！ 緑は必死で相手を擦じ伏せて憤然と立ち上がった。掌は奪った短刀が抜き身で光る。

剣を奪うが否や緑は台の上にかけて上がって叫んだ。

「我が祖国、永遠国に永遠の繁栄あれッッ！！！」

マイク等は無視して高らかに大声を張り上げる、……喉が潰れる程に叫ぶ。

かざした短刀の切っ先が月光を反射してキラリと輝いた。

最後に一瞬だけ仰いだ宇宙は果てなく高かった。

後ろから誰かが緑を止めようと走って来る音がした、でも、それを

彼女は無視する。

剣を握らぬ左手を自分の心臓に重ねる。コルセットの中の家族の写真を想う。

亡き夫と瑠璃の笑顔が脳内に蘇った。

「瑠璃、後は頼みました。

あなた、今、逝きます。待ってて」呟く。

緑は勢い良く短刀を振り下ろした。

自分の腹部目掛けて。

刃が深々と腹に突き刺さる。月光が白いドレスが赭に染め上げられるのをリアルに映した。

赭が寒風のバルコニーに散る。

女王は瞼を閉じながら立ち台に崩れ落ちた。

第十四話 女王の誇り（後書き）

大分間の開いた投稿になってしまいました。すみません。今度は早めに投稿します。

第十五話 基地へ（前書き）

忙しくて更新全くできてませんでした。 そんなこんなで書き上げた十五話です。 お話は中盤へ進んでいきます……。

宜しければ感想をお願いします。

第十五話 基地へ

瑠璃は寧衣の家のリビングのラジオの前に崩れ落ちた。

「母さん」

ラジオは同じことばかりを繰り返して叫び続ける。

『国王陛下が謁見会にて護衛から奪ったナイフで自殺を謀ったもようです！……………自害です。自害なさいました！』

寧衣の家に辿り着いた処に飛び込んだ訃報だった。

「嗚呼……………」

薄いレースのカーテンから漏れ入った月光が瑠璃の顔に降り懸かり、光が黒髪に乱反射する。瑠璃はラジオの前に膝立ちになったままにただ虚空を見詰めていた。

そのまま放心状態でどれほどそこに座っていただろうか？

いつの間にか愛する人へ捧げる涙を流していた

母さんは……………、死んでしまった。

それを自覚した瞬間に、

堰はぶった切られた。

瑠璃は自分の喉から喘ぐような押し殺した泣き声が漏れ出るのをきいた。涙は止まる事無く、果てしないほど瞼を乗り越えて流れ出る。失う事、それは瑠璃の何かを確実に切り裂いた。誰も居ない窓辺の光の下、少年は独り泣き続けた。

暗い地下水道を空呂は実と歩いていった。天井は低くて床は湿っぽい。脇には浄水場を経由してきた水が流れて居る。暗闇にライターの仄暗い灯が揺れる。

「あの、私たち今何処に居るんでしょう？」冷たい壁に空呂の声が反響する。

「正確には判らない」答えは端的に返ってきた。勿論、前を歩く実が答えたのである。

「多分、西に向かつてるわね」

前だけを見て暗闇の地下を道を見出しながら進んでいく、入り乱れ、絡まる様に伸びる通路を数えながらの移動だ。数え間違えたら地下水道で遭難という事にもなりかねない。

「実さん、あの……、血証石って何ですか？」

空呂は前を歩く実にかけた。

「さつき、惺良先生から預かったけど、そんなに大切な物なんですか？」

「……大切よ、命と同じ位には」

少ししてから返答がある。

「命？」

「そう、あの方は長の一族である事に命を懸けて居る様なものだものね。血証石は各長の一族に与えられた身分証みたいな物よ」

「身分証って……？」

「長の一族の血に反応して透明な石が真紅に染まる　此所よ、着いたわ」

実は途中で言葉を切りそう告げた。

目の前に在るのは廃墟の様な地下建造物だった。

「此所……ですか？」

「もうちょつと奥よ。星陽が無数の古代地下都市を有するのは貴女なら知ってるでしょう？」

「ええ」

「それを利用して基地に改装したのね」

二人は一拳に開けた巨大な空間を歩んでいく。足元は所々で舗装の石畳がはがれて地面がむきだしになっていた。こじんまりとして保存状態の良い家々が居並ぶ。

「これって、史跡ですよ。秘密裏につて事は勝手に改装しちゃったんでしょう？　良いんですか？」

空呂はふと思いついた疑問を口にした。

「大丈夫よ。遺跡の発掘作業現場詰め所を改装したから問題ない

わ。 まあその発掘も百年前に終わってるんだけどね。」
「なるほど、安心しました」

軽く受け流すように話しながら二人は暗い遺跡の中を進む、
空間が開けたので光が拡散し端まで物の輪郭が見えない。

「あの中」

実が指を先の暗がりに向けた。 しかし、目を凝らしても何も見えない。

「壁……ですか？」

ライターの灯に微かに浮かび上がったのは紛れもないレンガ造りの一枚壁であった。

辺りを見るにどうやらそこは作業現場の端で、百年前には物置に使われていたと見られる小屋の裏壁の様だった。

「うん、壁よ」

そう言うとは壁に向かってノックした。 ドンドンと鈍い音が鳴る。 それは何の不自然も無く、レンガ造りの壁を叩く音だった。

「何も起きませんけど……」 壁は依然として変化をみせない。
空呂が呟いた途端にもう一度実はノックを入れる。

ドンドン

レンガに響く冷たい音。
そのまま待つ、

一秒……

二秒……

三秒……

ダンダンダン！！！！

返答は唐突に返ってきた。

「私は星陽学園の実、惺良様の護衛を仰せ遣っている者よ。開門を要請するわ！」

空呂が目丸くして前に聳える壁をみつめていると中から声が聞こえた、

「確認が取れた、開門を許可する」

内側からカチャカチャと微かな音が聞こえる。どうやら向こう側で開錠がされているらしい。

しばしの後、ギキイイと軋む音を立てて小さな扉が内側に開いてポカッと１メートル四方位の通路が出来た。

「な、何これ？」

先程まではそこにそんな仕掛けがある事すら気がつかなかった。

「さあ、さっさと入りましょ」実に急かされて空呂はその出入り口を潜った。

後ろ手に扉がガダンと鈍い音を立てて閉まる。

ライターを持って前を行く実の影に遮られ、前は殆ど見えない。

「早く前に進んで。扉を閉めるから」真っ暗な背後から見知った声で指示が飛んだ。

空呂は素直にそれに従った。

辿り着いた処はコンクリート造りの高さの低い部屋でむき出しの冷たい天井から裸電球が幾つもぶら下がっているホールだった。

「実、惺良様は御無事か？」先程とはまた違った知っている声らし

て空呂は声の方を見やった。
そこに立っていたのは白髪交じりの気品漂う老人で、顔も良く知る人物だった。

「校長先生ッ！！？」

思わず驚きの叫びが喉から飛び出す。

言わずもがな、その方は時雨谷星陽学園の校長だったのである。

校長は叫び声を上げた空呂に困った様な一瞥を投げ掛けると、そのまま自分がした質問に対する解答を

「残念ながら失敗した様だな」と尋ねた。

実は

「すみません」とだけ答え、顔をコンクリートに固められた床に落した。

「話は奥で聞こう。さあ二人共来なさい」

校長はそう言って数歩歩くとその先のホールの奥の扉を内側へ押し開けた。

扉が開くと途端に中から食べ物の香りと人の熱気、喧騒が溢れ出し
てきた。

中にいたのは星陽学園の制服を着た生徒達と何人かの教授達、そして見知らぬ大人が数人である。

校長を先頭に空呂達が部屋に入ると皆それに気付いて会話に差し障る様な騒音はパタリと止んだ。

「空呂ッッ！！」

いきなり自分の名前を大声で叫ばれて肩が盛大に飛び上がった。

「空呂ッ！ 嗚呼……良かった！」何度も名前を呼びながら人を掻き分け掻き分け、やって来る親友の姿を見て空呂も思わず叫んだ。

「光ッ！！」

親友はやって来るなり力一杯に空呂を抱き締めた。

「私ッ……貴女が流れ弾にでも当たったのかとッ……」後の光の台詞は涙と嗚咽で掠れて聞き取れない。他の友人達も出て来て次々に安堵の声をもらす。

「友人同士ですか？」

空呂達の様子を見て声を掛けて来たのは校長だった。

はい、と答えると彼は頷いて軽く微笑を浮かべ、

「事の詳細は後から友達に訊きなさい」と言うと共に向き直った。それを待つて実は校長に説明を始める。

「惺良様は脚に弾を受けました。弾は抜けています、出血は最小限に抑えました。追っ手に追われて御連れ出来ませんでした。が血証石は預かって参りました」

「その後どうなったと見る？」

「そうですね……。正体がばれなければそのまま手当てを受けて一時的に拘束されると思います。それならば、開放されるのも比較的容易いかと存じますが」

「私も同意見だ。むやみやたらと市民を拘束しても居られない筈だからね。無害な教育者を劣悪な状況に追い込むとも思えない……」

……

「問題は正体がばれたかばれていないか……ですね」同意するように皆が頷く。

そこで一人の生徒が話に割って入った。

「確かに軍の狙いは星陽学園でした。しかし、惺良様の正体が判った上ならばこんな大規模テロに持ち込まずとも惺良様だけを狙う事も可能だったはず。俺はばれて無いと思います」

海だ。空呂はそれを認識して思わず眉を顰めた。何よりも先に、何故彼が此所に居るのかという事に激しい疑問と嫌悪感を抱いた。

「勿論、今のところ国王軍が誰の意思に従って動いているのか判らないので正確な事は言えませんが」彼はサラサラと自分の意見を述べていく。

他の人達も彼の意見に賛成を唱え始める。空呂もその考えには賛成する。しかし、それだけでは解せない部分が在った。

「ならば、ひとまず安心ですね」隣から空呂の知らない女性が声を掛ける。校長もそれに同意して頷く。それと同時に辺りにホッとした空気が流れた。

結局、最後まで空呂は何も発言する事無く、会議の様な物は御開きになった。確かに現状に不自然な部分があるのだが逆にそれが示唆する部分も判らなかったからだ。それより空呂の不安は他でも無い瑠璃と緑女王に在った。彼女には彼等がこんな事をするととても思えなかったからだ。

広場に翻った風見ヶ岡の旗を見た時、すぐにそれと判った。何回その印を目にしたことか、瑠璃はいつもその印の入った封筒と便箋で返事を返して来たからである。彼とは一生、再会できずとも良い友人同士であると信じていた。それなのに……。

空呂は軽く与えられた食物を胃に流し込んでから、光や友達たちと基地を一通り回っていった。

基地では地上の情報を入手する手段としてラジオが使われていた。

先程の会議内容では具体的な行動をする訳にもいかなかった。今は全12台のラジオを騒動員して情報収集に明け暮れていた。皆は一睡もせずに一部屋に集まり事の推移を見守った。

そして、日付も変わったAM・3:00

こうして、

空呂は地下基地でラジオ越しながらその瞬間に立ち会った。

ラジオから乱れ飛ぶ声や実況の音の波に翻弄されながら、空呂は自分が深い闇に墜ちていく感覚に飲み込まれた。

かくして、二人を巻き込む様に運命は廻り始めたので在った。

第十六話 (1) 地下の朝

まどろみの中で空呂は呆然とコンクリート打ちの天井を見上げた。

周りを見渡す訳でも無く、起き上がるのでも無くただ惚けた様に在らぬ所を凝視した。

「空呂、おはよう」

ゆっくりと首を動かして周りを見回すと簡易ベッドから5メートル程離れた所に光が立っていた。

「族長議会が緊急召集されるわ。やっぱり御館は国王軍に制圧されてしまったみたい。と、言うか全焼して跡形も無いそうよ。長様は多分御無事じゃないでしょうね」そう言いながら光はベッドに歩みより、淵に腰掛けた。

「……じゃあ、98部族の長が集まってこれからの事を決めるのね」空呂の呟きに彼女は神妙な顔をして頷く。

族長会議はその名の通り百部族の長が集まって開かれる議会のことである。しかし今回、百部族が集まる事は無い。

風見ヶ岡は当主を失い、後継者も逃亡を図ってしまった。

時雨谷は国王軍に攻め入られ、館は全焼し、当主は行方不明でその後継者も身分を伏せて軍に拘束されて居る。

空呂は浅く息を吸込み目頭を軽く揉んだ、身体はだるくて重く頭は少しぼうつとする。

「余り寝れなかったのね。」光が心配そうに声を掛けた。確かに余り寝れなかった、未だ身体の芯が眠って

居る様な気がした。上着を肩に掛けて部屋を見回す、無機質なコンクリート打ちの壁から幾筋も結露が伝い落ちていた。他のベッドはすでに空だった、もう皆起きてしまったのだらう。

「大丈夫だよ。それよりお腹空いちやった」そう答えると空呂は光と会議室兼食堂に向かった。

今、此の基地に居る人間は教授が4名と生徒が15名、更に3名の空呂の知らない人々と校長である。

基地には遺跡から続く通路に通じるホールと四つの部屋があり、それぞれ昨日のうちに作戦室、会議室、女子寝室、男子寝室と名付けられて使用された。他に別のホールや倉庫も在る様だが未だ案内はされていない。基地の全体的な内装は総じて簡素だが、造りはしっかりしている上、必要最低限の装備が為されていた。

空呂と光が食堂兼居間である会議室に着いた時には既に基地の大半の人間が集まっていたようだった。皆は低い声で囁きながら耳をラジオに傾けている。

空呂と光は朝食の薄味そうなスープとパンを受け取り、開いたテーブルにゆっくりと腰掛けた。

「正直微妙な味だな」などと失礼な言葉を吐きながら光はスープを啜り込む。空呂は受け答えもせずにスープに映る天井の裸電球をただ見詰めた。

空呂の頭の中は昨夜から一つの事実を何度も何度も反芻し続けている。一つの事実……勿論、女王の暴挙とその死である。

明らかに彼女の行動は不可解で謎に満ちている。自らの罪を認めつつもその原因を告げること無く彼女は自らの命を絶った。そしてその後継者である瑠璃は現在も逃亡中にある。

今朝までに提出された物的証拠は全て女王による暴動の発生を示唆するものだった。

女王直筆の軍出動の指示書までが世の明るみに出た今、彼女の無実

を空呂は信じられなくなっていた。

しかし、一方では瑠璃とその敬愛する母君である緑の無実を信じてもいたい、そして何かがそう信じるように彼女の中で警鐘を鳴してもいた。

「空呂？大丈夫？」

気が付けば光が空呂の顔を覗き込んでいる。

そして、もう一人 実がいつの間にか空呂の隣の席に座っていた。

「あ、御免。大丈夫よ、ちよつとぼうつとしてただけだから」慌てて笑いを取り繕うと光は怪訝そうに弓なりの眉を顰めた。

少し考えた後、光は空呂に声を掛けようとしたがそれを遮る様に声が掛かった。「貴女、風見ヶ岡と何か関係があるの？」

意外な所から掛かった声は実のものだった。

黒い瞳で空呂をみつめている。明るい電球の下で見てもやはり彼女は美しかった。額に掛かった前髪をゆっくりと耳の後ろに掛ける、その動作は女の空呂でさえ見とれてしまいそうに美しい。

「あるわけないじゃないですか！」空呂が何か言う前に光が噛み付く様に叫んだ。

空呂が瑠璃に出会ったのは彼女が十歳の時のことだ。その日、うらかな春の日差しはあつという間に雷雨になった。ソレは視界さえ遮る豪雨の中での邂逅だった。

あの出会いから七年間二人は誓いど通りに良い友人で日々お互いに手紙を送り会う仲間であった。

だからこそ、広場に風見ヶ岡の旗が掲げられた時も他の部族のものと見違える事は無かった、瑠璃が寄越す封筒に、いつもその御印が印されていたからである。

全く関係がないわけではない。

しかし、空呂は光の発言に便乗して黙秘した。

「そう、関係無いならいいわ。貴女が瑠璃様の事を呼び捨てにするのを聞いたと思ったんだけど、気のせいだったのね」

微かに苦笑しながら実はスープをスプーンで掻き回した。スープの底に沈んでいたベーコンの切れ端が水面に浮かび上がった。

「どんな事でもいい、風見ヶ岡の情報が欲しいの」

そう呟いて実は眼をテーブルの上に落す。

「どんなに小さな事でも、それが刺激になって真実が見えてくる可能性は充分にある、そうでしょう？」

光が挑む様に

「真実ってどう言うことですか？」ときいた。

そして、彼女は暫くの間一人で考え込むとやがて意を決した様に静かに語り始めた。

「私は三年程の間、惺良様に御仕えしているわ。惺良様の身边警護が主だった仕事よ。私の雇主は今行方不明の時雨谷一族当主様、つまり惺良様の叔父上です。空呂には少し話したかと思うけど、惺良様は誰かに命を狙われていて、その為に私は護衛として雇われていたの。日々の暗殺の危険を鑑みて惺良様は身分を伏せて当主一族と関わりのある星陽学園に潜り込んだわけよ。勿論私は生徒として惺良様に御同行したわ。」

実は一息入るとうつむいて視線を落とした。

「だからね。私は惺良様の事はよく知っているの、此の三年あの方の一番側にいたんですもの。」

惺良様は亡き緑女王陛下の事を尊敬しておられるのよ。……とても、ね。そして私も惺良様の事を同様に尊敬しているの。だから、私には女王陛下があんな行動をなさったなんて認められないのよ」

いい終えて実は頭をグイッと上げる。そして、空呂だけをヒタリと見詰める。その瞬間、空呂にはその瞳には何かを信じ抜く強い光が宿っている様に見えた。

「貴女も……そう思ってるんじゃないの？」

実の声は終始小さいものだったがその表情には何か強いものがあつた。

彼女の問いに答えねばならない気がした。

渴いた唇を湿らせて空呂は浅く息を吐いて続けた。

「すみません。さっきは嘘をつきました　確かに、私は風見ヶ岡当主一族と関わりがあります、でも大した関係じゃありませんよ私も女王陛下にはあこがれてましたけど、……少なくともこれだけ物証がある中で彼女の無実を手放して信じられる程じゃ無いです。正直、今回の事が事実でないかと思ってるし」

そこまで言っと思わず空呂は口をつぐんだ。実が、光が痛い程自分を見詰めているのが判った。

続けて何か言いたいのに声が出て来なかった。

「私……、瑠璃の事信じたかったのに。やっぱり駄目だね。今、私凄く混乱してる」

喋るうにも言葉が紡げなくて空呂は激しく動揺した。

泣きそうになって、そして涙を見られなくなかった。力任せに立ち上がり椅子が後ろに大きな音を立てて倒れる。

「だから、実さんの力にはなれません」そう言っ空呂は会議室から走り出た。

得体の知れない複雑な想いがそこにはあつた。

地上での惨劇

女王を信じる惺良

惺良を信じる実

瑠璃を信じたい自分

瑠璃を信じられない自分

瞼を乗り越えて熱い涙がコンクリートの上に落ちた。

第十六話 (1) 地下の朝(後書き)

全く投稿できて無かったんですけど何とか書けました。
これからは余り期間を開けすぎない様に頑張ります。

第十六話 (2) 貨車の朝

同じ朝を瑠璃は揺れる貨車の中で迎えた。意識が覚醒すると辺りは薄暗く、背中に何か堅い物が入った麻袋が当たって痛かった。懷中電灯を使って時計を見ると時刻は既に六時を過ぎている。

タタンタタンと規則的な車輪の音が冷たい鉄の床から伝わってきてそれが微かに瑠璃の身体を揺らす。

列車が出るまでは起きていようと思っていたのにいつの間にか睡魔に負けてしまったらしい。

瑠璃は僅かな荷をほどこ中からパンの切れ端を出して一口食べた。

もう一口。

沢山食料があるわけでは無い、控えねばならないのも判っている。

それでも、無我夢中でパンを噛み砕いて飲み込んだ。そうして彼は溢れそうになる想いを必死で堪えた。母の死、亡き父、祖母様、そして……寧衣。あらゆる思考が怒濤の如く押し寄せて頭がぼつとしているのが判った。

「本当に時雨谷へ行かれるのですか？ 火の海の真っ直中へ御自分から赴かれるとおっしゃるのですか？」寧衣が自分のスカートをギョツと握り締めたままそう問うたのを瑠璃は温い思考の中で思い出した。つい数時間前の記憶である。

寧衣は朝も明け始めた頃になって自宅へ帰ってきた。そして、帰って来るなり力尽きた様にそのまま戸口に倒れ込むようにして嗚咽を上げて泣き始めた。気配を外から悟られまいと部屋奥に潜んでいた瑠璃はその声と騒動に慌てて戸口に駆け付けた。

「寧衣！」声を抑えたまま語勢を強くして彼女の名を呼ぶ。彼女は自らの身体を両手で抱いてその震えを抑えてすすり泣いている。

「瑠璃様！ 私、私っ……陛下を目の前で死なせてしまいました。」

私は、あの方の無実を知っていたのにっ……」瑠璃はハッと息を飲んで寧衣の肩を揺すった。

「母上に会ったのか！」うつむいていた顔を上げて彼女は

「……はい」と言った。

泣く声を堪えて寧衣は瑠璃に経緯を語った。

「……緑様は死を覚悟なさっていたと思う、私に困ったように微笑まれたわ」寧衣は真直ぐに瑠璃の瞳を見た、それは海のように碧い双眸でその底には深い悲しみと苦しみが沈黙と共に横たわっている。更に表面には今にも崩れそうな微かな光の片鱗が漂っていた。寧衣は自分が曇天の月夜、広い海の真中に溺れている様な錯覚に陥る。

溺れて、

溺れて、

沈んでいく……

深い深い碧の腕に抱かれて

ゆつくりと瑠璃の臉が降りた。同時に寧衣はフウツと暗い海から現実へ浮上する。少年の両目尻から泪が溢れ、つと頬を伝った。

「これからどう為さるおつもりなのですか？」

「時雨谷へ行く」寧衣の問いに瑠璃は迷わずに答えた。見ると、

彼女は意表を突かれ眼を見開いてて自分を凝視していた。

「待って下さい！ どう言う事ですか！」

「そのままの意味だよ」

「本当に時雨谷へ行かれるのですか？ 火の海の真っ直中へ御自分から赴かれるとおっしゃるのですか？」寧衣は憤然とダイニングテーブルから立ち上がった。彼女はスカートをギュッと握り締めた。瑠璃はけして焦ること無く、

「そのつもりだよ」と呟き返す。

「勝算は少なからず在る訳ですね」

「……ああ、勝算と言うか 心理的な問題だよ」そう言うと瑠璃は深く溜め息をついた。

「例えば、人は包囲から遠ざかる傾向がある、精神的にも実質的にもね。辛い経験や思い出は他のものと比べると早く風化するし、実際に人は追われると逃げるものだよ。だから、俺達はそれを逆手に取るのさ。」

軍が未だ駐留する時雨谷へ行くなんて誰が予想するだろう、まさに敵の手中に飛び込んで行くんだから……」

「でも、時雨谷の民は瑠璃様を誰よりも一番恨んでいる筈です。」

そんな渦中に飛び込めばすぐに捕らえられるのではありませんか？」寧衣が不安そうに顔を上げる。

「これは行ってみないと判らないことかもしれないけど、これから時雨谷は混沌状態になる筈だ……、時雨谷の民は直接的に軍に反発を抱くだろうし、そうなればテロやら暴動やらで確実に『星陽』の治安は悪くなる。その状況では族長会議にしろ、暫定政府にしろ、簡単に軍の撤退を命令する訳には行かない。軍はテロリストを捕縛するだろう、そして反感は更に高まり、『星陽』はますます混乱する。あくまで想定だけど、もしそうなったなら『星陽』の街はそれ自体が良い隠れ蓑になると思う。」

それに今後に関して全く無策と言うわけでも無い……」

「と、言いますと」寧衣が首を傾げて訊く。

「母と時雨谷族長様に親交が在ったのは知ってるかい？」

「ええ。無論、承知致して居ります」

「うん、だから時雨谷様が御無事ならば、向こう側も母の意図で無

「事は理解して頂けると思っただ」 頷きながら瑠璃は自らを励ます様に拳を上げた。

「なるほど、そこから協力を得ようと言うわけですか」

「ああ、嵌められた者と暴動の矛先にされた者。 憎き敵は同じはずだ、言わば同志みたいなものだよ」

「確かに しかし、ならば早く『香都』から脱出した方が良いのでは？」 寧衣は少し考えた後、ハッと頭を上げて叫んだ。

「そう言うことだ。 力を貸してくれないか？ 寧衣」

少年の言葉に少女は頬を弛ませる

「勿論、喜んで」

始まりつつある新たな朝

しかし、自分たちに未来があるかは決して判らない

それでも、

真実を

未来を

信じていた物を

或いは、これから出会う何かを

手に入れるために……

進もう

瑠璃はパンを飲み下すと宙を仰ぐ、タタタタタタン。 音は彼の中の何かを落ち着かせてくれる。 気が付けば、頭上の小さい窓からは黄金の光が差し込み、壁に平行四辺形を描いていた。 その

まま大の字に寝転ぶと浅く深呼吸する。微かに麻袋の中の土から湿っぽい、何処か懐かしい香りがした。

「祖母様……」ほぼ無意識にその人の名を呼んでいた。

瑠璃が朝早くに寧衣の家を忍び出た時、そこに祖母様の姿は無かった。彼女は寧衣のように巧く城を抜け出せなかった、可能ならば来る手筈だった。が緑の自害に際して事情を知る可能性を鑑みられて連行されたらしい。いや、それは体の良い言い方であって実際は瑠璃の逃亡に関与していると疑われていると解釈してしまつて間違いない。瑠璃の一番の心配はまさにそこだった。

自分の事よりも今は彼女達の無事を祈った。強く、したたかな彼女達……大切な数少ない協力者であり、愛しい人々だ。彼等を、愛する人をもう失いたくは無かった。

「すまない、厄介な事に首を突っ込ませてしまつて……」別れ際、時雨谷へ向かう始発の貨車に忍び込む時、寧衣に向かってそう言った。

少し驚いて彼女は瑠璃を見た。まだ薄暗い光の失せた中で、彼女の栗色の滑らかな髪が僅かな光を受けて輝きながら風に踊った。寧衣の瞳は真直ぐ瑠璃を捉えて、微かに潤んでいた。

「大丈夫」そう言つて寧衣はゆつくりと微笑んだ。

「私も祖母様も、他の協力してくれた人も、皆自分の大切な物を守りたいんです。私だって怖いし、不安だわ……。でも、それでも守りたいものがある、だから覚悟はできています」

「寧衣……」

「生きて帰つて来て下さい」少女の睫毛の間から涙が一滴おちた。水滴は貨車の床に当たつて消えた。

「必ず」

応えて強くて気丈な少女の肩をそっと抱いた。
もりは確かに身体に伝わった。

温かな彼女のぬく

冷たい床に横になりながら瑠璃は呟く。

「行こう、時雨谷へ……」

第十七話 混迷（前書き）

更新がかなり遅れました。

これからもこういう事がたまにあるかと存じますが、最後まで御付き合い頂けたら光栄です。

第十七話 混迷

「空呂」

光に名前を呼ばれて脳が数秒遅れで言葉を拾う。空呂は湿ったシーツに顔を埋めていた。嗚呼、まただ。空呂はそう思いながらゆっくり気怠げに身体を起す。

ここ二、三日はこうやって光が気遣わしげに空呂に話掛けて来る。詰問する事こそ無いが彼女が空呂に風見ヶ岡との関係を訊きたがっているのは目に見えて明らかだった。勿論空呂にその話をする積もりは無い。幾ら話をして、瑠璃と風見ヶ岡に対する空呂の立場を正確に定める決定打になるような助言をしはくれまい、そしてその助言はただ空呂の混迷を深めるだけだろう。

「空呂……………」

二回目に自分の名前が呼ばれた時、空呂はその声が掠れて震えているのに気が付いた。ハツとして顔を上げて親友を見れば彼女はあの丸い茶色い瞳に溢れんばかりの涙を貯めていた。

「光……………」名前を呟く様に嘯くと彼女は顔を両の手に埋めて激しくしゃくり上げ始めた。空呂はそれに弾かれる様に掛け布団を撥ね除けて親友に駆け寄った。

「……………」光？ どうしたの？ 何があつたの？」靴も履かずにベッドから降りたため、冷たい床が足にじんと凍みた。「私……………」そう言つて光は空呂の眼を見た。

「母が……………」震える唇の間から光の掠れた声が漏れた。嫌な予感がした。

「……………」死んでしまった、殺されて」
言い終えた光は真っ青で震えていた。身体はびっくりする程に冷

たく、顔には恐怖と悲しみが混ざって浮かんでいた。

地下から偵察隊が出て行つてのは昨日の夕方近くになってからだつた。基地は二つの横穴と一つの縦穴を持っている。一つは紛れもなく空呂達が入ってきた入口だ。そしてもう一つはその反対方向に走る水道に通じているらしい。更に最後の一つである縦穴はそのまま真直ぐ上に伸びており、その上には星陽中心部に比較的近い位置に立つ一件の民家がある。

その民家は古くから長一族が信頼する人々が住んでいる。全ては長の命令によって為された事だ。

縦穴を通つて外に出た偵察隊は教授や見知らぬ大人で構成されていた。入った情報では、街はひとまず鎮静化していて死傷者もかなり出ているらしい。市内中心部では夜間徘徊禁止令が施行されており、昼間も動きが制限されていると言う。

偵察隊の第一の目的は基地に避難した生徒達の家族の安否確認だった。

「さつき、国文学の教授が戻られて、母さんが庁舎の下敷きになつたつて……」

光は鳴咽を上げながらやつとの事で言葉を紡ぎ出した。光の母は確か、第二庁舎の災害管理デスクのサブチーフを任ぜられている優秀な人だったはずだ。

恐れてはいた、でも現実になつてしまっていたなんて……。

「ひ、光……」

何かを後に続けようとするものの口の中が干上がって、舌までもつれて何も喋る事ができない。

湿った薄暗い室内に光の掠れた泣き声だけが空しく響いていた。

泣き声を押し止どめる様に歯を食いしばる光に静かに付き添っていた空呂はノックの音に顔を上げた。光を立てさせてベッドに誘導してから戸を開けると目の前には実が立っていた。

「光はどう？」

「酷く錯乱してます。それより、光の母の話は……本当なんですか？」

扉の外には他の友人達も居並び、一様に顔を複雑そうに歪めていた。「光は母親の死を聞かされてすぐに部屋を走り出て行ってしまっただけ、他にも伝えたい事が在るのだけど……」実が静かにそう言う。

しかし、空呂は別の事の方がとても気になった。

「あの、光のお父さんは無事なんですか？」それを口に出すと実は深刻な顔をして、そこが問題なのよ、と呟いた。

光の側を今離れるのは不安だったがそれを他の子たちが変わって貰い、空呂は実に命じられるままに彼女の後に付いていった。向かった場所は作戦室だ。そこは基地の最深部であり、少なくとも空呂がここに来てからは一度も生徒がそこに立ち入った事はない。

「入って」実はその戸を開けて空呂に入室を促した。「どうして私なんですか？」部屋へ入る一歩手前で実の真意を探る様にそう聞いた。

よほど顔に困惑と不安が浮かんでいたのだろう。実は空呂に向かって少し表情を崩して、貴女だけじゃないわよ。と言った。

中に入って見るとそこは大きめの机と椅子とが置いて在る何の変哲もない部屋で、会議室の二分の一位の大きさしか無い以外は二つの

部屋の内装もさして大差なかった。

打ちっぱなしのコンクリートに、良く普及している型の多目的スト
ーブ、壁に掛けられた時計に地上から引つ張ってきた電波を流して
いるラジオと古い本棚、そして入って突き当たりに垂れ下がる間仕
切りの緞帳どんちようの向こうには更に部屋が見える。そして、その垂れ幕
には時雨谷一族の意匠が入っている。

そして部屋には校長を始めとする教授陣と海が着席していた。

「海、貴方が何故ここに」と冷ややかに問うと、

「それはこちらの台詞だね」と相手も毒づく。二人は思わず面と
向かつて睨みあった。

空呂はつい一週間程前に海と言い合いした事をすぐに思い出した。

海は空呂に他愛のない理由で文句を付けてきた、但し授業での空
呂の発言の内容が間違っていた可能性は充分に在ったと思うし裏付
けが取れなかっただけに応酬の白黒はどうも付かなかった様に思う。
しかし、無礼極まり無い態度を一方的に取られた事はどうにも解
せない。

まあまあ、落ち着いて。と宥められながら空呂は椅子に腰を下ろし
た。するとすぐに海が口を開く。

「それで、御用件はなんですか」落ち着いて、明瞭な声だった。

「その、つまり貴方達の意見を聞かせて欲しくて呼んだの」一番若
い女性が海の質問にさつと答えた。

「意見ですか？」驚いて空呂が訊くと大人達はそろって頷く。海
は暫く怪訝な顔をしていたが最終的に

「何故です？」と聞き返した。

「我々の予想の斜め上の出来事ばかり起こるからよ、どうもこの暴
拳には裏がある様に思っわ」黙っていた実が口を開いた。

空呂も海もそれを聞いて一様に顔をしかめた。

「まあ、聞いて頂戴」実はそう言って話し始めた。

「重要な点はうちの学校の関係者が集中的に拘束されてるって事よ」
空呂は路地で渡り合った兵士が自分の制服を見て生徒だと気付いき、危うく捕まり掛けたのを思い出した。

「初めは惺良様の正体を知った上であの方の情報を集めているのかと思ったのだけどそれならば惺良様はとくに殺されているはずだわ。ところが、少なくとも今朝までは惺良様は生きていた事が確認されてるわ。今日開放された人で収容されてるあの方を今朝見ている人がいたから。」

惺良様殺害が目的なら、事が起こって四日も経つのに惺良様を生かしておいたり、他者の目に触れる様な監禁の仕方をしてるはずが無いでしょう？　つまり、軍側は由宇奈先生が惺良様だと知らないって事」

「そうなりますね」空呂が答え、海も頷く。

「ところが……、星陽学園は狙われ。関係者は拘束された」校長が静かに呟く。「奴等の目的とその裏、ですか……」唸る様に海も呟く。

実は唸る海に更に告げた。「それだけじゃないのよ、不可解なのはね」その言葉に二人はそろって眉を寄せた。

「空呂は知ってると思うけど、光の母親の死亡が確認されたわ」
実の言葉に海は顔色ひとつ変える事なく落ち着いている。

「光の母親は軍と市民のダブルチェックで死亡が確認されて衛生上の理由から火葬されたそうなの。だから今、遺骨は軍が管理しているのだけど、私達が光の母親の消息を訊きに行った時に、軍は私達が何者で光が何処に居るのかを酷く知りたがったのよ。勿論、

無難に近所の住民だと答えて切り抜けたけど」「それは即ち、光だけが他の市民達と違って居場所を探られて居ると言う事ですか？」
実にすかさず海が切り込んだ。「そうね、そうなるわ」と答えて彼女は更に言葉を続ける。

「そして更に気になるのが、光の父親の事よ。光の父親は暴拳の二日後から消息をたっていたから囚われている可能性は低いとは思ってたんだけど、残念ながら捕まって光の居場所を吐くように強要されているみたいなの」

「その情報は何処からです？」と、これは空呂の質問だ。

「釈放された信頼出来る市民よ。囚われていた隣の部屋で光の父親が尋問されていたのを聞いたんですって」

「光さんは何故か、しかし確実に奴等に追われている」実の言葉を締めくくる様に国文学の教授が静かに囁いた。

部屋に深い沈黙が降りた。誰も何も言わず、部屋の中にはコチコチと鳴る時計の秒針の音が嫌に大きく聞こえた。

謎は更に混迷を深めて行く。

女王が《失敗》から引き起こしたと告白した暴拳、そしてその裏で動く何か時雨谷と学園を巻き込む作為。

暴拳は誰の意図なのか？ 目的は何なのか？ 風見ヶ岡の後ろに黒幕が居るのか？ どうして光が追われるのか？

空呂にはどれもが謎に包まれている様に思われた。それも、何かドロドロした昏い物が地下に這い回っているような……。

そして、ふつとある疑問が生まれる。

「実さん、軍を今動かして居るのは族長会議ですよ？　なら、学園関係者への措置は族長会議からの物ですか？　違いますよね。」

関係者の捕縛は軍が押し入って来た直後から始まっていたから。では今、軍……若しくはその一部が中央の指揮系統から外れて行動していると言う事になります。それは中央でも、王でもない第三者が王立軍隊に指示を与えている。と、言う事では？」

空呂の発言にハツと何人かが息を飲んだ。

簡単な事だ。王は死に、暫定政府は学園にそんな仕打ちは出来ない立場にある。若しそんな事が起これば国としての存続さえ危うくなる。そして、その裏から第三者存在の可能性が浮上する。

そして、唐突に海が叫んだ。「それが瑠璃だという事はないか？

あいつなら今回の事で母親に罪を着せて都から脱出できるし、軍出動命令書に王印も捺せる機会がある」

空呂はその言葉に激しく怒りの感情が湧くのを感じた。「瑠璃はそんな事しない！！」そう叫ぼうとして……、やめた。確か

に王印の管理は厳重に取り決められていた。空呂はギョツと下唇を噛んだ。或いは瑠璃ならそれが可能かもしれない。

空呂には瑠璃も自分の判断も海の仮説も信じられなかった。

「それは無いと思う」実が言う。「私は惺良様のおっしゃることを信じるつもりだ。惺良様は風見ヶ岡を信じておられる」

海はそれを聞いて微かに

「信じる……ねえ」と嘲笑した。

結局、会議はその結果全てが推測に過ぎず、実質的な見解の為されないまま解散と相成った。

作戦室の扉を潜ると会議室に居た生徒達が一樣に空呂と海に目を向ける。彼等の側を海は無言で通り抜け、空呂は話し掛けて来る生徒達をかわしながら彼を追いかけた。

会議室から廊下に出た所で空呂はようやく海に追い付いた。

「待つて！ 貴方……光のお母さんが亡くなつた事知つてたの？」
海が空呂の声に振り向く。「いや」と答えは短く返ってきた。

「でも、貴方はちつとも動揺しなかつたわ」

「動揺する必要があるのか？」

「なっ……」

「君は俺に同情しろと言うのか？ 言つて置くが、俺は独り暮らしだ。但し、君の様な下宿じゃない。俺には両親が居ない」

「……………」空呂は沈黙した。

「もう失うものなんて何一つない。他人の事なんかに構つてられない、自分の面倒で精一杯だよ」

何も言えない空呂を尻目に彼はくるりと空呂に背を向けた。廊下の男子寝室の入口に着くと、海は思い出した様にこちらを見て、
「一つ警告だが、あの突つて人は信じると言つたけど実際はそんなに甘くないよ。人は親愛を裏切る生き物だからな」と言つた。

ボタンと音がして男子寝室の扉が閉まつた。

空呂は静まり返つた薄暗い廊下に一人取り残されていた。浅く深呼吸をして肺に空気を取り込む。人を信じないと言つた時の海の顔が脳裏に焼き付いていた。あの目は以前も見た事があつた。

一週間程前に夜の学校で会った時の彼自身の目にそっくりだった。
深い寂寥と悲しみ、そして苦悩……。

空呂はそのままそこにずっとただ立ちすくんでいた。

第十八話 真実へ

その日、会議室にいる人々は極少数だった。ある程度の治安回復が見られた為に生徒達は両親の元に一時帰宅しているのだ。しかし、勿論例外はある。空呂や光、それに海などの訳有りの生徒は未だ基地に残っていた。空呂の場合は実家が遠い為に一週間以上経っても未だ連絡が巧く取れずに難儀しているのだった。

「そろそろですかね？」

会議室の真ん中のテーブルについて紅茶を啜っていた実が校長に呟いた。

「それは、テロの事ですか？」 「ええ」

「そろそろ過激な一派が市民を先頭して抗議活動を始める頃合でしょう」

光の意見に校長は静かに頷いて同意の意を示した。

「軍が市民に対して行なっている処置と、暫定政府の発表に微妙なズレが生じています」「やはり、気になるかね？ 実君も？」 カップの 中に踊る裸電球の光をティースプーンで揺らしながら校長は囁く。

政府の発表では、『星陽』に駐留している国王軍は極めて的確に人道支援活動を遂行している事になっている。しかし、現実が違う。軍は市民を支援しつつもその行動を束縛し、どのような作為があるのか星陽学園の関係者をさらっている。僅かではあるが何処かで確かに情報は歪曲している。暫定政府上層部が現実を隠蔽しているのか……、若しくは暫定政府の命令を国王軍が違えているのか？

眞実は未だ見えない。

実と校長、二人の間に静かな沈黙が降りる。

誰も言葉を発しない中でラジオだけが無機質な音で情報を発している。

じりりりりり

その時、会議室に取り付けられた小型のベルが鳴った。

「帰って来ましたか」

「その様です、私がいきます」

実はすきのない動きで椅子から立ち上がるとスルリと会議室を抜け出た。そのまま誰も居ない地下の薄暗い空間を弛まぬ素振りで闊歩する。突き当たりの扉の鍵を解除して螺旋階段をのぼり、更に梯子を上げる。

暗がりの中でもその動きは洗練され、無駄がない。その様に訓練されて来た。

全ては家業の為に……。

そして、初仕事……。そう、惺良は実の初めてのクライアントだった。

初めて会った時は思いもしなかった。けれど確実に実の惺良の誠実さと凜とした強さを内包する人となり惹かれて行った。それは、尊敬と親愛……。

実は梯子の続く暗い縦穴の上部を見詰める。地上からもたらされる新しい情報が惺良と時雨谷にとって良い物であります様に、実は心の中で静かに祈った。

だが、それは異様な形で裏切られる事となる。

空呂はその頃、光とその他数人で女子寝室にいた。他の生徒達は皆、星陽以外に実家がある生徒達である。そこにいる誰もがそろって何も語ろうとはしない。情報は限られ、自分達は何も出来ない存在なのだ。それはとても辛かった。特に光と来たら、母の死以来塞ぎ込んで食事さえまともに摂ろうとしない。光の体調の心配もあり空呂も精神的にかなり疲労していた。

バタバタと足音がして、廊下がにわかに騒がしくなったのはまさにその時だった。

ものすごい勢いで女子寝室の扉が開く。パンツと扉は壁に打ち付けられて盛大な音を立てた。

「一体?! 何なんです?」

空呂も光も他数人の生徒も驚き戸惑い、されど素早く跳ね起きた。

目の前にいるのは実で、酷く取り乱して荒く息を吐いていた。

彼女は鋭い眼光で室内を一瞥すると空呂の方に目を止める。悪い

ニユースなのは容易に想像出来た。

「私……、ですか?」震える身体を両手で抱いて懸命に声を喉の奥から絞り出した。

実はゆつくりと首を縦に動かして厳しい面持ちで空呂を見詰めた。
そして空呂に白いしわくちな紙片を差し出した。

よろよと実に歩み寄り、嫌に汗ばんだ手で白い紙片を受け取る。
何故だか恐怖で口の中の水分が干やがってカラカラになる。

皆が自分に注目しているのが背中に刺さる視線で判った。廊下は
幾分騒がしくなつて、男子生徒や他の教授達が部屋を覗き込んでい
た。

嫌だ、嫌だ、嫌だ……

心臓が早鐘の様に激しくなる。ゆつくり紙を開いて伸ばす。紙
は電報の返事だった。

「お願いします」

そう言つて、地上に上がる先生に空呂が故郷に電報を打つように頼
んだのはもう四日前の事だ。内容は至極簡単に自分の無事を家族
に伝える物だった。

その返事……。

書かれた短い文章の字面が目に入る、体から血の気が引いて行くの
が判った。呼吸が早くなり、あわや過呼吸に陥りかける。

紙の伝達欄に書かれた一行。

『むらがおそわれ、しさん。ごりようしんはなくなった』

「村が襲われ、四散。ご両親は亡くなった……」口に出して読ん
で崩れ落ちる。差出人欄には『こののは』とある。港は空呂
の家のお隣りさんで空呂の幼馴染みだ。港の母親は生きている。
しかし、空呂の両親は死んだのだ。いや、間違いという事も有
り得る。きつと間違いだ、嘘だ。信じない。私は信じない。

いつの間にか近付いてきた光が後ろからギュツと空呂を抱き締めた。

「空呂……」とだけ呟いて彼女は泣き出した。

「泣かないで」そう光に言おうとして自分も泣いているのに気が付いた。ポタポタと大粒の涙が目尻から頬を伝い床に散る。自覚してからもう遅すぎた。涙を止どめる術は無く、いつしか嗚咽が唇の間から漏れていた。

星陽では空呂の村の様な小村の情報はめったに入って来なかったし、今は緊急事態もあいまって事実関係の調査は決して簡単ではなかった。

勿論、空呂は誤報である事に一縷の望みをかけていたが、次の日、悲劇が事実である事があっさりと判ってしまった。だが、その原因や犯人、生存者の名や居場所等の詳しい情報は全く判らない。

事実やそれに近いモノは地下にいては得られ無いのだ。 - -

- - - 自ら真実を求めぬ限りは……

基地の方も空呂ら家族の安否を気遣い、捜査を進めてくれてはいるが、他にもするべき事は有り過ぎて満足には手がまわらなかった。

そして、電報から二日後、遂に空呂は一つの決心をした。

それは - - - 自らの手で真実を手繰り寄せる事。

疲れ切った身体をベッドから起こすと隣のベッドに横たわっている光が目に入った。彼女の顔は蒼白く、寝顔から極度の疲労が滲み

出ていた。光は空呂の為に泣き、悲観にくれる彼女を抱き締めて側にいてくれた。

何もかもうつつに見える程に不安定ではあったが光が自分にずっと寄り添ってくれていたのは覚えていた。

ただでさえ母親の死に参ってしまっているはずなのに、それでも光は空呂を支えようとしてくれた。彼女が母親を失い、父親を捕らえられてから空呂が光に出来た事の何倍も彼女は空呂にしてくれた。

「有り難うね、光」

そんな他愛ない言葉でしか表現出来ないけれど、本当に感謝している。――だから、どうか。此所を去る私を責めないで。

空呂ベッドから滑り出て光の枕元に立った。

昼夜を表す機能のついた時計は夕方の5時をさしていた。時間は良い頃合だろう。

一刻も早く村の悲劇の原因を知りたかった。

ベッドの下から配給された服を引っ張り出して身に着ける。上はベージュのカッターと灰色のカーディガン、下は綿のパンツと履きなれたブーツ、更にコートを羽織る。

仕上りとしてベッドの底から兵士から奪った拳銃をベルトに挿す。

空呂はギュッと拳を握り締め、少し離れた所にある実のベッドの荷物の中から小振りのナイフを拝借した。

部屋の中にいるのは空呂と寝ている光だけなので見咎められる事は無い。

ナイフを腰に挿して空呂は女子寝室の扉を推し開いた。

冷気が満ちている廊下を空呂は静かに駆けて行く。巧く誰とも出

くわす事無く横穴までの道を辿って行つた。

地上に出てこの目と耳で真実を見聞きしたかった。意志の強さと探求心では誰にも負けない自信が在った。

父親と母親を殺し、村をも壊滅させたモノの正体と、姉の伊呂と港たち一家や村人の安否がどうしても知りたかった。

周りに心配を掛けようとも、行く価値があることのように思えた。

辿り着いた横穴を塞ぐハッチの様な物を開けていく。ギョルギョルと錆びた音を立ててゆっくりとハンドルを回す。

ガコオンと音がしてハッチが開く。そのまま潜ろうとした、その時。後ろから男の声が響いた。

「何故行く？」

びつくりしてハツと振り向くと髪の毛の茶色い精悍な顔つきの少年がポケットに手をつ突っ込んで立っていた。海だ。

「……………」

「黙秘、か」呟いて彼はくくくと笑った。

そして急に真剣な顔になる。

「外へ行つて、君になにが出来る？ 迷惑を皆に掛けるだけだろう？」

迷惑……なのは百も承知の上だ。――ただ、私は……

「知りたいの、何があったのか」

「待てないのか？」

「待てない、私は自分で家族を探してみせる、そしてその犯人も。真相を失いたく無いの。待っているなんて出来ない！ 判るでしょう？」

その答えに海の整った両眉が寄る。二人は真直ぐ対峙するように見つめ合った。

そして海が再び口を開く。

「前、君に十六夜姫の台詞の間違いを指摘した事があったよな。あの時、俺は君に“葬られた真実”の事を言っただろう？」

……若し君が真相を知りたいなら、徹底的にやる事だ。どんな事でも闇に消えて行つて良い真実なんて無いのだから。

そう、君の故郷の悲劇も然りだ。俺の想像だが、君の村の惨劇は今回の内乱と関係がある様に思う」空呂はハツと息を呑む、確かに星陽の出来事で世間が混乱しているうちにしてやられた感は否めない。その考えに行き当たり、彼女は力強く頷いた。

「俺にも、一生を懸けて真実を探していくべき謎がある。だから、同じ想いを共有する者として君を引き止める事は出来ない」

少年はそう言つてゆつくりと首を縦に振った。

行け

その合図だった。

「行かせてくれるの？」

「ああ」

「……………」行け。但し、死なないで無事に帰つて来い。君が死んだら光とかいうあの友達が悲しむだろう」

その一言で海が二人を良く観察していたのが判る。海の意外な一面を垣間見た気がした。

空呂は不敵に笑うと

「有り難う」と海に言つた。

感謝の意を告げる言葉がすんなりと心に沁みた。同じ特待生として意識し合つてもいたが、けして、互いに仲が良かった事は無い、むしろ無意識に敵対していたかもしれない。そんな彼と初めて会話をしたのは二週間余り前の月の夜だった。

そして、彼は ただ真実を追うだけで良い。と言ってくれた。 背中を押された気がした。

「有り難う」と、もう一度口にする。 海に笑い掛けると彼は微かに唇を上げて見せた。 彼が見せたのが笑みだったのかどうか空呂には判然としなかった。 けれども、心が幾分軽くなった様に感じられるのは気のせいだろうか？

くるりと振り向くと目の前にポツカリと開いた暗い穴を凝視する。 ゆっくりと心を静める。

真相は判らないが、それを知らなくてはならない。

そう、 - - - - -それがどんなに酷なモノであつたとしても……

空呂はスルリと基地のハッチを抜け、 星陽の地下の暗闇へと足を踏み出す。

少女の背後に開いた壁の穴からは晃々と光が溢れ、 その中から一人の少年がその凜々しい背中を見送っていた。

第十九話 始動

祖母様

そう呼ばれた気がしてその老女は粗末な寝台の上で小さく身じろいだ。建物の中それも一分の隙間も無い部屋だと言うのに凍える程に寒い。

老女はしっかりと自らの身体に毛玉だらけの薄い毛布を巻き付けた。堅くて冷たい鉄格子の独房に彼女は閉じ込められて居た。それは都の王城の地下に造られたモノだ。既に此所に閉じ込められて一週間以上がたっていた。

「祖母様、俺です」

良く知った顔の兵士が顔を見せた。配下では無いものの風見ヶ岡と縁のある者だ。未だ歳も若く、二年程前に兵籍を貰ったばかりだった様に思う。

「お身体に大事ございませんか？ お食事を持って来ました」

彼は小さな声で囁いて皿の載った盆を差し出して来る。皿の中は此所暫く食べた覚えの無い程美味そうな温かい食べ物に溢れている。老婆は怪訝そうに首を傾げた。

「先程別の方がいらして食事を持ってきたが、一日二食が三食になったのか？」

そう聞くと兵士は困った様に笑って見せた。

「いいえ、これは俺と何人かの貴女の味方からの差し入れです。上官は立場上そんな事出来ませんが牢屋の監視をわざと緩めてくれました。貴女の味方は沢山います。皆、瑠璃様の身を案じているんです。そう、あの方の無実を信じている者は決して少な

いんです」

差し出された盆からは温かな湯気が立ち上ぼっていた。トロトロのクリームシチューとやわらかいパン、ハムや付け合わせの温野菜まで付いている。これまで食べてきた質素で量の無いそれらとは比べものにならない程だ。

鉄格子の間から皿が差し出され、彼女はそれを有り難く頂くことにした。

「それは料理長からです。祖母様がお辛いだろうとおっしゃって特別に作っていただきました」兵士はそう言って、未だ幼さの残る顔一杯に笑みを浮かべた。薄暗い地下牢の廊下で彼の顔は見にくかったのだけれど老女はその笑顔が涙で滲むのを感じた。

負けられない。自らの保身さえ顧みず私に希望を届けてくれる人がいる限り、負けられない。

幾ら罵詈雑言を吐かれても、ひもじくとも、凍えようとも、黙って瑠璃との関わりを否定し続ける。全ては可愛い孫娘と仕えた主人の忘れ形見、そして亡き女王を愛する人々の最後の希望を守るために。

たとえ死ぬ事になっても後悔はしないだろう。白旗は掲げる事無く墓場まで持つて行く、そう決めた。

未だ闘いは始まったばかりなのだ。

……ゴーン　ゴーン

頭の上の方で腹に響く振動がする。ステンドグラスから洩れ入る朝の陽光が教会の中に色鮮やかな陰を投げ掛ける。埃っぽい床か

ら空呂はゆつくりと頭を上げた。狭い所に不自然な体勢で寝たからだろう、身体全体がキシキシと音を立てて軋んだ。

周りには同様に数えられない程の人々が重なりあう様に眠っている。年寄りから乳飲み子まで、家を失った人々の多くが近所の教会に身を寄せているらしい。

空呂が此所にやって来たのは五日程前の話になる。

彼女は地上に出てすぐに街の変容に気が付いた。

電灯の明かりは落ち、街にいる人々は前だけを見て黙ったまま足早に歩く。商店通りに出ればほぼ全ての店は雨戸が降りている。

そこは空呂の勝手知ったる星陽の街とはまるで違ってしまった。そうして街の様子に驚いているうちに陽は落ち始めた。様相をすっかり変えてしまった星陽の街が紅い光を受けて鈍色に光るのを見ながら空呂は市内を歩いた。

そこに、この間まで息づいていた活気は無く、代わりに町角の至る所で銃をささげ持つ兵士が見られた。

気が付けば夜はやってきていたらしかった。辺りは既に真っ暗になっってしまった。

微かに残っていた夕暮れの紅の名残もいつの間にか無くなっている。冷たい風がヒトもまばらな路地に吹いた。空は昏い色に塗り込められている。

怖い、そう思った。

行く当てもなかった。全ては覚悟できていたはずなのに、怖かった。心細かった。

無意識のうちにポケットに手を入れて中にある拳銃のグリップを握る。

したばかりの覚悟が解けない様にその重みを確かめる。真実への

道のりは遠い、されど行くと決めたのだ。グリップを握る手が微かに汗ばんでいるのが自分でも良く判った。

その時、急に市内の教会の鐘が一斉に鳴り響いた。

ガラーン　ゴローン

ゴーン　ゴーン

あらゆる鐘の音が重なりあい、市内全体の空気が異様な程に震えている。

驚きと違和感を感じて空呂はハツと腕時計に目を遣る。時刻は七時十分前、……余りに中途半端な時刻だ。おかしい、何故だ？ふと周りを見ると、幾人もが一番近くの教会の鐘楼を見上げたり微かに見やりながら忌々しげに眉を顰めている。そして彼らは俯いて先程より更に足を早めて歩き出した。

訳も判らずに立ち止まっているところに声がかかったのはその時だった。

「やっぱりだよ！　お嬢さん、あたしは襲撃のあった日あんたに助けて貰うた者だよ。覚えとるかい？」

声を掛けてきたのは見覚えのある腰の曲がったお婆さんだった。兵士に追尾されている所を助けた覚えがあった。

「ああ、あの時の！　息子さんには会えましたか？」

「……………いんや」

問いに彼女は首を振って見せる。

「あの子は襲撃してきた兵士に殴りかかったんだそうで、まだ拘束されとる。開放したらテロリストになるかも知れんて疑われとるんじゃ」

「……………」

だけど、死んどらんだけマシじゃあ。

そう言つて、老婆は力無く微笑んで見せた、けれど空呂は何も言えなかった。

「あんた家は無事かい？　あと十分弱で夜間徘徊禁止時間じゃよ。

さつき鐘が鳴つたらう？」

「夜間、徘徊……禁止令？」　「そういえば基地でもそのことが話題になつていた。

「あてが無いならあたしが身を寄せてる教会に行かんかの？　いつまでも此所に居たら時間になつちゃうよ」

お婆さんは空呂にそう言いながらそのしわくちやの手で空呂の手を取った。

その日から空呂は情報を得るために昼は街を駆け回り、夜はお婆さんの元で過ごす生活を始めた。

毎日、星陽市内を情報を探して巡る。　決意は在ったが真実に迫る具体的な策は無く、情報も無かった。

空呂の本心を言うならば、本当は今すぐにでも故郷に飛んで行きたい。　だがそこにはもう何も残つて居ないと風の噂で聞いた。　全て焼き払われ、村は破壊され尽くし人々も散り散りになったのだそう。

その中で噂を聞くうちに奇妙な情報が控え目に流れてきた。　村の跡地付近に軍人の様な人間が盛んに出入りしているらしいのだ。

他の噂は治安の乱れた星陽の地で大したニュースでも無いのに異常な程大々的に囁かれている。

そしてこの異様な噂の流れ方。やはり軍が襲撃に絡んでいるのか？……まるで、情報操作が為されているようでさえある。若しそうであれば、軍は、そしてその黒幕は何を民から隠そうとしているのか？

「行つて来る」ナイフでザックリ首筋まで切った髪を纏めてニットの帽子に突っ込みながら、空呂は隣りの毛布に笑い掛けた。「気を付けてねえ」薄汚れた毛布を被った老女が声を返す。

教会の朝の鐘と共に空呂の朝は始まる。この生活も始めてから今日で一週間になる。さすがに慣れてきた。街の様子も把握出来て来ている。

しかし真実に繋がる確実な情報と成果は未だ何一つ掴めていない。

枕にしてあつたコートを広げて皺をのばし、その内側にあるナイフと銃の感触を確かめる。少女の色素の薄い灰褐色の髪が朝の陽光を浴びてキラキラ輝いた。

身仕度を整えてゆっくりと立ち上がり、ブーツの結び目を二重に直して軽く踵を鳴らす。

今日も情報探しの一日になるだろう。

モゾモゾと起き始めている人達の間を縫う様に出口に向かって聖堂を後にした。

広場の炊き出し場からパンと伸びてブヨブヨの麵の入ったスープを失敬して軽く朝飯にありつく。

下手をすれば今日一日をこれだけのエネルギーで過ごさねばならないかもしれない。栄養補給は重要だ。食事をサラリと済まし、皿を片付ける。今日は西地区を歩いて見るつもりだ。

門に立つ兵士に出門許可願いを出す。兵士は慣れた様子で判を捺した。

西地区は大規模な工場などが立ち並ぶ工業地区だ。

学園の位置する商業区としての北地区や、住居の立ち並ぶ南地区とは漂う雰囲気は全く違って来る。

昨日まで情報を集めていた南地区で奇妙な話を聞いた。西地区に市民による大規模な反軍隊組織が点在しているらしく、彼等は軍が事的首謀と考えて数々の情報を仕入れているというのだ。

この何もかもを容易に信じられない状況では、情報を集めて繋ぎ合わせる事だけが真実を知る方法だった。

星陽市内は想像以上に広く、西地区に着く頃には陽も高く上りきっていた。

予想を越えて西地区の状況は酷いものだった。道端にはゴミが積み上げられ、商店のショーウィンドウは割られてところどころち血の様な赤黒いものが付着している。美しい町並みの名残さえ残っていない。

どうも襲撃のさいに工場の労働者が奮起して軍の部隊と肉弾戦を繰り広げたらしい。彼等は日頃の仕事で鍛えた身体でプロの兵士達を翻弄した。

街並みの荒れようはその時の乱闘のせいらしい。そして、勇敢に闘った彼等の一部が反軍的な組織の中核を担っているらしかった。

相手はあくまで元労働者だ、裏社会の犯罪者共ではない。そして、こちらは元女学生だ。ある程度安全に接触の出来るルートは予め用意してある。

南地区のある組織のスポンサーの青年から仕入れたネタだ。彼とは学園襲撃の時の情報とで取り引きした。

教えられた接触の機会は陽が落ちた後だったので脇道に入り偵察も兼ねて辺りをぶらつく。

余りに辺りを見回していたのだろう、途中で兵士に声を掛けられた。「その青年、何をジロジロ見ている」

どうも、「作戦」は功をそうしていたらしい。短く切った髪にニット帽を被ると、空呂の身長だけあれば男にも見える。但し、体躯を大きく見せるためにセーターは2枚も着込んである。

「いや、道に迷って」

無難な台詞を兵士に言っ、少女はその場から逃げる様に立ち去った。

身体を男に見せるのは空呂の苦肉の策だ。もはや、元女学生が独りで路地に入って行ける程に星陽の治安は良く無いのだ。

空呂は一息入れようと寂れた喫茶店の扉を開いた。中は薄暗く、微かに埃と砂の匂いがした。

「ブレンドとパンケーキを」と低い声をつくって頼む。

マスターは微かに眉をしかめたが、詮索しない事にしたのか空呂の机に皿とカップを黙って置いた。コーヒーは少し薄く、パンケーキはやたらと粉っぽかった。

そっこうするウチに時間も遅くなってきた。

「もうすぐ夜間徘徊禁止時間だ。店閉めるから出てけよ」坊や」
掠れたBGMのなかに混じる様にマスターの声がした。
金をテーブルに置き、釣りは良いと言い置く。空呂は曇り硝子の
ハマった喫茶店の扉を押し開けて外に出た。
冷たい外気が頬を打つ。温まった身体から急速に熱が奪われてい
くのがわかった。

家路を急ぐ人に混じり、空呂は街の奥の路地に入り込んだ。

ゴーン　ゴーン
ガラーン　ガラーン

街の教会の鐘が一斉に鳴った。気が付けば周りには人っ子一人い
なかった。今、空呂は薄暗い小路を独りで歩いている。

急に不安になる。夜間徘徊禁止時間になるといつもの教会に入る
事も出来ない。後戻りは出来ないのだ。

闇と冷気が道の奥から忍び寄って来る気がした。気が付けば走り
出していた、鐘の音に追われるように夢中で駆けた。

道を間違えず目的地に到着出来た時、息を切らせながら空呂はホッ
と溜め息をついた。

そこはただの細くて暗い路地で、片脇にはゴミの山が在る。青年
の指示通り、その山の中に身を隠した。

彼はこのままそれらしき人が現われるのを待てと言っていた。い
つになれば現われるのかは判らない。

半時間もしないうちに体が寒さに凍り付き、痛くなった。それを
歯を食いしばって我慢する。最初はゴミの臭いが鼻についたが、
いまでは嗅覚さえ麻痺してしまっている。

そのままそこに身を潜め続けてどれ位経ったのだろうか？　もしかし
たら途中で寝てしまっていたのかもしれない。

そして、ぼんやりとする意識の中で人の気配を感じた。

ハツとして目を見開く。ゴミの山越しに二人の男が向かい合うのが見えた。

一人は黒いロングコートを着込み、もう一人は濃い灰色の上着をみすばらしく羽織っている。背は同じ位だか格好は対照的に見える。

「武器の確保は？」

「心配するな」

「ラウさんはなんて言ってる？」

「方針も予定も変わらねえよ」

男達が低い声でボソボソと会話を始める。何としても彼等と話をせねばならない。しかし、相手は空呂を知らないのだ。慎重な行動が必要、今は様子を伺うべきだ。

そう思った瞬間に気が張ったのか、体を微妙に動かしたらしい。

目の前のゴミの袋ががさつと地面に落ちた。

やばい！

そう思ったのも束の間、

「そこに誰か居るのかッ！」

小路に押し殺した様に男の怒号が飛んだ。

空呂は一気に身体から血の気が引くのが判った。逃げたり弁明する間も無く、空呂の前に二人の男が立ち塞がった。

「待つ」

声が出終わる前に腹に鈍い一撃が入る。

「誰から聞いた！ 何処の人間だッ！」男が上から喚く。

ふらりと体が傾ぎ、肩から後ろの壁にぶつかる。そのまま壁にすがるように体勢を保ち男達に向き直る。

それを灰色の上着の方が突き飛ばし、空呂は地面に手を着いたまま倒れた。

「野郎があッ！ 何処まで聞いた！」

怒声と共に飛んできた拳を石畳の上で身を翻して避けた。 ” 作戦

” が裏目に出たようだ。 空呂は男に勘違いされていて手加減の一

つもしてくれそうに無い。

空呂は腹の鈍痛に顔をしかめながら、ニット帽を頭からむしり取る。

纏めあげた肩までの髪が外気に晒されて月光にひかった。

私は味方です、と叫ぼうとしたその時、後ろからもう一人にはがいじめにされて口と鼻を覆う様に湿った布を押し当てられた。

「なっ

！」

声を上げる間も無く意識が遠のく。

これは……クロロホルム……。

体が重力に抗い切れずに崩れ落ちた。目の前に闇が迫る。

意外な事に気を失う前に思い出したのは両親や姉の事でなく、海の事だった。彼に言われた様に無事に帰れそうに無いな、……そう思った。

「こいつ、女じゃないのか?！」

上から降って来たその言葉を最後に空呂の思考は完全に途切れた。

第二十話 道無き歩み

暗い暗い闇の底に空呂の思考は浮遊していた。 自分が何処にいるかも判らない。

最後に見たものは冷たい石畳と薄暗く瞬く街灯の滲んだ光だけ。そこから先の記憶は闇に閉ざされてしまつて覚えていない。

今自分は何処に居るのだろうか？ どうなつてしまふのだろうか？
ゾクゾクと悪寒が背をはしる感覚がした。

いや、悪寒だけでは無い。 冷たい感触が背中にある。 冷えきつた壁にもたれかかっている様だ。
朧気だった思考が段々クリアになつて行く。 石を詰められたように身体が重く、微かに痺れていた。

ゆっくりと目を開けるとそこは見知らぬ部屋だった。 基地の会議室よりも手狭で、さらに無機質な部屋だった。
完全に生活空間である必要を排除したつくりになっている。

「目、覚めたのね」
扉の無い部屋の入口にいつの間にか人がいた。
若いとは言えない女、だが目鼻立ちはずっきりと整つて比較的長身に見える。

「あなた誰？」と巧く開かない口で問うと女は薄い笑いを浮かべた。
「知つてるんじゃないの？」

微かに威嚇的な返事は空呂を見透かそうとするように鋭く、冷たい。
「あなたは誰なの？」

だが、その声に怯んだわけでは無い。空呂は毅然とした態度で同じ言葉を繰り返す。睨み合ったまま二人はジッと動かない。

女は静かに溜め息を吐くと組んでいた両手を解いて空呂の方へと歩み寄った。そして目の前で立ち止まり空呂を真上から睨み付ける。「こんな事、したく無いわよ。恨むならラウルを恨んでね」物騒な言葉と共に女は素早くナイフを腰から抜刀する。薄暗い光を受けてナイフが鈍く光る。

ナイフがゆっくりと空呂の首筋に近付く。ヒヤリとした空気に鳥肌が立つのを感じた。

「私はシイナ。これからあなたに幾つか質問するから答えなさい。

言わなければ痛い目見るからね」

シイナと名乗った彼女は妖艶な笑みを浮かべてそう言うのと微かにナイフを空呂の肌にあてがった。

鈍い痛みが首筋にチリチリと感じられる。

「先ず、名前を訊こうかしら？」口紅が薄く引かれた唇を少し歪ませてシイナは笑う。

「……………空呂、空呂よ」

「身の上は？ 我々を探った理由は？」

空呂が二度目を言い終わる前に詰問する。キツく結ばれた唇はまるで強がるようにさえ見えた。

この人は本当は恐れている。直感でそう思った、少なくとも人を脅した経験は殆ど無い。思った瞬間に叫んでいた。

「私は市民側の人間よ！ それも学生！ 軍に対抗するなら最低限市民の味方の位置付けがあるんじゃないのぉ？！」

低い体位からながら精一杯の嫌味と威圧感を演出してみる。

相手は少なからず怯む。畳み掛けるように更に言葉をまくし立てた。「私はここにある情報を求めて来た！」

目の前の少女の叫びにシイナは口を歪めて

「じゃあ、これはどういう事？」と空呂の足元に何かを投げ落とした。

ガシャンと鈍い音を立て重たい金属は薄暗い光の中で彫り込まれた紋章を儚く浮かび上がらせた。見覚えのあるそれに

「あ」と、思わず声が出る。

「これは、あんたが携帯していた銃よ？ それも曰くの紋章付き……、それは国王軍所有の証」

「私は国王軍の敵よ！ それは兵士から奪った備品で……」

「じゃあ、あんたは彼ら側なの？」

空呂が大声で言い終わらないうちにシイナはそれを遮り、また別の物を空呂の足元に投げ落とした。

それにも見覚えがあった。上等な皮でしつらえた鞘、細くて鋭い刀身、鐔にはこれ又鮮やかな紋章が刻み込まれている。しかし、先程の紋章とは違う。

「時雨谷一族、その証。つまり我々の長を司る証」シイナはジッと空呂の碧い瞳を見つめた。あなたは、どちらの味方なの？ と。

「私……、私は敵を見極める為にここにきた」

ゆつくりと空呂は言葉をつむぎだす。

「私の敵は、私の大切な物を冒す全て。それが軍だろうと、国王だろうと、議会だろうと私は必死で食らい付く」静かなやり場の無い怒りと想いを込めて、シイナに語りかける。

「力を貸して、私の敵はあなた達の敵とは違うかもしれない。でも、理不尽に奪われた命の価値を私は世界に問い直したいの。この地で流れた血の訳を知りたいの、私の家族の死の理由を……」

両親の死はこの事件に絡んでいる。少なくとも軍が空呂の村の跡に出入りしているのは確実だ。

「あなたの家族が殺された？」小さな声でシイナが問い掛けてきた。

「ええ、山あいの小村で襲撃があったのは知ってる？ 私はその村の娘よ」空呂は先程迄の強い語気を抑えた。シイナはこちらの素

性に興味を持った様だ。

「あの事件は星陽では大々的に知られているわ」

「そうね。単なる賊の襲撃かもしれないのに随分と大々的に報道されているわね。当の星陽がこんな時に」

「……………」

「……………」

「……………なにが言いたい？」

「情報操作の可能性よ」

「そんな操作しても意味があるの？　あなたが言う様にただの小村なのに？」

シイナは怪訝そうに顔をしかめて見せる。空呂は容赦無く話を進める。

「私だつて判らない。でも、村の跡に軍人らしき人間が派遣されているそうよ。あなた達は既にその動向を掴んでた？」

「……………いいえ。あなたはどうかやって……………」

美しい顔をしかめる彼女に空呂は肩をすくめて見せた。

「協力してよ」

「……………不躰ね」

「何と言われても真実を探し求めるわ。その為なら……………」

「何でもする？」

さつとシイナが切り返す。彼女は真直ぐに空呂を見つめていた。

少し勝ち気で洗練された表情、人をその気にさせる様な妙な魅力をたたえている。誰かに似ている色素の薄い不敵な瞳。

それは彼女が亡くした多くの物に重なり、空呂の背をそつと推した。精一杯、大人な顔をして気張って答える。

「当然、全てを賭けるわよ」

進むと決めたからには、

まだ進む事が出来る限りは、
止まる事を自分に許しはしない。

シイナは困った様に笑って

「協力しましょう。私達のリーダーに会わせるわ」と言った。

シイナは懷から小さなナイフを取り出して空呂の足首に巻き付いた
縄を切っていく。

「足だけよ。それ意外は私の独断じゃあどうしようもないから」

「足だけで充分です」

痺れた足を動かして身体をほぐす。　シイナに抱き起こされながら
壁にもたれかかる。

「へいき？　体調は？」

「問題無いと思います。　少しお腹が減ってますけど」
空呂の戯れにシイナはくすりと笑って見せた。

「食事は後、取り敢えずリーダーに会って。　そこで正式にあなた
の処遇が決まるわ」

二人は連立って小部屋を後にした。

廊下はますます薄暗く、即席で張った壁板で此所が基地とは違い臨
時の建物だとわかる。

あちらこちらに扉の無い独房の様な部屋が配されている。　中には
何人かの男女が居たり居なかったりする。

「シイナ姐さん、その女って例の男装の娘ですか？」

そこそこ若い男が通り過ぎた小部屋から顔を突出して後ろから呼び
掛けてきた。

「うん、かなり肝っ玉のでかい娘よ。　これからリーダーに会わせ

るの」

ヒューと口笛を鳴して

「姐さんが認めたって事すか？」と目を丸くする。

「認めたというか、言いくるめられたかな」

男は追い付いて来て空呂の左に並ぶ。

「ふーん。で、何処の手の者？ やっぱり軍？ それとも長様に忠誠を誓う人？」

「それをこれから見極めるのよ。この娘はもしかしたら……」
そう言いかけてシイナは少し詰まる。

「もしかしたら？」男がシイナを促した。

「いや、何でもないわ」答えたシイナが歩みを止めた。目の前にはこの空間には似合わない過ぎる重厚な扉があつた。

「着いたわ。空呂、入るわよ」シイナがゆつくりと二回ノックする。
返事はない。しかし、彼女はやや乱暴に扉を開け放った。

重厚なのは扉だけだつたらしい。中は乱雑として居て壁はトタンがむき出しだつた。

部屋の中央には大きな円卓が据えられ、紛い物の様に華奢な椅子と擦り切れたソファがそれを囲む様に申し訳無さそうに鎮座している。他の部屋よりも明るい照明は些か豪華で、明らかに盗品臭い。その上勿論の事ながら部屋の雰囲気は合っていない。

辺りを見回す空呂を若い男に押し付けるとシイナはカーテンを張つた一画に慥然と歩み寄り、その仕切りをシャツと引き開けた。

「ラウにいさん！ 起きて！」シイナの声に答える低い男の声が続く。

「痛！ シイナッ！」

「スパイ容疑の娘を連れてきたから起きて！」

「止めるッ！ 今起きるから」

暫くガサゴソと音が続き、ようやっと声の主が現れた時には既に空

呂の緊張は完全に解けていた。

「お、あんたか男装の女スパイってのは」

疲れ切った顔と汚らしいなりをした男は出て来るなり空呂を一見して少し驚いた顔をする。

「若いな。幾つだ？」

空呂が答える間も無くまくし立てる。

「名前、出身、目的、俺たちと接触した理由も聞かせて貰おうか？」

まあ、座りなよ。シイナ、縄解いてやれよ」

一言も言わないうちに促されるがまさにソファに座る。指示通り縄が解かれた。

目の前にリーダーが着席する。

がつしりした体躯と豪快な態度、それでいて品もある様に思える。

きっと、きちんとした格好をすればかなりいい男に為るだろう。

まだ三十代前半、いや二十代にも見える。

何故こんな男が市民軍を率いているのだろうか？

「取り敢えず。俺の名前はラウだ。以後お見知り置きを」ラウと名乗ったリーダーはそう言うとき空呂に向かって手を差し出し、にこやかに握手を求めた。

戸惑いながらも空呂はゆつくりと手を差し出す。握り締めたラウの手の堅さと大きさに思わず驚く。

その時、背後に控えたシイナと青年が息を飲んだ気がした。気が付いた時には時既に遅し。手を引かれて頭を円卓に投げ出され押さえられる。その上にラウがすかさず乗りかかって空呂の動きを封じた。

「にいさん!!」

「ラウさんッ!!」

他の二人の悲鳴が上がる。

頬が冷たい机の表面に強張る。 心臓がごとんと激しく脈を打つ。

「大した事ねえなあ。嬢ちゃん」

耳元で冷静で微かな笑いを含んだ声がした。

その声に次第に脈が自然な状態に戻っていく。しかし同時に悔しさと自分への怒りがわきあがる。

こんな状態で自分に何が出来るのだろうか？ 村を襲った奴等と、ましてや軍などと渡り合える筈が無い。

「くそッッ」

空呂の毒づきにラウが封じた動きを緩める。

「ふざけるなあッッ」

すかさず叫んで円卓から飛び起きる。そのままその卓上に飛び乗ってラウに蹴りを入れる。

入ったはずだ、脚に重い手応えが在った。しかし、同時にこれが幼稚な八つ当たりだと気付く。

自分に対して向ける焦燥感や怒りが外に、 ラウに向けられている。

まるで、

自分は非力でないと証明したくて魂が理性を暴走させるように。

一人でも闘うと決めたのに、これでは……

気が付くとラウに両手首を握られ、完全に動きを封じ込まれていた。目の前の男は顔を痛みに引きつらせて空呂を覗き込んでいる。

頭が割れそうに痛い。 スキスキと鈍痛が響く。

「気は済んだな？ 頭突きまで食らわせてくれたんだ、もう勘弁し

てくれ」

ラウは参ったといった具合で力無く笑って見せた。

両手を取られて、それでも無意識に頭突きしたらしい。なるほど、

頭が割れそうな訳だ。

身体から一気に力が抜ける。

なんだ、自分のこのザマは？ 全く洒落にならない。

一人で闘うなんて不可能だ。 こんなのは口先だけの 戯言だ。

熱い涙が目尻から頬を伝う。 私の存在は小さい、余りにも。

「私は弱い」

いつの間にか目の前に手が差し出されていた。 堅そうで大きな手。

「悪かった、あんたを試してたんだ。 あんたに敵の手垢は付いて無い、訓練をした人間はあんながむしやらない戦い方はしないよ。

ましてや頭突きなんて」

ラウの声が降って来る。 穏やかな声色だ。

空呂はゆっくりと面を上げた。 ラウはゆっくりしゃがみ込むと空呂と目線を合わせる。 同じ高さになって初めて、空呂は彼の瞳の色を知った。

「君は強くなる。 君がそれを望むなら」

強い光を宿した浅葱色^{あやぎ}。 透き通った瞳が力強く少女に笑い掛ける。

「俺達は君の力になれるかもしれない。 君が望めば俺は君を仲間
に引き入れても良い。 根性のある人間は強くなる。 俺の持論だ」

「……………」

「君が決めたら良い」

ラウはそう言うのと三度、空呂に手を差し出す。

空呂は少し躊躇してから静かにその手を握り返した。

温かく、強い人の手。そしてその目。

それを、

信じて見ようと思った。

「交渉成立」とラウは笑った。釣られて空呂も微かに笑う。

そして思う、自分が最後に笑ったのはいつだったかと。

しかし、そんな空呂の思慮を余所に突然ラウがらしくも無い素頓狂な声を上げる。

「君の部屋を手配しないとな。　　というか！　俺はまだ君の名前を聞いてないぞ！」

一拍遅れて発言内容を理解した空呂はシイナ達とクスクスと笑いながら答えた。

「空呂と言います。　以後お見知り置きを！」

目の前にどんなに高い壁が在ろうと、乗り越える、そう決めた。だから歩み続けるし、続けられる。

少し廻り道をするのも

いつかそれを乗り越える為だと、
そう信じてまた歩き始める。
未だ道はみえないけれども………

第二十一話 闘う時、信じる時

「空呂そろッ！ さっさと立てッ！」

無様に投げ飛ばされた空呂の上を激しい怒号がとぶ。

汗にぬれてぴたりと頬に張り付いた髪を払い除けながら何とか立ち上がる。ふらつく足元を必死で立て直し、相手に向かう。

護身術の訓練だ。

治安が悪化した街で情報を集める為には最低限身を守る術を身に着けねばならない。ラウは何かと逸はやる空呂にそう諭した。

空呂が組織の中に招き入れられてから早二週間の月日が流れようとしていた。その間に時雨谷の郡都である惺陽せいひの治安は益々悪化の一途を辿り、ラウの言うとうり護身術は既に街では必須の技術となつてしまっている。

「空呂、今日はここまでにしよう」十分後、空呂の相手をしていたヤンが言った。

またしても投げられて床に這いつくばっていた空呂もゆっくりと立ち上がる。練習着にした綿のパンツの膝を払い、壁に歩み寄るともたれかかる様に崩れ落ちた。

「疲れた。もう駄目」

へたりこむ空呂を待ち構えていたかの様にシイナがカップに入ったお茶を渡しにやって来た。

「大変そうねー。でも、筋は良いわよあんた」シイナがカップの縁から目線だけを上げてこちらに微笑む。

「有り難う、シイナ姐ねえさん」

疲れ切った顔を必死に歪ませて笑いながら礼を述べる。

「この生活にはもう大分と慣れたね」

「まあ、皆さん親切にしてくださいますし」ヤンの言葉に答えながら空呂はお茶を口を含む。お茶が微かに染みるのは戦闘中に切ったせいだろう。

組織の人々は意外にもスパイ容疑の掛かっていた空呂をすんなり受け入れてくれた、それもこれもラウの人望の御掛けだ。特にシイナとヤンは空呂を気に入ってくれたらしい。

空呂たちが訓練に明け暮れるこの基地は地下に存在する。

地下水道に絡み付く様に存在する古道の先にある無数の遺跡が彼等の活動場所だ。

家が大破したり、家族や親類が死んで身寄りの無い者がここに身を寄せている。

他にも、協力者の家の地下室などで集団生活を営む者も多い。

彼等のリーダーで労働者の旗頭の様な存在のラウル、彼の義理の妹であるシイナ、その他諸々の地域の有力者が一枚噛んだ即席市民軍関係者は200人以上にもなるといふ組織はネットワーク化されており、この基地もあくまで拠点の一つに過ぎないという．．．

「さっきラウ義兄^{にい}さんから連絡が在ったわ」

シイナが急に口調を変えた。

お茶は啜りながらの楽しい会話に似合わない真剣な声色に思わず空呂は眉をひそめる。

「ラウさん？ 何か在ったんですか？」

気になったらしく、ヤンまで会話に入って来る。

「それがね、此所^{ここ}だけの話なんだけど。どうも他の地区にある義勇軍なんかで中央図書館を襲撃する計画が持ち上がったってらしいわ」
形の調った美しいシイナの眉が眉間にギュツと寄る。

「しゅツ、襲撃ですか！！」

「それ、ソースは確かなのか？！」

空呂もヤンも思わず大声を上げる。周りにいた数人がびつくりしたようにこちらを見つめる。

「っていうか、向こう側がこちらに協力を要請して来てるのよね」
意図的に声を低くしながらシイナは言った。

「ラウさんはどうする積もりなんです？」

「あの人は見掛けによらず穩健着実な人だから進んでは荷担しないだろう？ 今は様子見が肝心だって本人も言ってたしな」ヤンが伺うようにシイナに視線をやる。

「まあね。でも、東地区や被害の大きかった北地区の市民たちは乗り気だし、この分だと押し切られる可能性もあるわ。それに……」

言い淀んだシイナの台詞をヤンが引き受けた。

「若しルカさんを助けられる可能性が在ればラウさん個人としては動きたいかもなあ」

目線を伏せ、微かにシイナの様子を伺いながら呟く。

「ルカさんって、確か……」

「……私の実の姉でラウ義兄^{にい}さんの妻よ」

「ああ……」

思い出した。そういえば誰かが噂していた。

シイナの姉でラウルの妻であるル力は王立軍隊襲撃の際に怪我を負い、シイナとはぐれてしまってから消息が知れないという。

「ヤン、残念だけどそれは無いわ。私は姉さんが軍に捕まってるんじゃないかって思ってるけど、でも、義兄^{にい}さんはそうは思っていないみたいだから」

少し間を置いてためらいがちにシイナが言った。

「どういう意味ですか？　じゃあラウさんはル力さんの居場所、何処だと思ってるんです？」

「判らない。でも．．．あの様子だと．．．

姉さんが死んだと思ってるのかもしれないわ」

シイナは下唇を噛み締めながらゆっくりと頭を振った。

シイナの口から飛び出た衝撃的な言葉に思わずヤンが叫ぶように聞き返す。

「証拠は無いんでしょう?！」

「証拠はないわ．．．．．無いけど」

言葉を繋ぐこと無く、彼女は深く深呼吸をして目を閉じた。
どれほどの間そうしていたろうか？

出し抜けに彼女は顔を伏せ、小さな声で言った。

「若し、そうだったらどうしよう。

姉さんのこと、義兄^{にい}さんのこと、他にも一杯．．．．．

もうどうして良いのか。この感情を何処にやれば良いのか」

俯く彼女の身体は込み上げる何かを堪^{こら}える様小刻みに震えている。

この二週間シイナを見てきて思った。彼女は有能でラウルの善き右腕となっている、でもその本質はもつとずっと純粹なところにある。だから空呂にはシイナの気持ちが判る気がした。

「シイナ姐さん、私も同じです。失ってしまったことが辛くて、悲しくて。」

自分が無力なのが悔しくて。

前に進みたくて。でも、どう進めば良いかも判らなくて」

「だから．．．．．泣きました。泣いて泣いて、泣く事の意味のなさに納得するまで泣いたんです」

言葉を紡ぎながら空呂は自分の愛する家族、そして泣く空呂を氣遣ってくれた唯一無二の友を思いだす。

「辛いなら、泣いて良いんですよ」

シイナだけじゃなく、自分自身にも言い聞かせるようにはつきりと言う。

空呂の言葉にヤンもうなずく。

「私．．．．．」

その後のシイナの言葉は続かなかった。彼女は手で顔を覆い、天を仰いだ。

「ねえさ．．．．．ん」微かな嗚咽に混って懇願する様に名前を呼ぶ。一筋の涙が彼女の頬を伝った。

周りにいた人々は既に引き払っていて、閑散とした地下空間にシイナの噉り泣きに近い声だけが木霊する。

壁に掛けられたランプの火が何処からか吹く風に揺らめく。

所在の無い悲しみと苦悩を帯びた慟哭が暗闇に響いた。

そんな事があってから三日。

空呂はあれからずっと、例の襲撃計画の提案についてを頭の中で反

蜀し続けていた。

シイナ曰く、未だ各勢力間の同意は愚か、いがみ合いと決裂が続く状態だという。惺陽の治安も、そこを暗躍する組織の行くべき路も全ては未だ混沌の中にあつた。

だからこそ空呂は一刻も早い効果ある一手が必要だと感じた。動かねばならない。

現状を打破せねばなるまいと。

そして、自分だけがその最良の方法を知っているのに違いなかった。

その夕方、空呂は遂に決意を固めた。ラウを信じ、そして自らの判断をも信じる事に決めた。

薄汚い毛布を新しいものにかえ、大急ぎで掃除を済せる。

ラウに個人面会を申し入れたのは昨日の午後の事だ。

空呂は部屋の仲間達に断りを入れてラウに会うべく部屋をでる。隠し扉を押し開けると更に扉で仕切られていて、その奥が地下水路に通じている。

扉を開けて通路にでるとムワツとした下水の臭気が鼻をつく。どうも下水処理が先の混乱で滞っているらしい。

ライターに灯をともすと空呂の目の前に広大な地下迷路が姿を現す。軍の襲撃当日に実と地下に避難した記憶は新しい。

あの時と違っているのは自分で目的地と行き方が判っている点だ。

十分程歩いて辿り着いた三叉路の端っこに設けられた小さな鉄製の

門扉を開く。

更に奥まった所にある格子戸を預かつてきた鍵で解錠した。

奥へ進むと当直の人間に行き合い、事情を説明してようやくとラウとの面会が叶う。

前に訪れた事がある組織の本部、その最奥。

前にも一度潜った事のある立派な、だが壁に不釣り合いな木戸が空呂の前に立ちふさがる。

フツと一呼吸し気持ちを落ち着かせてから空呂は静かに扉を叩いた。

中央のソファに座ったラウは前よりもかなり疲れ切った様子で空呂を出迎えた。

「良く来たね、空呂．．．だったかな？」

顎に生えた無精髭を擦りながら彼はその瞳をこちらにむけた。疲労の色は見えるがその眼光は鋭い。

「御久し振りで。仰せのとおりに取り敢えず護身術の基礎を叩きこんで貰いました。チョットは使えるようになりましたよ、私」
挨拶と近況をサラリと伝える。

「．．．．そうか。だが、この不穏な状況じゃあ君を地上に出す訳にはいかないな。君は知らないだろうけど、色々ややこしい事になっていてね。」

正直、あちこちに手が回らないんだよ」

ラウは申し訳なさそうに肩をすくめた。

「だから、君が家族の情報を探したい気持ちは判るけど、少し待つて貰えないかな？」

空呂はその言葉には一切答えないで静かに頭を振った。

「私、今はもう冷静です。頭突きもしないし、道理も判ってる積も

りです。だから、本当の事をおっしゃって下さい」

静かで微かに威圧を含んだ口調で言葉を紡ぐ。此所は大切な交渉の場となる。

言葉をしくじってはならない。

「私を信用しきれてないから私を自由にして下さらないんでしょう？」

「……………」

ラウが言葉を発しないのを良い事に空呂はそのまま続けて話す。

「話は変わりますが、中央図書館襲撃の案が密かに持ち上がっているそうですね」

ラウが目を見開き、空呂を凝視した。

「シイナ姐ねえさんに聞きました」

そう答えて空呂は微かに笑みさえ浮かべて見せる。

「姐ねえさんはお姉さんのルカさんの安否を気遣う立場上、私に親近感を覚えて下さったようで私、大変良くして頂いてるんです」

空呂の言葉にラウは思わず苦虫を噛み潰したように顔をしかめた。

「シイナの奴、あれ程口止めたのに……………」と小さく呟いている。

「大変ですね。北も南も西も東も、何処もかしこも意見の不一致だらけだなんて」

「……………」北と東は強行派、それもかたやタカ派、かたや利益主義者ときてる。

南は他人事だし、そもその括り自体が大雑把過ぎてる。現実もつとややこしいよ」

ラウは嘆息しながら頭をガシガシ掻いて白状した。

「時雨谷を纏められる人が居れば万事解決でしょうにね」

「だが、そんな好人物はいないさ」

「……………」いるって言ったら、どうします？」

「……………」

空呂の大胆な発言にラウの眉が寄る。

「どついう事だ？」

にわかに語気を強めて訊くラウに空呂は満足した。取り敢えず掴みは悪くない。

「そのままの意味です。今の時雨谷を纏め得る唯一の人を知ってるって言ってるんですよ」

空呂は精一杯艶冶に笑って見せる。

「長様は亡くなったんだぞ！ 誰が残ってるってんだ！」

ラウが凄いい剣幕で怒鳴る。

「長は全てを見越して亡くなる前に手を打ってらしたんですよ」

「それは．．．どついう？」

「知られざる後継者．．．．」

空呂の言葉にラウの浅葱色の瞳が見開かれる。

「それも、とても有能な人です」

驚きの余りに何も言えないラウを尻目に言葉を続ける。

「さっきの話ですけどね。ラウさんの予想は当たってます。確かに私には貴方に隠し立てしていた事があります。

今まで黙ってましたが、私はある組織を抜けて此所に来たんです。より直に家族に纏^{まつ}わる情報を手に入れる為にね。今も私の目的は変わりませんよ、家族に起った事の真相が知りたいんです。

でも、身内を一番に考えたくてもそれが出来ないラウさんやシイナさんを見てたら、私も何かしなきゃって思っただですよ」

空呂の緊張で手のひらは汗ばみ、口の中はカラカラに乾ききっている。

「前の組織にいた時の情報です。信憑性を保証できるものも今の私には示せません。それでも信じてくれるならお話します。

但し、その人の力が必要だというのならラウさんには一芝居打って貰わなきゃなりません」

「芝居？」

ラウは訝しげに空呂を見つめる。

「そうです、芝居。でもその話は御返事をいただいてからです」

空呂はまっすぐにラウの瞳を見詰めた。

「どうなさいますか？」

まるで挑発するかのように微笑む。

大の大人としての責任も地位も持っているラウとただの少女、二人は微動だにせずその視線をぶつけあった。

互いの真意を測るように、器量を見定めるように。

ラウの浅葱色の目には灰髪少女が映り、空呂のライラック色の目には意志の強そうな青年が映った。

「勝算はあつて来たのかい」

ラウがポツリと目の前の少女に訊いた。

「勝算？」慎重に、相手の出方を窺うように、少女は問い返す。

「ずいぶん堂々とした物の言い様じゃないか。」

興味深そうにラウはじつと彼女を見つめた。一種の驚きと新しい何かものすごいものを見つけてしまった様な不思議な興奮さえもが体を駆ける。

ラウは正直、こんな年浅い娘に感情や思考を揺さぶられるとは思ひもしなかった。頭のいい子だとは判っていたけれど、所詮それだけだと見くびっていた。

ここ数日で話をしたどんな大人よりも人を引き付けるそんな話ぶりと視線、どこか挑戦的で悪くいってしまえば立場をわきまえない大柄な態度。あらゆるものが異質でその度胸の強さを体現する様な気さえする。

「在ったと言えば嘘になりますね。勝算というよりは信念に近いかもしれません。勝算を語れるほど私が持てる物は多くないですから」
そう言いながら見せた自嘲気味な笑みはそれまでとは違って真実に

彼女のものだ。背伸びも感情の秘匿もしない等身大の少女、身の置き場や自分を取り巻く環境から解放された本物の空呂という少女がそこにはいた。

「君は……、闘っているんだな」

脈絡なく相手の口から飛び出た言葉に空呂は思わず訝しげな視線を向けた。

「自分にできることは何なのか、何をすべきなのか。それを君は真剣に見つめている。まだ完全に大人とは言えない君のような者さえ自らの信念を押し通そうとしている」

彼は静かに目を閉じ、云った。

「そうだ、私たちは闘っているんだ。今も」

何かを噛みしめる様に彼は大きく首肯した。

「ラウさん、私と一緒に立つてください。私には、私たちには、あなたの助けが必要なんです」

空呂は腹に力を込めていった。

「私一人では無理なんです。一緒に闘ってください」

彼自身の言葉を借りて、もう一度語りかけるように。

「今立たねばいつ立つのですか？ 此処で起こった全てのことを白日のもとに示すために立つんです！！ 今は亡き長が、私たちの大切な人々が残した物を叫びに応えるために、勝利の勝ち鬨からどきに変えるために！！」

ちから強く言葉を続ける。能あたう限りの思いの丈を込めて語る。

本能でここが勝負どころだと判っていた。

「道を私に拓かせてください。やります、命をかけて！」

空呂は高らかに声を張り上げ、真正面からラウを見た。二百人以上の人物の信頼を得、彼らを束ねる理性のリーダー、その力に満ちた瞳を。

「いや、それでは駄目だ」

だが、ラウの返答は空呂の期待を裏切るものだった。

「なっ！！ どうしてですか？」

思わず大きな声を出してラウに叫び返す。

「どうして君が命をかけるなんて馬鹿なことしなけりやならないんだい？」

「ラウさん？！ わたしはっ！！」

反論しようと再び声を上げた少女を鋭い眼光で黙らせた後、彼は静かに云った。

「君みたいな未来も夢もまだまだ抱けるような歳の子がなんでこんなことに命をかけるなんて言うんだい？ 賭けるならそれは私のような大人が賭けるべきじゃないのかな」

「それって……」

「君には負けるよ。いいだろう話を聞いてやる。イケると思ったら芝居でもなんでも打ってやろうじゃないか」

「ラウさん」

「君は私を動かした。ある意味策略的に、そしてある意味では、感情的にね」

「……」

「子供ばかりにいい格好はさせてられないからね」

ラウは少しだけ微笑むと言葉を繋ぐ。

「此処から先は私も命をかけるつもりで進むさ」

空呂は感謝の言葉を述べようとして、言葉が見つからなかった。ただ熱い想いが体を駆けるのを感じていた。

「空呂、私は今この時より、君に全面的に信を置こう。だからどうか、君も私に信を置いてくれないかい」

ラウの申し出に対する空呂の返答はもちろん決まっていた。

こうして空国の歩みは急速に動乱の中心へと向かっていくことになるのである。

間章 燃える焔は

「なるほどな。長様の秘蔵の後継者、星良様が……」

全ての計画を話終えた空呂に対してラウは静かに言った。
そして、一言呟く。

「面白い」と。

空呂は少し緊張を解いた。その声色は真剣そのもので、そこに否定や嘲笑は一片も感じられ無い。

しばし腕を組み、彼は考えを静かに巡らせる。額に皺を寄せながら先の状況を推し量っているのだろう。

彼が握っているのは自分だけの命運ではない。彼に従う多くの人々の人生をも左右するかも知れないのだ。
慎重にならないはずが無い。

結局、ラウはたっぷり10分は悩んだあと静かに口を開いた。

「良いだろう。空呂、君の力を貸してくれ。

俺も全力を尽くす。そして、共に勝とう！」

浅葱色あやねいろの瞳に映るのは果てしない戯言ごわげんをも現実にしよとする知略と根性と希望。痩せた頬に浮かぶのは困難に向かう覚悟と決意。

今、この小さな会議室で向かい合うこの男はけしてただの青年なんて言葉では言い表せない。

自分の直感は正しかった。

何か確信に近いものが身体の奥から沸き上がるのを空呂は確かに感じた。今は未だ荒削りで形にならない計画も彼が力を貸してくれれば不可能ではない。

自信が確信に変わる。

「はい！」

空呂は大きく首肯し、ラウに応えた。

「命を掛けると言ったな、空呂」

ラウの言葉に空呂は再度しっかりとうなずいた。

「ならば、次に俺が命じる内容も判っているはずだな」

「はい」

「古巣に戻るのには容易い事じゃ無い。スパイ容疑は勿論だし、出方に依れば長く監禁される事にもなる」

微かにラウの眼に懸念が浮かんだ。だが、その不安は空呂の方から一刀両断した。

「明るいライラックの眼をラウに向けて微かに笑いながら空呂は言った。」

「覚悟の上です。私は貴方に賭けた、だから今度はラウさんが私に賭ける番です。ちがいますか？」

カチャンと音がして部屋の扉が閉まり少女が部屋を出る。

分厚い木戸は元建具師がつけただけあってその質量の割に開閉が静かだ。

独りになった部屋の中は少し寒いぐらいだったがラウは上着を羽織る事も無く静かにデスクの前に座る。そして瞑目した。

「勝ち気な娘だ」

何となく呟いて口に笑みを浮かべる。

董^{すみれ}より薄い紫の瞳、豊かな灰髪。心を揺さぶる言葉と話術。

思わず彼女に賭けたくなった。何かに惹かれてしまった。巧く言葉には出来ないけれども。

言うなれば、彼女の胸には尽きせぬ焰^{ほむい}が在った。恐らくそれは怒りと悲しみ、“生き残った者の使命”を糧^{かて}として燃えているのだろう。痛ましい。だが、それが強さとなる。

そしてそれはラウ自身にも言える事だった。

「ルカ、見ててくれ」

静かな部屋にラウの静かな宣言が響いた。

間章 燃える焔は（後書き）

連載再開の方向でやっています。

ここで一区切りの気持ちを込めて間章を挿入しました。

第二十二話 任務とその瞳

ぴちゃん

暗いトンネルの何処から水滴の音がした。

ぴちゃん、ぴちゃん

何百年も前に掘削されたトンネルのレンガやコンクリートだ、その隙間から水が漏るのは当然と言えば当然だろう。

下水階層を抜けて上水階に入ってからすこぶる空気が良くなった。少なくとも鼻を覆わずとも歩いて行ける。

手に持ったランプからジジジと音がして灯が大きく揺れ、壁に映る自分の影がブレる。

ラウとの秘密の会談から五：日。空呂はラウに命じられて独り地下を目的地に向かって歩いている。

「敵はそこいら中に居ると思え。仲間内でも油断はするな。全ては

俺とお前と二人だけで実行するんだ、ここがこの計画の肝だ、わかつてるな？」

何度もラウに言われたように、空呂は計画を誰にも打ち明けなかった。知っているのは未だにラウだけだ。

空呂がせめてシイナだけにでもと再三言ったが彼は頑として受け入れなかった。

「姉^{ルカ}の事でアイツの頭は一杯なはずだ。これ以上煩わせたくはない。それに、知らない方が計画も巧く運び易い」彼はそう主張した。

作戦の立案者こそ空呂のほうだが協力が得られないことにはしようがない、実行に関してはラウの主張を通すのが筋だ。空呂は複雑な思いを抱えたまま作戦の完全秘匿に同意した。

ラウはシイナの為だと言っていたが実際のところ彼は八面六臂の大活躍で義妹^{シイナ}にまで気をまわしてやる余裕がないのだろうと思う。それならばいつそ蚊帳の外にしてしまったほうが楽だという判断のようだ。

ラウの思いがわからない空呂ではない。だが、そんな孤独な戦いを展開しようとするラウを空呂は複雑な思いで彼を見ていた。

長い湿ったトンネルには十数メートルがごとに明かりがついてはいたがその光は弱く、所によれば自分の足元は愚か、鼻先すら見えないうちに暗かった。

ランプが無ければとても歩けない。

行く手にある壁面の明りが連らなって光の線となり続いている。

やがて空呂は十字路に出た。

手元の簡単なメモ書きを心もとない光で照らし、進路を左へ変える。

空呂はほんの一月前に海に地下の基地から送り出されたことをふと思い出した。

あの日、海は身勝手にも独り基地を去ろうとする空呂を止めることなく見送った。

空呂は海という人間の多くを知っているわけではない。むしろ互いに意識しあいながらも接触避け、相手に対し偏見ばかりを持っていた節がある。

同じ奨学生で優等生、男女の違いはあれど境遇は近い、だから最初には仲良くなれるとすら思っていた。だが、空呂の期待はもろくも崩れ、彼との会話の後に残ったのはいつも苦渋だった。彼ははなから空呂を見ようとしなかった。彼は空呂を拒絶した。空呂よりも優位に立とうと躍起になった。

そして自然に空呂は海を嫌った。

得意げに空呂の間違いを指摘し嫌味を言う彼、光の母親の死をなんでも無いとでも言いたげに受け流す彼、空呂を嫌う彼、

自分にも一生をかけて見つけ出すべき真実があると云った彼、空呂を基地から送り出してくれた彼……

どれれらも同じ海のはずなのにまるで別人の様だと空呂は思った。

そして、そんな彼の存在に空呂は常にこの一カ月の間励まされ続けてきたのだ。

海だけが空呂の真意を知っていてくれている。たった一人でも、彼は判ってくれているのではないか？ そんな希望がいつの間にか空呂の大切な心の支えになっていた。

だからだろうか？

海という人間について今の空呂には少しわかる気がするのだ。

経済的には同じような状況なのに、二人の境遇には大きな隔たりがあった。同じ苦学生であっても、空呂には温かい家庭と故郷があった。

貧乏でも幸せがあつた。

そして、海は何も持たなかった。

俺には両親が居ない。そう言った時の彼の表情はどんなだったろうか？

空呂にはそれが思い出せない。

逆恨み、多分言葉で表すならそういうことだ。

だが、今や彼と同じ立場になった空呂には彼を非難したりする気にはなれなかった。

空呂は真つ暗な通路をゆく。目的地まであと少しだ。今一度ランプの灯を地図に近づけて磁針と照らし合わせながら確認をとる。

「一か月ぶりか」

思わず呟きながら空呂は思う、空呂が基地に戻れば海は、そして光や実はどう思うだろうと。

基地に再びつながぎをとる、そして彼らと共に捕らわれた時雨谷の遺された後継者を救い出す。そうすれば時雨谷は一つになることができる、事態はきっと好転するのだ。

盲目的に空呂はただそうだと思った。そうだと信じた。

空呂が星良出逢ったこと、海が空呂を送り出してくれたこと、空呂がラウと協力したこと。そのすべてが偶然の為だとはどうしても思えなかった。

バラバラだった運命の糸がしゆるしゆる音をたてて結ばれていく。そしてそこには新しい可能性があるはずだ、そんな気がどうしてもするのだ。その一種の胸騒ぎの根拠が何なのかは判らないけれども。

進路を定めながら暗い悪路を往く。注意はいつも足元に向いており、だからこそ空呂は失念していた。

じゅっ。嫌なおとがして空呂のランプの灯りが大きく揺れる。

「えっ!？」

思わず大声で叫び声を上げるも虚しく、ランプの灯りは何度も激しく揺らめいて全ては暗闇に帰した。

「水滴か？」

空呂が呟くと同時にポトンと音がして暗闇に水滴が落ちた。

真っ暗な中に水が滴る音だけがやけに大きく響く。

「早く、灯入れなきゃ。あれ？ 油、切れてる？」

手探りでランプの油ざらを開けてポケットから油を取り出す。暗闇に灯る遠くの微かな常設燈を頼りにねじ込み式のアルミ缶の蓋をこじ開けた。手元を傾けて油を移す。

その時だった。

カラン

空呂の背後から小さな音がした。小さな敷石の欠片が跳ねるような音。誰も居ないハズの後ろから。

「え？」

小さな声と共に後ろを向く。だが、そこにあるのはただの通路で誰かが居る様子は無い。気のせいだ、そう決めた。

作業に戻ろうと再び手元に集中を戻す。注いだ油入れのねじ込み蓋を締め直し、皿を閉めようとランプをいじる。

その時だった。

「動くな。死にたくなければな」

後ろから何の前触れもなく声が降った。空呂の耳元へささやかれるように。

若い男の声。空呂はその声に込められた殺気背筋を凍らせる。

「武器を置け。女だからと容赦する気は無い」

いつの間にか腰に差していたナイフが抜き取られる。動きを封じるように腕を取られ目の前には鈍いナイフの光がちらつく。薄暗い中で判別するに空呂から奪ったナイフのようだ。

「いいか、そのまま立ち上がれ。そのまま両手を壁につくんだ。抵抗は許さない」

厳しい命令口調にしぶしぶ従い空呂は腰を上げる。ゆっくりとした緩慢な動きでゆるゆると相手をじらすように。

作戦の決行が決まってから五日の間、できる限りの状況に対応できるようにと体術はこれでもかというほどに仕込まれた。後ろから取り押さえられた時のケースももちろん予習済みだった。

さて、この状況が無抵抗で切り抜けられるのか、それともこちらから攻撃を仕掛けるべきか。

攻撃を仕掛けたとして無事に逃げ切れるのか。手負いになつては計画に支障が出るかもしれない。いや、しかし、最も恐れるべきはこのまま拘束されてしまうことだ。拘束されて……そのあとのことには考えたくもない。

ほんの一拍の間に空呂の頭の中にあらゆる選択肢と可能性が閃いては消えた。

判断を下せないままにゆっくりと腰を下ろしながら空呂はあることに気付いた。

血の臭いがする。後ろの男から。

それが意味するところは一つしかない！
相手は……手負いだ！！！！

気付いた瞬間には体が勝手に動いていた。相手にハンデがあるなら勝てる。

「おい、早くッ

！！！！」

そのあとの男の声は悶絶のために言葉にならなかった。

空呂は体軸ごと反転し、立ち上がり様に油断していた男の鳩尾の下に膝で一撃を入れる。瞬時に壁いっばいまで下がって相手との距離

を確保するとブーツの中の隠しナイフを手に取り鞘から抜き、鮮やかに一閃させた。だが、二回目の攻撃は態勢を立て直した男にたたらを踏んでかわされた。

相手も空呂の意表を突く反撃に一瞬息をのんだが完全に立て直すまでが驚くほどに迅速だった。手負いだとは思えないほどにその動きは洗練されている。

「実戦向きの武術だな。暗殺者にでも習ったか？」

かすかな光の中で男が静かに笑うのが見えた。そして首元にまいた布をそつと鼻の高さまで引き上げる。薄闇の中でも右腕に汚れた包帯を巻いているのが見て取れた。

「手負いだから勝てるとも思ったか？　だとしたら読み間違ったな。その場仕込みの女性に負けるほど私はやわじゃない」

考えを手に取るように読まれて空呂はギョツと唇をかみしめる。

「別に命を取ろうなんて思っていないし、あんたの貞操に興味があるんでもない。俺がほしいのはあくまで情報だ。大けがしないうちにさつさと降参するんだな」

「よくしゃべる方だこと。誰があんたみたいに得体がしれない人を信用するつてのよ！馬鹿も休み休み言いなさい！」

空呂は精一杯の強気な声色で笑んで見せる。

おそらく、勝つことは難しい。良くて逃げおおせるのが精いっぱいのはずだ。そして相手もそれは判っているに違いない。売ってはいらない喧嘩を売ったのかもしれないかった。

お互いじりじりと狭い通路の中で間合いを取る。暗すぎて相手も自分も満足に見えてはいない中で手さぐりの状況が続く。

どちらが先に口火を切るか。空呂はじつとりとした嫌な汗が背中を伝うのを感じた。

シュツ

淀んだ地下の空気が熱を孕んで動いた。空呂の耳元をナイフが掠めていく。

先に動いたのは相手だった。

すかさず空呂は相手の腕を狙ってナイフをふるう。かわされると同時に体勢を下にして足払いをかけたがそれも悠々と男はかわす。見えないなりに目の前の暗い空間にナイフを突き出せばガキンと大きな音がしてナイフとナイフがぶつかる衝撃が腕に響く。

力任せにそのナイフを押し込めば、相手も力技で来る気らしい、押し返してきた。

何も見えない暗闇に刃物の刃と刃がこすれあう不協和音がこだまする。

「あんた、意外とやるなあ」

男が声をかけてきた。かすかに声が乱れて聞こえるのは気のせいだろうか。

ぴちゃぴちゃと近くで水滴が垂れる音がする。最初はなにか判らなかったがその正体は臭いで判った。

血だ

空呂の刃は一筋たりとも相手に届いていない。おそらく腕の傷が開いたのだろう。このままでは相手はどんどん失血するに違いない。

「……………クッ」

相手もそれは判っているだろうに刃を交わらせたまま動こうとはしない。そのままじりじりと時間が流れる。

何かがおかしい、何かが。

どうしてこの男はこの不利な状況を打開することを試みないのだろうか？

「おまえ、何者だ？」

男が問いかけてくる。暗闇で彼の瞳が光った気がした。

「このナイフはお前のか？ 君は、誰だ？」

次々に問いかけが投げかけられる。空呂は訳が分からなかった。そして、ついに違和感の原因にたどり着く。

彼は自分の武器を使っていないのだ。彼の左手は使われないままになっている。

一方、空呂の方はといえばナイフを両手で握って力を込めているの

だ。

それはつまり、彼は自分の武器をおそらく使ってこないということ
で、全力で空呂に向かって来ていないということ……そして、彼が
本気を出せば空呂などひとたまりもないということ。

「君は、どこの陣営だ？ このナイフの紋章は……」

男の言葉が紋章に言及されたとき、空呂の背筋を冷たいものが駆け
上がった。

空呂のナイフの刀身に焼き打たれたのは時雨谷一族の紋。ナイフ自
体は実の^{みのり}ものだが、空呂の帰属を表すといっても過言ではない。

混沌の時雨谷では出自と派閥は何よりも秘匿するべきものだ。それ
がばれてしまう。頭が真っ白になった。

「うわわわあああああ」

訳も分からずに空呂は雄叫びを上げた。そして組み合っていた刃を
全力で押し返す。

逃げなければならない。その心が空呂のすべてを支配していた。

空呂はあらゆる情報を持っている。あらゆる人の命がかかっている。
身をひるがえして駆けた。暗闇の中を一目散に。全力で、行くあて
もなく、ただただ駆けた。

後ろから男が追ってくる。向こうの方が早い。だが、それを空呂は
複雑な地下の地形を利用して撒いていく。

頭の中にあるのは逃げることでそれ以外はない。気が付けば追
撃の音が止んでいた。

「ま、撒いた？」

息も絶え絶えになりながら空呂は声を上げ、あまりの安堵にその場
にへによへによと倒れこんだ。

訳も分からない恐怖に支配されたただ涙が止まらなかった。音が
響くトンネルで大声で泣くわけにはいかなかったがそれでもすすり
泣くように声を出して泣いた。

怒りや悲しみの涙ではなく、心からの恐怖への正常な反応としての

涙。よくよく考えてみれば、恐怖で涙したのはもう遠い昔のような気がした。

勝手も分らないところに身一つで乗り込んで、機転だけを武器にラウを味方につけたり大きな計画を立ち上げても見せた。それでも空呂の本質は結局、二十歳にも満たないような少女なのだ。今、空呂はそれを痛いほど感じていた。

どれほど泣いた後だろうか？

空呂の耳に人の話す声が聞こえた。

瞬時に身を硬くすると空呂は次のトンネルの交差点まで忍び足で歩き、小さくなつて息を殺す。

先ほどの男が仲間を連れて自分を探しに来たのだろうかと思うと空呂の心臓は今にも止まりそうだった。

向こうへ行つて欲しいと感じる思いもむなくその声はどんどんこちらへと近づいてくる。

「しかし、隊長もなかなか厳しい命令をなさるなあ」

「地下道に極秘参考人が逃げ込んだ可能性があるから探せだなんて」「本人はこんな湿つて暗いこと無縁でいられるだろうからいいけどさ、俺たちのこともちよつとは考えてくれよ」

「しょうがない、仕事だ仕事。わりきるしかねえ」

「まあ、今度の命令は確か族長会議からだろう？ あんのクソばばあの命令書よりやずっとましつてもんだろ」

「クソばばあつて、緑女王（くろじう）のことか？」

「ああ、あの息子にはめられて命令書にサインさせられたばあだよ」

「確かになあ。身内の恨み、怖いねえ」

「怖いのはさ、身内だけじゃねえ。命令書一枚で里を一つ壊滅させられるようなこの国の政治体制だよ。今じゃ首都でも南共和国連合のテコ入力で共和制を目指すつて地下組織もあるらしい」

「俺が聞いた噂じゃ、その件の地下組織に対抗するために北の王政諸国が族長会議に圧力かけてるってよ」

「まじか?!」

「やばいなあ。うちの国は二つの勢力下の中立中性国として機能してた。永遠国がどっちに傾くかで世界の勢力図が書き換わるぜ」

聞こえた会話は空呂にとっても興味深いことだった。

暴挙、そして集う百の長、変わる国際勢力図。あらゆることが糸を引きあつて混乱を引き起こしつつあった。

そして、最も気になったワード。

極秘参考人

話の内容からするに声の主は王立軍隊の兵士のもので間違いないだろう。

その中に先ほどの若い男のものは含まれてはいなかった。と、いうことは先ほどの男こそがその極秘参考人というやつではないのだろうか。

鋭い眼差しや素早い身のこなし、空呂のナイフに目を付けた洞察眼からするにおそらく只者ではないとは空呂ですら思う。

危機を脱して落ち着きを取り戻し始めた今になって空呂は彼の正体が気になり始めた。

そして、空呂が気になるもう一つの言葉。

「そついやあさ、女王の息子は都から姿を消しちゃったらしいな」

「ああ、瑠璃だったか？ 母親が自分に風見ヶ岡を任せてくれないからって腹いせに奸計でもって時雨谷に俺たちを押し入らせたんだよな」

「狂ってるよな」

「昔からちよつと変わった後継者だったらしいぜ。父親も若くに亡くして母親は女王として忙しくて、よく屋敷とか外遊場所で大人を

出し抜いた出奔してたって」

「あー、環境が子供に与える悪影響ってやつ？」

「母親が風見ヶ岡の政務任せなかったのも当たり前だったツーの」

「大体、あいつまだ成人するかしないかぐらいだろ？ 政務請け負うってダメだろ？」

「いやいや、今だっていくつかの里は親が後見についてすでに若い後継者に政務取らせてるよ。ただ、風見ヶ岡の場合は親が王座についてたから後見になる余裕がなかった訳、んで政務を任せてくれない母親に痺れを切らせてやっちゃったってわけよ」

「やっぱり狂ってるな」

下品な笑い声が地下の何もない空間に何重にも木霊する。空呂は兵士たちの言葉に思わず眉をしかめた。

闇雲に歩いてきたこの一か月。空呂は大切な友人であつた彼を完全に心から締め出してきた。

いや、実際には考える余裕さえなかったといった方がいいかもしれない。

目の前に現れる道らしきものを駆け抜けるのに必死で、後ろを振り向いている余裕などどこにもなかったのだ。

最後に瑠璃とした手紙のやり取りはあの暴動の当日から遡ること一週間前、彼から届いた返事だった。

いつどおりの美しい透かしの入った便箋に端正に並んだ文字は彼の日常を面白おかしく空呂に知らせてくれていた。

窓の外の腰掛が大風で壊れたこと。

今年もおいしいジャムができそうなこと。

できたジャムは後で別便で送ってくれること。

後継者としての学習が佳境に入って忙しいこと。

他愛もなくてそれでいて読んでいて興味をそそられる内容で……八年近く続いたいつもどおりの彼との文通。

まさか、あれが彼との最後のやり取りになるなんて空呂はその時気付いてもしなかった。

だからこそ、今の兵士たちの会話を鵜呑みになどできない。

でも、彼を信じるなんて言えない。その全てを否定できないのも確かだった。

まだ着けることのできない心の整理。

山積する彼への疑問。

流れてくる諸々の噂話。

解決できないならいつそ、と感情にいつの間にか蓋をしていた。その蓋の存在を感じるたびに心が震える。それを知っていて、なおも無視を決め込んで……

たまに思い出しては困惑する。

そう、今みたいに。

空呂が自分の思いに浸っていた瞬間はそれこそ一瞬のことだった。だから、決して空呂の反応が遅かったわけではない。

相手が恐ろしく早かったのだ。

まさしく一瞬のことだった。

空呂のいた十字路の反対側から黒い影が飛び出したのだけがかろうじて少女の目の端に映った。

影は一直線に兵士たちに突っ込む。

「グアッ！　なんだ貴様！！！」

「出たッッ！　奴だ！」

兵士の大きな悲鳴がトンネルに木霊^{こだま}し、もみ合う音と剣戟^{けんげき}の音が薄

暗い中に響く。

兵士が持っていたであろうランプの光が大きく揺れる。もみ合う音。悲鳴。

空呂には何が起こっているのか全く分からなかった。

「貴様何者だ！ うわああああああッ！」

悲鳴、雄叫び、呻き声。殴る音と人が地に崩れ落ちる重い音。

空呂の場所からは何も見えない。あるのはあらゆる音だけだった。

ガシャン！！！！

大きな金属音と共に視界が暗転する。おそらくランプが壊れたのだろう。

続けて呻き声。

「ぐはッ」

「や、やめろオ！ 死にたくない！」

人を殴る音。

そして 静かになった。

暗闇の中、空呂は逃げ出すこともできずにその場にへたり込んでいた。

悲鳴は止んで静かになった。だが、ついその角を曲がればそこにあの影の主がいるに違いない。空呂は半ば確信していた。兵士たちを襲ったのはおそらく間違はなく先ほどの包帯の若い男だ。

なぜ多勢に無勢のところを出てきてまで兵士を襲ったのか？ もし、彼が極秘参考人であるならばいったい何者なのだろう？

「悪いな。あんた達に恨みはないんだ」

トンネルに小さな眩きが響く。やはりあの若い男のものだ。

十字路がカチリというライターの微かな音と共に明るく浮かび上がる。そのあとさらに明るくなる。どうも男が消えたランプの灯を入れなおしたようだ。

「運が悪かったと思ってくれよ」

謝罪のような内容が再び聞こえる。続けて荷物を漁^{あさ}るような物音もする。

状況からするに物取りのようだ。

そこまで思考して空呂はようやく自分の置かれた立場を思い出した。ラウに任せられた任務とその遂行。こんなところでのろろしているわけにはいかない、ましてや物取りに遭^あうなんて言語道断だ。

空呂は静かに、しかし素早く体を起こすとそのまま後ずさりを始めた。今度こそしくじるわけにはいかない。

兵士たちがどんな憂き目にあったのかはここからは視認できなかったが、彼らを一人で片づけたのはあの若い男で間違いなかるう。

だとすればつかまって空呂が無事に逃げおおせられる可能性は今度は極めて低い。暗闇はもう空呂に味方してくれない。相手はランブを持っているのだ。

相手が気付かないうちにここから離脱して任務を遂行する。それが今の空呂にできる最善だった。

「待て……。そこにいるのは誰だ!？」

突然トンネルに大きな怒鳴り声が響いた。空呂は思わず動きを止めた。

男がなぜ自分に気づけたのか空呂には全く判らなかった。何もミスは犯していないはずなのに。

男の足音が十字路に迫り、トンネルに満ちる光が大きくなる。逃げなければいけないとは判っていないながら、体が全く動かなかった。

空呂のほんの十メートル先に男が飛び出してきた。

一瞬、あまりの明るさに目を覆う。男も相手が先ほどの少女だったことに面食らったように動きを止めた。

暗いトンネルには不釣り合いな明るい光源に目を眇^{すか}めつようやく空

呂は男を視認する。

そして、彼の容姿に言葉を失った。

先ほどは隠れていた口元を覆う布がなくなり、男の顔の細部まですべてが明るい光にさらされている。

細く整った輪郭。筋の通った高めの鼻梁。男とは思えないような長めのまつ毛。

手入れもされていなくて伸びすぎた漆黒の前髪はかすかに目にかかっている。

そして、極めつけはその瞳の色だった。

海のように深い瑠璃色。

暗い空間でも光を反射し、明るく光る蒼。

同じあおでも空呂の瞳の色ではない。深い、混じりけのない澄んだ色。

空呂は思わず息を止めた。何もその瞬間に言葉を発することができなかった。

あまりに美しかったから。

そして、目の前にいる人の存在が俄かには信じられなかったから。

少女の脳裏には一人の青年の名前が瞬時に浮上していた。

十年前前に一度だけ会った少年。手紙の中でしかまともに話したことがない高貴な人。

そして今は国中が犯罪関係者として追っている人物。

両親の敵かもしれない、でも、あこがれていた人。

「瑠璃」

目の前の男が思わず瞠目する。

空田の口からやっとこぼれた言葉はたった一言。

その男の名前だった。

第二十三話 運命を告げる風

何が起こっているのか全く理解ができなかった。

目の前にいるのは間違いなくこの国の元王の遺児、瑠璃その人である。

メディアに流れている顔写真も美しかったが本物の彼も息をのむほどに美しかった。だが、今は長い逃亡生活の末に負った腕の傷や疲労のせいでぐったりとして見えた。

「何故、あなたがここに？」震える声で空呂^{そろ}は声を絞り出す。

問わねばならない気がした。この二カ月以上の間空呂を悩ませた問題が解決するとすれば、それは彼の口から語られる物語に依ってに違いない。

問われた相手は一瞬だけ目を見開き、そして何も答えずに抜刀した。空呂から奪った短剣だ。

「！！」

思わず空呂はそれに呼応するかのように腰の短剣を抜く。

瑠璃が手に持っていたランプが床に落ちた。それでもまだランプは明々と光を放つ。

「お前をこのまま帰すわけにはいかない！顔を見られたからには、正体を知られたからには……」

そのあとの瑠璃の言葉は聞こえなかった。聞こえはしなかったが何やら不穏な内容なのは間違いない。

「殺すの？」

空呂は訊いた。何故か震えはおさまっていた。

「見^{ひと}ず知らずの若い女なんて手にかけてくないさ」

瑠璃は悲しそうに笑った。

その一言で空呂は気づく。瑠璃は目の前の灰髪の少女がかつての自

分の文通相手“空呂”だとは思っていないのだ。

自分が文通相手だと判れば何かが変わるのではないか、二人が刃を交える必要なんてないのではないか。あくまで希望的な展開が空呂の頭を駆け巡る。

「すいません。あなたの人生にこんな形でかわる権利は俺にはないけれど、俺には背負っているものがありますから」

青年の瑠璃色の瞳がランプの光に照らされて揺れる。そして、その瞳が色を失ったかのように表情を変えた。

謝罪の言葉。背負っているもの。

空呂はそれを全く理解できなかった。何がどうなっているのか、どうして彼がここに居るのか。

それでも、判ったことが一つ

戦いは避けられない。

キーン！！！！

いきなり空間に激しい金属音が響く。

瑠璃の繰り出した短剣が空呂の脇の空を切った。空呂が必死の形相で払い返したのだ。二本目がすかさず鳩尾を狙ってくる。後ろにたたらを踏みながら躲すと同時に広がった間合いはやすやすと詰められた。

鮮やか過ぎる剣捌きに空呂は必死で応戦することしかできない。右に、左に、目まぐるしいほどの襲撃は巧妙で完全に押し込まれているのは火をみるより明らかだった。

「瑠璃！ やめて、私を見て！！」

死に物狂いで声を上げる。

だが多分声は届かない。目の前の青年はまるで、何かに取りつかれているかのように見えた。

短剣を操る美しい彼は、力強く、恐ろしく、そして　　儚い、

と空呂は思う。

敵陣の真ん中を独りゆく青年。後ろ盾も、協力者も、心のよりどころも失くした。あるものは生にすがりつく本能と一抹の矜持。^{プライド}

空呂にはなんだか少し判る気がする。海と空呂が似ているのとはまた違う意味で瑠璃は空呂と似ているのだ。

同じだ。たぶん。

諦めたくなかった。一度は友人同士として親交を深めた人として切り結びあっていることがいまだに信じられない。

彼を止めたい。そして、彼が握っているはずの真実を聞かせてほしい。

空呂の中に在った封印の場所は完全に開かれていた。疑念、不安、そして怒り。あらゆるものと期待がごちゃまぜのまま空呂の思考を蹂躪する。

止めなければならない。

見えない何かに取りつかれるように目の前の敵を倒そうとする彼。彼の狂気の中に真実があるのだ。

「私は空呂！　ねえ、文通相手をわすれたの？」

空呂の必死の声がトンネルに響く。

だが、すかさず剣戟が空呂を襲い来る。ビリビリッと音を立てて空呂の腕の生地が破れ、同時に激痛が走る。すぐに傷口から血が垂れてゆくのが判った。

どくどくと熱く脈打つ傷口の痛みに耐えながら、少女は叫ぶ。

「聞いて、お願い！」

何故か、涙が出ていた。熱いしずくが頬を伝い落ちる。

怖いのか、悲しいのか、悔しいのか、自分でも今の感情に名前を付けることができない。

気が付いたときには勝手に体が動いていた。

空呂は襲い来る短刀を自分のもので弾くと、そのまま瑠璃の懐へと飛び込んだ。

ドンッ。

相手のしっかりした体躯にギュッとしがみつく。瑠璃の体は熱く、

湿っていた。ごとんごとんと脈打つ心臓の音が聞こえる気さえする。刺されるかもしれない。殺されるかもしれない。

だが、瑠璃は動かなかった。

「瑠璃。私は、空呂よ？ 覚えている？」

震える声に何とか言葉を乗せる。微かにしがみついた彼の胴体が揺れた。

「空呂……？」

上から降ってきた自分の名前を呼ぶ声に、少女はゆっくりと顔を上げる。

目の前には疲労で今にも倒れそうな青年の瞳があった。子供のころ、暗い森の中で見た時と同じ深い瑠璃色。疲れ切り、暗闇を見つめていてもその色合いが褪せることはない。

美しい、そう思った。

彼の瞳に不安そうに見上げる自分の顔が映っていた。まるで海のかなで溺れているかの様だ。

「空呂？」

今一度瑠璃が訊くようにして空呂の名を呼ぶ。

「そうよ。空呂。あなたの文通でのお友達、そうでしょ？ 瑠璃」

諭すように少女は云った。手負いの獣を宥めるように静かに青年の腕をなでる。

狂気に満ちていたその瞳は今は驚きと戸惑いでいっぱいだ。

空呂は微かな安堵をおぼえ瑠璃の体を離す。そして互いを見つめあうと、

「何故君がこんなところに？ どうして？」

「あなたこそ追われている身のはずなのにどうしてこんなところに居るの？」

二人の互いの疑問が重なる。

相手は何者か知れても二人の間には見えない壁があった。

どうしてこんな暗い地下水道で出会うことになったのか、今までどこで何をしていたのか。

相手が何に与しているのか。そして、互いの運命を変えたであろうあの夜の真実はどこにあるのか。互いが互いを疑い、戸惑い、唐突なこのなりゆきの收拾のしかたを見つけれないでいる。

そんななか、口を開いたのは瑠璃だった。

「痛むかい？」

一瞬何を言われたのかが判らなかったが、彼の目線の先の自分の血濡れた腕をみて意図を理解する。

「平気よ。痛いのは今だけ。傷もきつとそのうち治る」

「本当に、すまない。俺は、君を殺そうとした」

青年はどうすれば良いのかと迷いながらも言葉に出した。そして、自分のシャツの裾にナイフを突き立てると切り裂いて空呂の腕にあてがう。自分の傷の手当てをしたこともあるからか慣れた様子で傷をさらに上から縛る。

「今はちゃんとした止血帯もないから、応急処置で悪いけど」

瑠璃の声色には申し訳ない、というような気持ちに滲み出ていて空呂は安心する。そして同時に僅かながら苛立ちを感じる。

「良いの。そんなことは良いの。私が知りたいのはそんなことじゃない」

「……」

空呂の言葉に微かに瑠璃の動きが鈍る。彼もまた、空呂の知りたい物事は何かは判っているのだろう。

だが、彼はすぐには答えない。何かを推し量るかのように空呂の顔を見つめる。

「話をしましょう瑠璃。私は知りたいの。どうして時雨谷がこんなことになったのか。あなたは何を知ってるの？」

やはり彼は何も答えなかった。そして少しの躊躇のあと疑問を口にした。

「この短剣は君のものかい？ 時雨谷の長は御存命でいらっしやる

のか？」

瑠璃が微かな光の中で空呂の短剣の柄を指し示す。

そびえたつ山の中に生える美しい山百合を模した図案。時雨谷の紋章だ。百の部族の中でもとりわけ豊かな山の恵みを享受する時雨谷、その象徴は芳醇なる百合と呼ばれる。

エンブレム
紋章を指し示された空呂は答えに窮した。

短剣の所有を認めることは自分の所属を明かすことでもあったし、惺良という長の知られざる後継者の存在を知られるわけにもいい。

しばしの迷いの後、空呂は逆に問いを返した。

「あなたやあなたのお母様は、私たちに仇なす敵なの？ あの夜陛下が死んだ夜に何があったのかを教えて。そのあとで私は切るべきカードを決める」

先に自分の手の内を見せるわけにはいかない。どちらも先手を切りたくないのは互いに百も承知だ。だが、空呂には地の利がある。対して、瑠璃に味方がいないのは明白だ。

何を最初に訊くかは大きな問題だった。でも、まずは何よりもあの日の真相が知りたかった。

彼も空呂の言いたいことが判ったのだろう、瑠璃は少し考えを巡らせるような仕草をとるとすぐに「わかった」と答える。

「ただし、長い話になる。ここに長く留まりたくはない。移動しながらでいいか？」

先ほどの十字路の方へ視線を向けながら言う。

「奴らが起きたら厄介なことになる。なるべくなら人を殺めたくはない」

瑠璃の言葉に肯いて同意すると彼は持っていた短剣を床に降ろし、十字路に戻る。空呂地面に転がっていたランプと短剣を拾い上げると後に続いた。

十字路には頭や足から血を流したまま気を失った兵士たちが重なり

合つように倒れている。手早く彼らに駆け寄ると彼は汚い袋を一つ拾い上げる。

「奴らから奪った非常食と常備品だよ」

説明をしつつも瑠璃はその道で折れることなく、十字路まで戻り、先ほどの道をさらに直進する。

「向こうに長剣を二本置いてある。それを取りに行きたいんだ。構わないか？」

「長剣？」

「王宮から持ち出したもので母からの贈り物だよ。こんな狭い所じや扱いづらいんで奴らを襲撃するときに置いといたんだ」

そついうと彼は急に立ち止まって「あつた」とつぶやく。見れば確かに立派な二振りの剣が壁に立てかけてある。

「君が持つててくれ。その方が安心だろ？」

彼の言葉に首肯すると空呂は二振りの剣を腰に差す。

「とりあえず、このまま真つ直ぐ進んで遺跡の階に上がろう。その方が追つ手を気にしないでいられる」

彼は空呂の前に立つて暗闇に続いていく地下通路を示した。

「地下生活は長いの？」

「いや。地上にも出るよ。俺はいま、時雨谷の長様との面会を望んでいる。風見ヶ岡の無実と今後の協力を仰ぐためだ」

さりげなく彼は自分の要求と目的を言葉に織り込んだ。空呂は驚きの目を持って彼の背中を見つめる。

「さっきの質問にまず答えるよ」

瑠璃はゆっくりと空呂に向き直り、真つ直ぐにこちらを見つめた。

「君とのあの邂逅と友情に誓つて、風見ヶ岡は時雨谷に仇なすものではない。あの夜も、そしてこれからもだ」

彼の声の裏に秘められた思いが空呂にはわかった。ほんの数日前に自分がラウを言いくるめた時と同じだ。

何も信用できる証拠や条件は提示できない。それでも相手を信用さ

せ、自分の立場、考え、計画といったものを相手に了承させなければならぬ。

それは虚勢を取り繕いつつ、相手の芯に訴える言葉。渾身の文句の
はずだ。

彼が選んだ言葉は“邂逅と友情に誓って”だった。

チリリとかすかに空呂の右目が疼く。土砂降りのあの夜、王座の寶石に誓った友情の誓いが頭の中をめぐった。

運命の系にひかれるようにして空呂はここにいる。惺良の生徒であつたこと、瑠璃の友人であつたこと、ラウの信用を勝ち得たことあらゆる運命がここにきて空呂という点で交じりあおうとしていた。

「母が死んだあの夜の話をするには、少し時を遡らなければならぬ。母が死ぬ少し前のこと。俺が彼女と最後の会食をした夜のことだ」

瑠璃は静かに語り始める。二人きりの地下水道にかすかな風が吹いた気がした。空呂の灰髪が僅かにそよぐ。

しゅるしゅると運命の系を引き寄せる音がする。彼の口から語られる物語はすべての風向きを変えてゆくのだろう。

直感ではあつたが確信を持てた。真実を覆うベールの裾が新たな風にはためく。

まだ見ぬ真実の奥で嗤う道化の声が聞こえた気がした。

「母は圧力をかけられた。おそらく王の地位を妬む者によって。そして王印を勅令書に押した。おそらく、何の命令かも知らないまま

に」

全ての出来事を話し終えた瑠璃の言葉は震えていた。

「俺に残されたヒントは彼女のメッセージだけだ。ここにある」

彼は立ち止まると懷から油紙に包まれた小さな小瓶を取り出した。小さなくしゃくしゃの紙片が入っている。

「書かれているのは数字の羅列。インクではなく血液で書かれてる。おそらく一瞬の隙について自分の指でも針で刺したのだと思う」

彼は小瓶のコルク栓を抜いた。紙片が中から彼の掌に転がり出る。

「見て」

言われるままに瑠璃の掌から紙切れを摘み上げれる。丁寧に開けば、そこには確かに文字の羅列があった。

「T542 - 21 - 12」

何の意味もなさない文字列。そこにあるだけの存在。

その一行は、少女の前に新たなる謎を残す。

だが一つのおおきな事実が目の前に立ち現れたのは間違いない。

「でも、これではつきりした。敵はほかにいる。おそらくまだ首都に」

「信じてくれるのか？」

「あなたは、私との邂逅と友情に誓うといった。王座の宝玉は信頼と約束の礎となる、あなたが教えてくれたのよ。実をいうと、あの時右目が疼いた。あなたが偽りを述べたらどうなっていたかしら？」

瑠璃は何も答えなかった。

「魔法を忘れた現代に生きる私が魔法を信じたら駄目かしら？ 偶然だとかたずけることは簡単だけど、ここでこの再会を蔑ろにした^{ないがし}らきつと後悔する気がするの」

空呂は少し笑った。

「探しましょう、真実を。私は伝説の中の人みたいに千の瞳は持たないけれど、ここには四つの瞳があるでしょう?」

空呂は自分の両目と瑠璃の両目を指さす。

「しっかり見れば、見えてくるものがきつとある。そしてすべての真実を白日の下に晒してみせる」

細い糸を手繰り寄せ、その将来を見る。そこに何があるうとも。

心は定まった。

「ああ。ありがとう」

瑠璃が深く頭を垂れる。微かにその肩が震えていた。

空呂に与えられたカードは二枚に一つ。

どちらをとろうとも先の困難は見えている。だが、迷うことはなかった。

元の任務の難易度が格段に上がっただけのこと。手に入れた一片の真実を掌に握りこむ。

「闇に消えて行って良い真実なんてない」

海が言っていた言葉を空呂はつぶやく。王とその息子を襲った悲劇もまた然り。

彼（海）に会いたいと思った。

そして、礼を言おうと思った。

地下水道を二人は往く。

どこからともなく微かな風が流れ、若者たちの背を押す。風は確かに変わった。

それが何を連れてくるかはまだ判らなかったけれども。

第二十三話 運命を告げる風（後書き）

ここからは二週に一回くらいのスピードで投稿したいなと思ってます。無理かもしれませんが頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4846c/>

千の瞳の王

2011年10月10日14時08分発行